

1977年8月20日、和歌山県湯浅町は挙げて、西り演第16回総会を歓迎した。駅頭の看板が、くりこんだ西り演90名の度肝を抜いた。



東り演ゼミのモデル上演・小島真木作「旅立ち」の舞台。博之と千里のいたいけな会話に客席は固唾をのんだ。

東り演ゼミ全体集会、求める、覚める、もとめる・顔・顔・顔
おれが写っていない！ごめんなさい。これはカット。



新劇が松竹新喜劇の脚本を

とりあげた理由について

道井直次

(演出家・関西芸術座)

まずはじめに

関西芸術座が、「初代桂春団治」を上演するというところで、関西のジャーナリズムは各紙とも大きなスペースをさいて、宣伝してくれた。いや、ジャーナリズムだけではない。会う人ごとに、「なぜ新劇が松竹新喜劇の十八番を上演するのか」と質問された。この一ヶ月、そのための答弁を書いたり、話したり、かなりの労力を費した。内心、何のためにこんな弁明をしなければならないのかと、ためらい、怒り、ほくそ笑み、それでもせつせと弁明にこれつとめた。そして、あげくの果てに、「演劇会議」の編集部からも、同じような原稿依頼に、またせつせと筆を走らせているというわけである。

それにしても、上演してからの観客の声を面白い。大別して、二通りに類別される。一つは、「松竹新喜劇の脚本も新劇で出来るのだなあ」という意見と、「もつとバツと明るい舞台を期待していたのに、くらい悲しい芝居だった」という意見である。前者は讃辞であり、後者は批判なのだが、質は同じだと見てよい。わたしとしては、この両者の御意見とも満足なのである。

猿真似からの脱出

すでに御承知のことだと思うが、「新劇」は西洋かぶれからはじまった。明治になつて、江戸時代三百年の鎖国のための「おくれ」はひどかったし、それを実感したのは、日本

人自身であったに違いない。明治政府は率先して、その「おくれ」をとり戻すために、西歌の文物をとり入れ、西歌に学ぶべきを説いた。しかし、明治維新は改革であつても、フランス革命のように、封建主義や身分差別をくつがえす革命ではなかった。だから、価値観はくつがえらないで、明治になつても、封建主義や身分差別は温存された。なるほど、着衣や、頭髪や、建物などのような外形はみごとに変わったが、内面や思想はそのままとなりと移行した。

演劇も御多聞にもれず、歌舞伎はそのまま残ったし、新らしく生れた苦の新派も結果的には歌舞伎に追いついた。江戸時代の演劇を、思想的にも表現的にも踏襲しながらも、上演するところは西洋建築の劇場という皮肉な事

感が生れたのである。つまり、西欧の文物をとり入れ、西欧に学んだのは、外形ばかりだったのだ。

このような状態にいたたまれなかったのは、進歩の気象に富み、自由の精神に備れた知識層であった。そして、封建思想をすてて、進歩自由を獲得するためには、西欧の現代劇（近代劇）をとり入れることしかないと考えた。そのためには、庶民大衆に支えられ、伝統の流れをふんだ歌舞伎や新派と断絶することによってしか成就出来ないと決めた。

根強い封建思想と、それに支えられた大日本帝国主義とは、全く違った角度や時点から演劇を生み出そうとした苦しみや努力を認めながらも、新劇の誕生は不幸というより他はない。庶民大衆と離別し、歴史や伝統とたもとを分ち、生れ、育った土を棄ててまで、異国の演劇を徹底的に猿真似することから出発しなければならなかったのである。

そして、明治、大正、昭和と、今にいたるまで、その猿真似はつづいてるし、猿真似することが「新しい」と、誤解や錯覚してゐる傾向が強い。それは、新劇の世界だけではなく、音楽、バレエは言うに及ばず、フッ

ッションなどはその最たるものであろう。その新劇の末裔の後塵を拝しているわたしなども、20才代はフランスやイタリヤの演劇にうつつをぬかし、その諷刺、紹介、本邦初演に血道をあげたし、さらに、サルトル、カミュ、アヌイの実存主義、スタニスラフスキ・システム、ブレヒト、イギリスの怒れる若者たち、アグモフ、イオネスコ、……などと、その彷徨は40才ぐらいまでつづく。

「勉強」「研究」「追求」「探究」「向学心」「摂取」などと言えばカッコはよいが、少しも、日本の土に定着せず、庶民大衆を理解せず、新劇という小さな村に満足をして自分の腹が立ってきたのが、40才を過ぎてからで、全くおそきに失したきらいはある。

しかし、おそまきながら、離別した庶民大衆と接近し、たもとを分ちた歴史や伝統の上に位置し、生れ育った土に根ざした仕事にしまなければならぬ、日本的であり、地方的であるということは、偏狭な国家主義者や民族主義者や、保守的な地方や地域の長老などの言うセクシ・ナリズムにおちいることではなく、それ故に世界的であることを立証してゆかなければならない。そのような当然すぎるほど当然な論理の上

拒していった事実を否定することは出来ないだろう。しかし、それにもかかわらず、大衆演劇のなかには、しいたげられたものへの悲しみ、怒り、苦しみ、喜びがこめられ、庶民大衆の心情が底辺になっている。そこには、江戸時代の歌舞伎以来、権力のためにおびやかされ、あるいは抗い、あるいは流されてきた庶民大衆のいつわらざる姿が反映されているのである。

新劇が大義名分のために、心情をいつわつてまでも、理屈に徹しようとした「つめたさ」とは違って、甘いも酸いもかみわけた「あたなかさ」がたまたまようのである。たしかに、そこには、時代をすすめ、社会をきりひらくよりも、時代に流され、社会を閉ざしてしまふ弱点を指摘しなければならぬが、その弱さもふくめて、庶民大衆のいつわらざる心情を学ぶゆとりを、わたしは新劇は今こそもたなければならぬのではなからうか。

その大らかな余裕がないかぎり、庶民大衆の血肉のかよった演劇も生みだされないう。理詰めでない進歩自由もかちとれないだろう。とくに、西欧の近代劇という、写真的レアリティを必要とした演劇を母胎とした新劇は、舞台のレアリティを知る上にも、歌舞伎

をはじめとする、いろいろの大衆演劇の表現術を学ぶ必要があるだろう。歴史の上に立つた西欧の近代劇を、歴史の上に立たずして、表面的に模倣した新劇の弱さを謙虚にかみしめてみる必要があるだろう。

大衆演劇の弱点、欠点を充分に見通しながらも、そこに流れる庶民大衆の心情を理解把握することは、今こそ必要なことではなからうか。

大正の典型的人間——春団治

だからと言って、わたしたちは大衆演劇のすべてを摂取しようというのではない。正直に言って、そのほとんどが摂取したくないものである。うけんかなの姿勢で、必要以上に無理に泣かせ、無理に笑わせ、虚飾で舞台を展開するのである。

大阪の土地に生れ、根づき、育ったわたしは関西芸術座が、同じく大阪に生れ、根づき、育った松竹新喜劇の脚本を上演しようということになって、渋谷天外さん（ペンネーム・館直志）に、自作脚本を自選してもらった。しかし、そのほとんどが義理人情に裏づけられ、その戯曲の展開も空転しているもの

に立って、わたしたち関西芸術座は、創作民話の劇化や伝統芸能の模倣などにも意欲を燃やしてきたのである。

しかし、そのレパートリーは、常に新劇側の作者によって書かれてきた。そのこと自体は意義があるのだが、大衆演劇そのものの脚本と対決する必要があるのではないかと思うようになってきた。

庶民大衆の心情の把握

俗に「商業演劇」と言われる大衆演劇は明治の歌舞伎・新派以降、色とりどりの演劇をつくってきた。自立自営で、進歩自由の演劇を創造してきた新劇にくらべて、大衆演劇は興行資本の利潤の追求のために利用された。封建主義的な義理人情も、人間の劣情をさそうエロチシズムやグロテスクも、侵略戦争をすすめた大日本帝国主義のお先棒かつぎも、ありとあらゆる形で、「もうけ」になるものなら、興行資本は合理的な武装のもとに、多くの大衆演劇をつくっていった。

そこには、庶民大衆の保守性を助長し、その劣情を刺激し、あやまった戦争を美化して、思考しない国民づくりに、大衆演劇が加

が多かった。なるほど、役者の即興的な芸によって見せる類のものだと思つたが、一作だけが違った。芸にとりつかれた一人の落語家が、己れの非人間性に気づいたとき、死に急転するといったドラマツルギーが、アリストテレスの「詩学」の理論にかなっていて、度肝をぬかれた。これが「初代桂春団治」なのである。

ただ、当時の松竹新喜劇の役者にあてこんだセリフの数々が気になつたし、笑わせる必要もないのに笑わせたりする箇所が無意味に思われたが、それが些末的だと思えるほど、よく出来た脚本だった。

この「桂春団治」は、天外さんに言わせる、「実はわたしの父のことを書いた次第で、春団治の伝記とは大いに違っています……」と前置いて、「春団治にしても、父にしても、共通点がおまして、わたしは大正人間の典型みたいなものを書こうと思ひまして……」とおっしゃる。

そこで、わたしはわたし流に註釈を加えることにする。大日本帝国主義的資本主義の発達と、世界的大恐慌と不況の時代のなかで、刹那的エネルギーを発散して、破壊的な創造を、無目的

にせつなくおしすすめた「はみ出し人間」ということになる。春団治の型破りの日常生活は、帝国主義の規則づくめの社会に対する抵抗であり、彼の破天荒な落語の創造は、物憂い庶民大衆に対する爆発的な笑いのプレゼントであった。もちろん、春団治が意図してのことではない。第六感のなせる業である。

創造への異常な執心は、女泣かせにも異常なエネルギーを発揮したと見ていい。常識では、アンバランスな行動だと言えらるが、春団治はそれで結構バランスをとっていたという他はない。それほどエネルギーが豊富な人だったのだから。しかし、ひとたび自分の行動に非人間性を発見したとき、彼は死へ急転してゆく。つまり、わが子に対する無責任の自覚である。それでいて、死ぬ間際にいたるまで、看護婦の尻をなでていたというつくり方は、しめつばくなく、ドライで、巧い。

春団治の常識破りの破天荒は、現代でも及ばないテンポの早い落語の語り口、奇想天外な日常の破目を外した行動、派手な衣服、恰好、女房を三度変えた私生活、をはじめ、にぎやかな女関係、湯水のごとく使う金使いの荒さなど、数えればきりがなく、

この誰にも出来ない破天荒の行動が、未来

のない大正庶民の憧憬であったのだろう。天外さんが大正人間の典型を書きたいという意欲はよくあらわれている。ただ、反体制的な破壊的抵抗はあったが、未来的な建設性があった。天外さんは、冥途の旅に出る春団治に、「しもた、大阪落語の古い型つづすことはつぶしたけれど新しいもん残しとくの忘れた。ええわい、誰かがどこかでそれをやってくれるやろ」と言わしめている。このセリフは、春団治の一生を一言のもとに批判しながら、未来性を語っている。理屈っぽい新劇のセリフより、ズシンとくる人間的なひびきをもったセリフなのだ。

春団治像の新劇的変貌

このようによく出来た「桂春団治」の脚本なのだが、時代背景が全く描かれていないのにおどろいた。つまり、時代とか、社会とかをきりはなして、家と人間関係のなかで、芝居をつづってゆくドラマツルギーなのだ。だから、はじめ一気に読んだときは、せいぜい十年間ぐらいの出来事だろうと思っただけだが、春団治の年譜などをあたってみると、三十年近い間の出来事であったのにも、二度お

どろいた。改めて、時代や社会を無視して、戯曲が成立することを知ったのである。だが、これだけは我慢が出来なかった。天外さんの「料理は御自由に」という寛大に甘えて、台本・演出という名目で、脚本を少々いじらせてもらった。

日露戦争の勝利（明治38年）からはじめて、日露戦争のはじめ（昭和9年）に至るまでと設定し、スライドで字幕や写真によって、時代の流れを明確にし、その流れに反逆する庶民感情を風俗的に浮きぼりにしようとした。当時の流行歌を流したり、歌わせたりしたのもその理由による。

具体的には、第一幕第一場、箱屋を酔客に変えて、「日本勝った、日本勝った、ロシア負けた」を歌わせ、戦勝気分をただよわせ、第二場では、その雰囲気によって、大島が、歌舞伎役者駒七を、「大日本帝国の誇るべき女形」と賛美し、逆に春団治をののしって、春団治を怒らせることによって、彼の反体制的な破壊性をうきあがらせた。

第四場では、第一の女房おたまに、春団治の落語は、戦争中の国民のくらい心や、戦後の国民の不景氣を明るくさせるものだと語らせた。

第五場では、明治天皇崩御にことよせて、明治天皇がつくった教育勅語を春団治が皮肉る。即ち、規則づくめの教育勅語は、君に忠に、親に孝に、仕末せよ、喧嘩するな、夫婦仲良うせよ、と氣に入らぬことばかりだと、春団治は酒屋の池田屋に語る。

第七場、第二の女房のおときと別れるにあたって、春団治は、自分のやりたいことは、不景氣願して、うろちよろしている客を、ドデカンと陽氣に変えることで、子どもをひきの上に抱いて、マイホームにおさまるかえっている男になりたくないと言わしめる。

第二幕第二場で、別れた第一の女房おたまから、不景氣願の客を陽氣に変えるという大義名分にあぐらをかいて、芸のきびしさが分っても、人間としてのきびしさが分らない男だと批判させ、この一語が、春団治の急転のモメントにした。

他に、多くのセリフのカットとともに、脚本の弱点をおぎない、わたしなら新劇としての立場から、上演台本づくりを履行したのである。

その結果、舞台は、「時代をきりひらき、それ故に、時代におどらされながら生きつづけた、さびしい落語家の一生」というよう

に、松竹新喜劇とはおよそ遠くかけはなれたものとなった。たしかに、枯すすきなどの大正メロデーをバックにした、さびしい道化の一生にちがいない。大げさに言えば、大日本帝国が、国民の生活感情を無視して、ガムシヤラに大恐慌をおしきっていった歴史、その社会と時代の相関性の中で、春団治をとらえようとした。それが、わたしなら関西芸術座の上演の立場である。

現代への蘇生

わたしは松竹新喜劇の脚本を、松竹新喜劇に上演しようとしたのではない。松竹新喜劇が庶民大衆に支えられてきた必然性を正しく学びとるとともに、一方、興行資本に毒されてきた欠陥、弱点をとりのぞき、わたしたちなりの視点から、新劇的に正しく上演しようとしたにすぎない。

「大衆演劇に妥協するのか」とか、「興行資本に媚びへつらうのか」というような愚かな意見は問題にしないまでも、どうして大衆演劇の脚本を新劇が上演すると、これほど問題になり、話題になるのか、少々腑におちないことである。

フランスのブルヴァール劇、——たとえば、ルッサンの作品を新劇が上演すれば首肯する人が多いのに、日本のブルヴァール劇——館直志の作品を新劇が上演すれば、なぜ問題になるのか。フランスの大衆演劇なら新劇で、日本の大衆演劇なら新劇と無関係とも言うのか。日本の新劇界は、観客をふくめて、そのようなおいがいまだに立ちこめている。それほど、明治以来の西欧志向性はぬききれいでない。

それにしても、渋谷天外なる人はフランス新劇をよく勉強している人である。天外さんのネタは、モリエールであり、マリポーであり、ポーマルシェである。フランス古典新劇の手法を真によく生かしている。「桂春団治」の大詰の場は、実にしゃれっ氣充分である。死んだ車夫の方さんが、今死にかかっている春団治を迎えにくる。そして、春団治は、生の床と死の車の間をゆきつもとどりつして、生と死の世界をさまよう。フランス的エスプリを、みごとに日本の土壌に生かした佳作というべきだろう。つまらないフランスのブルヴァールよりも、よほどフランス的にこなされた日本のブルヴァールと言うべきだろう。

そのような観点に立ってでも、「桂春団治」は、新劇として通用するのである。

新劇と大衆演劇の断絶は、両者の問題である。新劇のエリート性は、無意味に大衆演劇の反感を買っているし、大衆演劇のひらき直った権力への追従性は、新劇との溝を大きくしている。はたして、演劇とは何なのかを追求するとき、新劇と大衆演劇を対立的に考え、てゆくことの愚かさを感じる。

新劇として蘇生させるべき大衆演劇は多くあると思う。蘇生させるには、やはりわれわれ新劇の主体的な姿勢が問題であろう。わたし個人の立場としては、新派の「不如帰」「金色夜叉」、長谷川伸や菊田一夫の諸作品など、社会性やドラマツルギーの点でも、上流可能なものがあると思う。

わたしたちの「桂春団治」を見て、松竹新演劇の作品がどのように変貌したことにおどろいた観客は多い。同時に、今までできなかったことをなしたわたしたちの喜びは大きい。明治の新劇がきりはなした庶民の生活感情を、昭和52年という現代の時点ですなご合わしたという実感があるからである。

そのわたしたちの苦勞も知らずに、「やはり新劇は新劇なりに、館直志の脚本ではな

く、新劇の劇作家に新しい「桂春団治」を書かせるべきだった」という意見は、愚かだと思ふ。既成の新劇概念にとりつかれて、問題を前に進めてゆこうというわたしたちの思いを分けてくれない。

新しいものにとりつかれるだけが新劇ではない。古いものを新らしく蘇らせる仕事も新劇であることを、この機会にはつきりしておきたいと思う。

天外さんの、「わたしの脚本を、新劇さんがやってくればなるのも、もうそろそろそんな時代になってきましたのやなあ」という言葉を思い出した。たしかに、そろそろそんな時代になってきたのである。能を、狂言を、歌舞伎を、文楽を、新派をというように、古いものを新らしく蘇生させる仕事も、新劇の重要な課題になってきているし、その先例もいっくらかはある。新演劇を蘇生させたとはおこがましくて、とても口には言えないが、それに近い仕事をしたと思うのだ。

それにしても、物珍らしさにとりつかれることはやさしいが、伝統をいかに現代に蘇生させるかは、いかめしく、苦しい仕事である。それを、今更ながら深く知りつつ、続けるべき仕事である。

作間雄二戯曲集

予約募集中

収録作品

津軽ばか塗り
浅草象潟あたり
津軽謀叛人始末
おりん口伝
秘 密
喪の季節
西津軽郡車力村
雪 夜
八戸無産者診療所

一九七八年三月発売予定

予価三〇〇円(四六版六〇〇頁)

「作間雄二戯曲集」刊行委員会

036 弘前市松原一丁目二の三二

阿部方

TEL 〇一七二(七七)三五一三

地域にねざす演劇の先進地で

開かれた・第十六回西り演総会

森本景文

(劇団未来)

一、和歌山の湯浅という町
一九七七年八月十九日(金)夕方、西り演第十六回総会に先だつての運営委員会出席するために「湯浅」の駅におりた途端、空いっばいの打あげ花火に度肝をぬかした。

駅頭には「歓迎ノ西日本リアリズム演劇会 譲御一行様、豊かな演劇創造のために、湯浅町観光協会」の道一杯の横断幕と、更に、「町役場と劇団いこら」署名いりの大看板が出迎える。

街は浴衣がけの人びとでぎっしり——栗原さんの家の前などは、なつかしいアメチレンガスの臭いが漂い、夜店が出、身動きもできない。

西り演総会のために、花火があがり夜店がでるとは？——いくら和歌山一の革新町政で

あろうと、全国に名高い劇団「いこら」であろうと、ちと派手すぎると——思つたら、毎年お盆過ぎに開かれている「花火大会」と「盆踊り大会」が、二回にわたる箕島(湯浅の隣町)のコレラ騒ぎで延期され、総会とぶつかつたという次第。花火大会のホスターをよくみると、「戦没者供養、コレラ一掃」というタイトルがついている。この「花火大会」や「盆踊り大会」は、元「いこら」運営委員長の楠本さんが、町役場の企画課長として中心になって裏廻しているという。ところが、運営委員会の会場に着いて驚いた。それが、総会の準備のために、「いこら」や「和歌山演集」の仲間とともに、受入れ事務局の中心に座っているではないか。

Q「頭ちゃん、町役場の仕事は？ 花火大会や盆踊り大会があるんやろ？」



頭ちゃん「手打つて、他の人に任せてきた、もう運営委員会ならむつかしいこと止めて、久しぶりや一杯飲もうかいな」
打ちあげ花火がボンボンあがる最中に会議などできる筈もなく、湯浅湾の突堤の特等席で、続々とあげられるショーを観せてもらった。

海に反射する空中の大デモンストレーション

ンは、漁師町湯浅の人々のコレラ一掃にかけ
る気概をあたるの見事に風物に反映し、そこ
ここで語られる湯浅弁と融合して見事であっ
た。

福岡現代劇場の猿渡さんが、「ここは人間
の住む街ですね」と感慨をこめて言われたの
を、全く同感の思いで聞いていた。

人口一万七千の湯浅に革新町政が誕生して
六年半——以前一團しかなく希望者七十人に
一人しか入れなかった保育所が、今では五團
もできあがり、希望者は全員入所できるとい
う。

海岸の近くに野外劇場ができあがり、子供
たちが泥だらけになって「兵隊ごっこ」もで
きるという大遊園地も企画中とか——。県下
一の福祉行政をめざす湯浅革新町政は、革新
地方自治体の「文化政策のテストケース」と
しても着々と実を結びつつあると実感した。

翌朝は、五時起きで猿渡さん、栗原さんを
始め七人の仲間が、湯浅一の漁師さん（町長
の漁師後援会の責任者）の指導で神釣り——
三百四匹のカツオ・サバ・アジを持ちかえる。

これは、夜の「交流会」の酒の肴になるの
だ。酒・ビールなどの飲みものは、全部地元

の人からの寄付だという。

第十六回総会。ところ●和歌山湯浅町総合
センター。とき●八月二十日二十一日。参
加●加盟二十四集団（九集団欠席）と個人
加盟、賛助、来賓などを含めて九十三名。
（この総会を機に、山口県徳山市劇団草の
実が新加盟）

総会の会場となった「総合センター」は、
被差別部落のど真ん中にある。

八年前前に「いこら」の「呑んだくれ」を
観るために、始めてこの町を訪れた時と比べ
て、何という変貌か——。ゴミゴミしていた
家並は取りはらわれ、改良鉄筋住宅が整然と
並び、この総合センターをはじめ、保育所、
教育会館、県の出張所など、堂々たる公共施
設も被差別部落の中にある。
町のご厚意のマイクロボスが、駅からこの
会場まで運行され、なつかしい顔が続々と到
着する——。

八月二十日（土）午後二時開会
議長あいさつ

地元歓迎のことば
議長選出（杉本 進・森本景文）

基調報告（仲議長）
事務局報告（岸本事務局長）

特別報告（劇団ファーベル・劇団大阪・
劇団いこら）

各劇団報告
いこら「ともだち劇場」観劇（五時より
五時四十分）「裸の王さま」

夕食
各劇団報告のつづき

地元の人たちと交流 ①（盆おどりに参
加）（八時半より九時半）
（ファーベル、息吹・未来が
太鼓披露）

地元の人たちと交流 ②（酒・ビールな
どを飲みながらの交流会）

八月二十一日（日）午前八時より
朝食

討論
昼食

討論・決議 午後四時閉会

二、基調報告のぬきかき

動の場になることを期待する。

三、特別報告からのぬきかき

(一) 尼崎・劇団ファーベル
某企業の労務鑑賞サークルから、演劇サー
クルとして七二年に発足。尼崎市民六十万人
に創造を広げたいと、二年半前に地域劇団と
して再編成、構成員十六名で出発した。

舞台創造そのものしか観客を掴めないと、
稽古量を多く長くとってきた。創造の拠点で
ある稽古場も借りた。

ところが、約半年前より劇団員が五名に減
ってしまった。（総会には、五名全員参加）

その原因は、最近とみに仕事に忙がしく、
仕事を家へ持って帰ってやらねばならぬこと
や、演劇をやっていることで、差別されるこ
とである。

「働きながら芝居をつくる特長」が解らな
くなり、いっそ、職業劇団になった方がうま
いくのではなにかとも考えている。

(二) 劇団大阪
劇団創立以来、①稽古場づくり ②五十名
の劇団員 ③専従者をもつ ④地域移動公演
をもつ ⑤年間観客数五千名を突破する——

状況をつき破るために、「春の演劇まつり」
にとりくんだ実践に学んでいきたい。

(二) 創作活動

今年比去年に比して若干の増加をみせては
いるが、いぜんとして「創作活動」が貧困で
ある。

その中で、大阪自演連の春の演劇まつり参
加九作品の内、三作品が創作劇であったこと
は特筆に値する。「拝啓・村長さま」と

「選挙カー」の二作品は「村の保守性」と
「企業ぐるみ選挙」という今日の社会状況と
まともに取りくんだ作品として注目したい。

又、「巡礼殺人事件」は、かつてのファシズ
ムが今も温存されている状況を、多様な形式
で観客にみせる試みをしており、創造を由広
く豊かにする努力を評価したい。

四 西り演としての組織活動
この一年、運営委員会が組織的機能を十分
に果たすことができず、「ブロック活動」も
不活発に終わった。現在の運営委員は、各劇団
の中で多忙な任務と責任をもつ人びとであ
り、劇団の状況によっては、直ちに西り演の
組織活動にはね返ってくるのは必然である
が、今総会が、私たちをとりまく困難な状況
に立ち向える確信と、その実践への新しい胎

(一) 私たちをとりまく演劇状況

加盟劇団は、レバ選定で苦悩し、指導部が
困惑と動揺を示し、去年に比べて衰退傾向に
ある。

観客も、高度経済成長のひずみと不況の波
をうけ生活が苦しく演劇を観る余裕がない。

労働者は、職場の合理化と、人権問題にま
でおよぶ赤攻撃をうけている。

地域破壊、教育の選別化、管理社会、文化
的傾倒は、現体勢とその補強勢力によって進
行し、人間性否定がますます強まっている。

こういつた中で、私たちは今、たじろく自
分自身を叱咤し、押し流される仲間をひきあ
げねばならない。

(三) 二つの「まつり」の成果
多くの演劇が、演劇のもつ「まつり性」を
見失って久しい。私たちは、そのことに無関
心でなかったので、「地域」を語り、「リア
リズム」を論議し、演劇の「大衆化」に努力
してきたが、まだ上っただけの探索におわ
っていた。

ところが、広島月の月曜会が「ジョー・ヒ
ル」の公演で、後へは一步もひけないところ
から、労働者の「まつりの復活」をもくろ
み、大阪の自立劇団連絡会議が、大阪の演劇

というように、具体的目標をもち、それをひきつづつ消化しながら発展させてきた。

この一年間は、ほとんど公演をやつて、創造面での低潮を打ち破らうと、九本の芝居をつくってきた。

その中で、劇団員のほとんどが舞台を始めたという成果はあるが、忙がしすぎて劇団の中がギスギスしている。「ひしめきあう不毛の季節」公演後、それに対処するために、「二十六才以上の会」を開いたが、お互いの役のけなしあいになり、喧嘩が起つた。

中心メンバーの年令も高くなり職場と劇団との矛盾が拡大し、稽古場維持のために月額四十万円捻出しつつけることも苦しい。

「大阪春の演劇まつり」は、①二年前の合同公演「ぼんどり騒乱記」の「まつり」を継承する ②府青少年活動振興協会（府の外郭団体）と提携する ③創作劇を多く出す

ということ、九団体が八作品を持ちより、創造的に熱気が溢れた。観客総数一七九九名で財政的には、二万円強の黒字となった。舞台成果の点で、十分な「まつり」にはなりきれなかったが、大阪の演劇状況をかえる糸口はつかめたと思う。

③ 和歌山・劇団いこら

・ジャズ演奏家など九団体・四十四名の色んな人が集つてきて、上演の結果、そう棄てたものでないと思つている。

創り方としては、従来は、芝居のテーマを客席に伝えることに責任を持つ——とやつてきたが、今回は、「稽古場で創る楽しみを確保し、それをぶつけよう」ことに全力をあげた。稽古が楽しいと、本番の舞台では、それがはち切れるように客席までふくれあがっていく筈である。

色々と思いつきの稽古をしたが、創る側の自主性、創造性が出て来た結果、ある程度の舞台成果があつたと思う。（月曜会・木々の会）

④ 演劇をするということとは？

・去年秋、それぞれが一人か二人でやれるレバを選び自分でつくり持ちより公演をやろうと試みて失敗した。集団としてのアンサンブルの名のもとに「個人主義的技術偏重」がはびこり、創造行為を通じてお互いに高まりあう関係が薄れている。私たちは、今社会で「生きていく」というより、受動的に「生かされている」。演劇を創るということは、そういうものへの思想斗争である筈である。自

結成以来十三年、徐々に演劇以外の役割りが大きくなり創造能力が衰弱してきている。

現在劇団員十五・六名だが、実働は八名位。ここ三年間、大人の芝居を創つていないが、子ども自身が舞台をつくる「ともだち劇場」に取りくんできた。今秋には、「きのくに民話シリーズ」を創るつもりだが、今回の総会には間に合わないの、今日は「ともだち劇場・櫻の王さま」を観てもらおう。

これからの「いこら」は、地域の変貌や政治状況に対応した非専門地域劇団としての生き方をみつめていかねばならぬだろう。その為、自分、有田郡以外には公演活動には出ない方針を出した。

四、各劇団よりの報告および討論からのいくつかの問題

(一) もう、職場は私たちの演劇創造にとつて、依拠できないところなのか？

特別報告・ファーターの例で見られる通り労働現場からの攻撃は、大独占企業の中に居れなくなり辞めて小企業に転職した例（四紀会のNさん）や、千人の人に働きかけてやつて十人の人に観てもらえたが、会場には会社

分たちが管理されていることに目ざめ、「生きていくこと」を問いかえしていくべきだ。

（現代劇場）

「創造技術」がなくては「生き方」があつても、いい舞台はできない——との応酬に・人形劇の場合、人形の頭という「物体」をつかんでいかに生かすか？ が大切である。その場合、「俳優の技術」とは、内容を伴つた手段であり、「生き方」は、その内容であり方法である。だから、方法論、つまり生き方を見つけることが一番大切である。（人形京芸）

・「生き方の問題」と「技術論」が対立的にとらまえられることが問題である。これは舞台成果として、前者は「アクチュアルな問題だが未整理のまま投げだしたこと」になり、後者は、「舞台や脚本の中で完結させてしまふこと」になる。稽古の中で演出から演技者に「あなたの生き方の問題だよ」という言葉がでるのはいけない。演出者の生き方と演技者の生き方の対決があれば、「生き方の問題」という言葉は出ず、もっと具体的な話になる筈。といっても実際には、演劇を創る者は、常に「生き方」か「技術」かと揺れ動きながら修煉している現状ではないのか。

の労務が来た（きすがわ）ことや、最近の労働組合の文化部は、外国旅行・マーチャン大会・ゴルフ大会・山歩きの企画をするだけで話にならないので、自分たちが、ひとりひとり観客をつくるしかない。（劇団大阪）香細

企業で働らく人間は、経営者意識を持たねばやっつけけないのに、大企業に勤める人は、時間で賃金を計算し、劇団員同志の「労働」に対する考え方が合わない。（もっこ）

など、個みよりのない職場、依拠しきれないように見える労働者の実態が、数多く出たが公演に労務を張りこませたり、公演休暇をとることに攻撃をかけてきたり、するのは裏をかえせば、敵がそれだけ私たちの芝居を恐がっている証拠でもある。だから、私たちがもつともっと根気よく職場に根ざせば、必ず道は開けるといふ（きづがわ）の発言が重くのしかかつてきた。

(二) 広島の「まつり」とは？

広島島の「ジョーヒル」は、労働者が学芸会のもつりで一生懸命やつて楽しむという、六十年代後半まであった「お祭り」を復活させたいと取りくんた。呼びかけると、演劇・歌ごえ・タレントグループ・フォークグループ

（小松 徹）

・人間はすべて「人生をいきる」素人である。演劇は人生を描く。未知の人生専門家が居らないと同様、演劇専門家も居らない筈である。「技術」は、自分がよく知っていることとや解つていることのためにあるのでなく、未知のもののため、自己解放の手だてとしてあるのだ。（現代劇場）



四 西リ演という組織は？

数年ぶりに総会に参加された京都・劇団橋より、「劇団は只今閉店休業中で苦しんでいるのに、運営委員会も、プロックも何の援助もしてくれない」旨の発言があり、西リ演とは何か——の議論になりかけたところで時間切れとなった。

西リ演は、出発当初「創造方法・リアリズム」を旗じるしに結集した。しかし、一九七五年に「綱領」を掲げにし、それに代るものとして「呼びかけ」をつくり、「西リ演綱領問題学習会」にもとりくんできたが、尚、前記「橋」のように強力な指導を望む声と、運営委員会や役員は、創造内容や運動を概括したり、優良をつけたたり、劇団をオルグして廻ったりするものではないという意見とが混在している。

しかし、それぞれの集団に違いはあってもお互いに学ぶものは一杯あることは確かであり、それぞれ自主的に創りあげている集団の総和で西日本全体の演劇状況をつくらうとしていることも確かかなようである。

私たちが、密度の高い議論をやったとしてもお互いに影響しあうことはあっても拘束さ

れないことも——。

その他のこととしては、劇団員の拡大の必要性を痛感し、それにとりくもうとしている集団が多くあったことや、職業劇団では依然として生活擁護問題が大きな課題としてある。

又、これから新しく稽古場の改築や確保にとりくむところとして、関西芸術座や、きづがわがあることも記しておきたい。

西リ演役員は難行の末やつと、去年にひきつづく三役を選出した。

議長・仲 武司（関西芸術座）
副議長・土屋 清（月曜会）
事務局長・岸本敏朗（西紀会）

運営委員会劇団選出は、総会後の各プロック会議に委ねられた。プロック担当の運営委員をプロック会議で選出する——運動の原則や民主制から言えば当然のことである。しかし、今回のことは、そんなに格好のいいものでない。つまるところ、それぞれのプロックの中で、誰れもが認めるような突出した活動を展開しているところが見当らないし、てめえの集団の維持に精一杯で、プロックの世話

をする余力がないのである。しかし、今までも余力があるから、西リ演の役員や運営委員を担当してきた訳でもなからう。西リ演が自分にとって、集団にとって必須条件だったからやってきたのではなからうか。改めて、「西リ演とは何か」「西リ演は必要か」が問われる時期にきている——と考えるのは言いすぎだろうか。

五、ともたち劇場の公演

正式名は、「こども会・劇団いこら・ともたち劇場」という。

こどもの文化状況について「いこら」なり「発言はないのか——と考へ、年に何回か秀れた舞台を観せるという親子劇場方式の消極的なものでなく、こども自身が遊びやキャンブを通じて自分たちの文化を創りあげると同じように、芝居をつくらせてみよう」と始めたということだ。

今年には「文学読本・はぐるま」より、低学年には音楽劇「さるかにばなし」を、高学年には「裸の王さま」を取りくませた。

脚本は、プロットとプロローグを栗原さんが書き、それに基づいて四人の子どもが各場

面を分担して書きあげた。第一稿などは、各場面とも原稿用紙一枚位であったが、「これで、みんなに解るか？」という質問をくりかえし、書かせたということだ。

稽古は毎日曜日の午前中、遊びを中心としてやっている、その中でも達は、創造力を発揮したり、こども集団での自分の生活を変革していつているという。

こどもによる「西リ演の皆さま、ようこそおこし下さいました……」という歓迎あいさつで幕があく。

舞台は、登場人物のひとりひとりがリラッククスし、役を演じて演じてくれている。しかも、王さまを落とし入れる二人の仕立屋と「裸の王さま」に追従する家来たち——その中で「王さまは裸」とはつきり真実を言う小さい子どもがぐつきり描かれていて、解りやすい。

終演後のあいさつで、代表の子どもが「今回の作品は大人の手を借りないで、僕らだけでやりあげてみたい」と言ったのには夢だった

現地発行のニュースより転載——

・「ともたち劇場」という名称が、子ども

自身の要求からつけられたということの意義が、子ども自身に教えられたことである

と思いましたが、ここに本物の児童劇にたいする思考の出発点があるのだと強く感じました。恐らくこれからの「ともたち劇場」

は、子どもの全面発達による新しい人間形成の貴重な体験を蓄積していくだろうと思えますし、その実践記録をぜひ普及してほしいと思えます。（人形京芸・辰見鈴太郎）

・感受性の高い子どもたちが舞台の上で演じる。そのことにより、一つの言葉、一つの動作に責任をもつことを身につけると思えます。又、客観性を育てる上で意義のある活動だと思つた。芝居の内容については、もっと心身の解放が得るのではな

六、再び湯浅という町

夜十時前からの交流会——。参加者は、総会出席者に加えて地元から、町長・教育長・前教育長・観光協会会長・湯浅町の教育をよくする会々長（医師で画家）・湯浅を明るくする会々長・地区労働長・和教組委員長・共産党地区委員長等々、文字どおり湯浅を代表



する面々の参加である。

藤本昂二さん（いこら）と河野元子さん（関芸）の司会で、樽酒の運びらきで始まった延々一時間半にわたる和やかな「交流会」に、感慨無量になり、これで今年の「西リ演総会」は終つたと思つた。八年余前「呑んだくれ」を観劇するために始めてこの町を訪れ

たことは前にも記した。(演劇会議第十二号でも)あの時、打ちあげの席で顔をあわせた、「いこら」の支持者が、今は町行政の中心に坐っている。現町長は、あの時、地区の議長であったし、教育長は、同和教育を推進するひとりの小学校の教師であった——という風に。

町の人びとには礼を失することになるが、あえて妄言を書かせてもらうなら、「いこら」は、町ぐるみを舞台として、演出している「仕掛け人」だという驚きである。そして、今日あるためには随分色々と紆余曲折があったろうという思いである——。

現地発行のニュースより転載——

●町をつくっている方々が、こんなにもウキアキで出席してくださるなんて、とても大阪では考えられないことです。いこらの大衆性に感心しました。(息吹・広田) ●本当ならお目にかかれない筈の大物の方達が沢山見えてられてびっくり感激しました。お酒も沢山頂きました。ごちそうさまでした。又、機会があれば、湯浅の町へ寄せて頂きたいと思えます。本当に楽しい交流会でした。(劇団どろ・杉野和賀子)

夏の夜は短かくて……

——東リ演総会ゼミをかえりみる——

(一) 浜名湖は午後の干潮のせいか遠浅で、東名をとばして来た汗を流そうととびこんだ私は一寸ガツカリした。かなり先へ行ってもびざから腰ぐらいまでしか水が来ない。しかし眺めがいい。海との境にかかっている大きい橋をゆっくり走り新幹線。浜辺のラジオからは高校野球の準決勝が流れて来る。のんびりやっている、やっと召集がかかった。8月19日午後2時、総会に先立って運営委員会が始まったのだ。今年の総会・ゼミの会場は静岡県新居町清風荘と舞坂町民センターで、71年から六年ぶりの同じ会場である。清風荘の緑先きはすぐ砂浜、汐風が心地よくて、ついうとうとしそう。運営委員会の仕事は総会の準備と、議案書の審議のだが、黒沢議長は執筆による原案は、萩坂氏の言をかりると「上出来すぎてまるで、手がかりがない。」

●夕べの酒は旨かった。ついつい呑みすぎたようです。酒も酒だけでは駄目で、やっぱり「時」と「所」が必要のようです。帰りに湯浅の町をゆっくり見て帰ります。(生活舞台・高尾豊)

●雑務におわれる毎日です。素晴らしい交流会に参加でき、日頃の疲れもふっとびました。来年もぜひ湯浅で、西日本の文化を語ってください、聞かせて下さい。楽しみ待っています。(湯浅町長・寺西清)

来年度の総会とゼミナールは、今年と入れ替り、六月に総会、八月下旬にゼミナールが開かれることになり、ゼミナール開催地は町長さん達の好意にあまえて、西リ演としては例外的に早ばやと、湯浅と決定した。

来年は久しぶりに「いこら」が創りだす「きのくに民話シリーズ」の新作を、あの人たちとともに観れるのかと思うと、今から心躍るのである。

丸子 礼二

(東リ演・副議長)

それでも項目別に検討がつづく、こぼやしひろし氏が「最近は何作をコンスタントに生み出す能力が枯渇して来ている」とか「児童劇に取組む姿勢の中に、大人のものではうまく行かないからという逃げ道があるんじゃないか」とがんばっていた。しかし、こぼやし氏は急用で総会に出られなかったので、残念だった。

運営委員会の終り近くなつて、やまなみの梅津幸三氏と二人で総会の議長をやることになり、一辺に気が重くなつてしまふ。

(二) 8月19日午後7時、総会がはじまる。40団体約60人、なつかしい顔ぶれがズラリと揃っている。梅津氏の温厚誠実な司会と黒沢議長がのていねいで若々しい説明でスタート。この分なら議長席に並んで坐っているだけでいいな、と安心する。四日市の森氏から「例年の

△劇団通信・追加▽

演劇集団石るつ

②11月12(土) 13(日) 15(火) P.M.六・三〇、13日のみP.M.一・一五、八丁堀勤労福祉会館。

第15回東京勤くもの演劇祭参加

江東演劇集団合同公演

「木場の鉄太郎」

(「石るつ」の境野修次第2作目)

※昨年は「氣まぐれワタ」

演出は我々と親しく結びつきをもっている専門演劇人の中から演劇集団「未踏」の島田形さんをおねがいしました。今回は、今年で3回目である江東演劇祭に加盟している三集団の合同公演として東勤演に参加します。

(東リ演ゼミには三集団から12名参加)

③来る11月27日(日)定期総会にて東リ演加盟の議題が提案される予定です。昨年の集団内勉強会、今年8月の合宿で黒沢東リ演議長の講演を聞いて、又今年の総会、ゼミに参加してからの我々の課題です。

来年春季は第4回江東演劇祭参加として、集団内創作劇一幕物数本を、小劇場形式で公演する予定です。(秋山昇)

(習志野市袖ヶ浦二——二——一〇四)

総会は発言が片寄る。全員の声が聞けるように配慮して欲しい」と要請あり。(これは二日間の間に九分通り出来たと思う)

議案書のはじめに、我々の活動は「百花燎乱のさかんさとはちがう。ときに消えかけいぶりながら地を這って燃えひろがる野火のようさかんさです。」とあるのをめぐって、ホントに「さかん」なのかという所から論議がされて行く。今年、黒沢、こぼやし両氏が、奥羽ブロックのゼミに参加したりして、実情を体でつかんで来たこともあり、現場に即した意見交換が中心になっていた。

創作をどう振興するか。東リ演全体としては、この所や不振なのではないかと心配されている問題である。やまなみの小谷氏からは、＼とにかく上演するから書け、と作者を追込む。上演にいたる過程で完成度を高めるべきである」という意見。世仁下の岡安氏からは「書きたいことは、他がどうあつても、我々は書きます」とエネルギーにあふれた発言。岡崎の関口氏からは「ブロック内でもっていい批評が欲しい。」という声。等々。それぞれ今年創作を発表している人々だけに説得力がある。私自身、情熱が書くこと以外に向ってしまつて、もう七年近くなつて

いるだけに悩みは深いのであるが……

青年劇場の後藤氏から企画の立て方について、いかに現実に対応するか。約千名の友の会の意見をまとめて決定し、演活活動に深く入って会員の拡大と公演の成功をかちとる体験報告があった所で、深夜の討論を打ち切った。なんとまだ、議案書の七分の一しか進行していない。

(三)

さて待望の交流会である。総会参加者の場合は、20日夜とあわせて交流会が二回もあるのだ。けんけんごうごう。私もかなりメイトルをあけて、色んなことを喋っていたが、サッパリおぼえていない。途中でモデル上演のけい古を終えた静芸の元気のいい女性たちが参加して、更に盛り上ったことだけはおぼえている。

翌20日、やっぱり梅津氏と交替して議長席へつかされる。夕方にはゼミがはじまるというのに総括の大部分と方針を、ていねいに討論しなければならぬ。時計をチラリチラリとにらみながら、どんどんと議事を進めにかかると、(総会の詳細は黒沢さんが東リ演ニュースで紹介して下さるはずである) スタッフが育たない問題。演出の力不足、

指導層が無用の遠慮をしないことの重要性。

児童劇への取組み方。銀行から巨額の寄付まで獲得し、市民ぐるみの劇場建設を遂行した青森の例。創造と普及を両輪としてでなく同軸として考える提起。プロックの活動報告。演劇会議への原稿集中の悪さ。どれも大切な問題であり、かつ簡単に結論は出ない。

ただ、私を感じたことは、どの問題も、流れが海に注ぐように、「集団討論の励行」という焦点へしぼられて行くようだったことである。皆のチエと力を出し合うようにすること、まことに常識的であり、しかも現実にはなかなか実行がされにくいことなのだが、総合芸術である演劇の活動を「野火のようにきかん」にする力の源はここにしかないのではないか。

(四)

来年度からゼミナールを一年おきに、中間はプロックゼミの拡大をおぎなうこと。総会は日数を増加し毎年行うこと。演劇大学を78年2月10/12日に開くこと。演出家協会への参加推進。児童劇協議会との交流。東独労働者芸術祭にこたえる行動等々の方針の議題を梅津氏があつちりまとめて下さって、総会は終了した。例年以上に論議が多く、どちら

派な劇場である)に移してゼミナールが開幕した。冒頭、六十才の還暦を迎えて、さらに青年の気概を見せる黒沢議長のおいさつに拍手。総会よりぐっと平均年齢が低くなり華やかさが会場に満ちあふれる。

モデル上演は静芸の創作劇「小島真木作、西順太演出」旅立ちである。現代の教育問題を女子中学生の悩みつつ生きる立場の側からえぐるって熱気にあふれた好演。この所、ママナ板でぎざまれるがだけに終っていたモデル上演の流れを交えることができたといえよう。無論、ゼミでの討論材料にしたような問題点も、脚本、演技、各面にあるが、静芸の奮闘にまづは感謝したいと思った。

セレモニーでは例によって各集団の紹介、こもこも立って拍手の交換は実に楽しい。東リ演の、各地で活動する仲間が、こんなに一杯いるというおもしろい力づけられる。この気持は老いても若きも変わらないだろう。

さて新居町の清風荘へ戻って二組に分れての大交流会。昨夜の何倍ものスケールで、こつた返す。私も例によって気持ちよく飲んだ。それにしても、中には、誰と交流したらよいか、わからないでいた人も、かなりいた様である。会場へ集合、芝居を見て、すぐ交流

かと云えば討論を楽しむような感もあった。とにかく時間が足りないこと。理念より現実問題に走りがちであったこと等、問題点もあるが、連帯の確認と体験交流という点では価値があったのではないかと。

総会の途中昼休みに開かれた運営委員会で黒沢議長からそろそろ後継者をと提言、数年準備期間をおき、三役陣の充実をはかって行くという形で結論を出し、辞任勧誘としては却下。さらに若尾正也副議長から、丸子と交替したい、と申出があった。最近元気なことだし、これも例年通り却下されると思っただし、これら通ってしまった。前もって私達の劇団「演集」内で話も出ていなかったことなので、驚ろきながら保留を表明したが、三役については個々の劇団より東リ演運営委乃至総会の決定が優先することと、そのままきまってしまった。(若尾副議長辞任については、劇団「演集」内では大変きびしい反対があり、名古屋に帰ってから、数回の討論の末ようやく了承された。しかし、私としてはこの役員決定方式のどこかに問題があると考えている)

(五)

20日夕、会場を舞坂町民センター(大塚立台)の佐藤氏もやりにくかったと思う。私としては中野勤演の「車椅子の王女とその騎士」の報告が興味ぶかく、とくにチラシの図案が何とも可愛らしく、一枚もらって、大切に取ってある。

他の会場のことは私にはわからないがよかつた所も、発言がしにくかつた所もあつたようである。

(六)

最後の全体会はきゅうづめの会場。ああ今年も済んだという感慨が湧く。受け入れ側のからつかぜ、やまなみの諸氏に感謝の拍手。どうやら三百人を越え、黒字になったと事務局はぐるまからの報告がある。このためまぬ労苦に耐え、腕のある事務局あつてこそ東リ演の今日がある。

やがて別れの時が来る。では又来年にはいけないのだ。プロックを東リ演活動の柱に、が一昨年わらび座でのゼミのまとめたはず。私の属する中部プロックの活動も今日から又スタートである。あれもこれもと帰ってからの待ちかまえている仕事に頭がいっぱいになって来るのを感じつつ車が動き出す。短かい夏の終りはあわたたしく過ぎて行った。

モデル上演「旅立ち」のこと

——小島真木小論——

矢野 喬

さしより感動する舞台と出合った。
まさにそこに存在している少年少女そのものとも見える若い俳優たちの真摯でひたむきな演技、けつして主題を叫ばず、抑制された

知らず引っぱり込まれた、ということはずまりそれだけの説得力をその舞台は持っていたのだ。

せりふで、人間というよりもそれを取り巻く状況を浮び上らせる機やかな台本、ぼくは千里や博之や達也たちとの一晩の出会いのなかで、ようやく自己を形成しようとしている思春期の不安定な精神が、危険と誘惑にいか

てきた戯曲、また小島真木の作品系列のなかに位置づけて考えると、人間の抱え方で「人間の、状況のなかでの「もうさ」をもろさとして、「衝動的な行動」を衝動として、あるがままに抱えているのが特徴的だと思ふ。

れているかを目の当りにし、必死にもかく彼らが可憐で涙がこぼれて仕方がなかった。
ずい分芝居は見えてきたが、当夜のような体験は久しぶりであった。それはひとつには、ぼく自身、あの年頃の子を持つ親であり、身に覚えがあるということがあったせいかも知れない。しかし、作家としての立場から、良くも悪くもきめて芝居を観るくせのあるぼくが、子を持つ親としての立場にわれ

印象に残った場面はやはりなんと言っても千里がトルエンを吸うくだりである。千里が遊びに寄った博之の部屋で、たまたま博之の仲間が来てトルエン遊びをはじめ。めずらし気な千里、それを見て遠慮がちに勧める博之。仲間は千里に強制はしない、それどころか止めておけと忠告する。しかし千里は、こわごわとビニール袋をあてる。

ここで千里は非行を意識しての決断があ

るのではない、博之や仲間でつくっている状況があり、その状況のなかで我知らず踏み出している。

状況のなかでの行為の撰択は、「輪ぼこり」ではこうである。工場仲間たちと読書会をつくった千春は、工場側が呼び寄せた父親の説得に負けてついに郷里に帰る。仲間にあてた手紙……家の生活がどうなってもよいのか、と言われると、まだ幼い兄弟達のことを考えて、やめると言ってしまった自分の弱さが情けなくて、口惜しくて……（中略）……自分の古い意識が恥しくてたまりません……」
ここでは、千春は、自分の置かれている状況をはっきりと認識しており、自分の行為の意味も分って行動している。

千里はそれが分っていない。ぼくは二つの別個の作品の、二人の少女のそれぞれの優劣を言っているのではない、千里のように自分で分らないで行動するのでも人間のひとつの側面であり、この作品では、だからこそ、そういう千里たちを取り巻いている、将来のある千里たちをどのように料理できる状況の（萩坂氏の言葉を借りると）「怖さ」が見えてくれるのだということを言いたいのだ。
もう言われていることだが、人間を把える

さい、「もうさ」や「衝動」をぼくたちは取りこぼしてはいなかったらどうか。豆タンや千春は既知の人間として抱えられているが、千里や博之は未知の人間として抱えられている。ぼくたちは人間についてすべてを知っている訳ではない。まだ分らない部分は分らない部分として、そのことを視野に入れつつ、あるがままに抱えた「旅立ち」は、「輪ぼこり」よりもより現実を追っている。

ゼミに参加して観劇した若い人たちは、千里たちの一見して状況に流されるありようが不満だったらしい。千里が立ち直れるか、千里はラストシーンでなぜ自分で博之を救いに行かなかったか、の二点に論議が集っていた。たしかに立ち直る千里、博之を救いに駆け出す千里を舞台に見るのはあって欲しいことだし、願望としては理解できる。しかしリアリズムという観点からはどうだろうか。

ここで一度、「輪ぼこり」と較べてみる。読書会・草むらぎを会社に潰され、仲間から去られた豆タンが明子たちにはげまされて立ち直る、そのラスト——
豆タン「（略）……どこまでやれるかわからないけど、きびしい合理化の中でバラバラに

されているみんながやっとなを上げた。そのことを大切にアッコ、ひとみちゃん、この唄の中にしっかりと根をおろして一縷にがんばろうね。」

千春「私たちが風にとばされておらばった草の種だけど、先生を支えながらしっかりと地域に根付いて私たちの草むらぎを大切に育てていくつもりよ。（略）……」

これに対して「旅立ち」のラスト——
千里「あ——たしは大丈夫よ、お母さん——明日ちゃんと試験を受けるわ。——ちゃんと高校へも行くわ。——一人でもちゃんと立っているつもりよ。」

二つは似ているようだけれども大きな違いがある。豆タンや千春が一般的に草に例えて決意を語っているのに対し、千里は具体的に明日の試験を受ける、高校に行く、ということと自分を語っている。より現実的である。

現実的という意味あいから、ぼくは千里を家に残した作者に組する。もし仮に千里が博之の部屋に駆けつけたとしても、自殺を計った博之を救うためには実際には大人の手を借りなければならぬだろう。ここは大人の領分として母親に処置をゆだねる、自分は勉

強しながら待つ、この千里の現実判断は正しく、トルエンやセックスや家出の経験をかいくぐった千里がとった態度に、足を地に着けて出発しようとする姿勢がみてとれ、展望という言葉を使うなら、熱っぽく主観的に語る豆タンや千春よりも展望があると思う。

千里を駆け出させて劇作上の締くくりで解決を示すことはやさしいし、観客の感情も高揚する。しかしそれを拒絶してあくまでも現実に従った作者のリアリズムが、かへって健実で現実的な展望を示しているということは大いに学ぶところがある。

ぼくは「旅立ち」は東リ演におけるリアリズムの一つの到達点だと思う。「陸橋」や「輪ぼこり」に見られるように、作者としてどうしても言わずにいられないこと、あるいはこうあってほしいということがあって、思わず知らず人物の口を借りて言わずにいられない、そうしつらえてしまう。豆タンの最後のせりふなどは作者の折念そのものだ。それに反して「旅立ち」は作者として言わずにいられないこと、そうあってほしいことがあり、しかし一方そうではない現実があつて、その矛盾のなかでおかつ作者は現実をフォ

ローしている。言いたいことを直接言えないのは苦しいがそこで筆を拵げないところはこの作品のリアリティがあるのだ。「陸橋」や「綿ぼこり」とはこの点がはつきり違う。

「人間のよろさ」「衝動」「性」を人間の側面として取り込むということや、あくまでも現実的リアリティに着いて劇世界を構築するということは、リアリズムの理論としてはすでに言われていることであつたが、「旅立ち」はその具体的な表れである。しかも「陸橋」「綿ぼこり」を経て小島真木がここに到達したということをはくたちはもつと評価していいし、理論的に押えておく必要がある。

ゼミの会場で、「あていどのものならわたしも……」という声もちらと耳にしたが、とてもとても。このさりげない、一見日常的な作品が含んでいるきびしいリアリズムの問題を見落してはいけない。

話を舞台にもどして、ひとつだけ注文を出しておきたい。言い方はいろいろあるがぼくは「旅立ち」は状況の告発劇だと思う。

舞台で面白かつたのはゲームセンターでのたかりである。下級生を達也がたかり、その達也を高校生がたかり、その高校生を……、どこかブリューゲルの絵を思わせる構図は、

弱肉強食の大人の世界の縮図である。彼らの非行は大人の反映、真似にすぎない、ということの鋭い批判をその場面ははくたちはつきつけてくる。そうなるを彼らを取り巻いている状況（大人の状況）では千里の父親、母親達也の母親がいかに弱い。力点は親子の間に置かれていて、職場の問題も、生活の必要や躰子、といった面から語られているにすぎない。親たちががつくっている職場のひつ

つ状況（弱肉強食）があつてそのその職場の状況が、たとえば受験競争を引き起している、つまり親たちは家庭と職場とは別と思つているのかもしれないがそうではないのだということをどこかで分らせて欲しかった。大人の状況をつくつていくということでは千里や達也の親も一枚かんでいるのだという観点である。

翌日の分科会（作品）——。なんとも焦点の定まらぬ分科会になってしまった。まず参加者が、また書いたことではないがこれから書きたい人、一・二本書いたことのある人、五年やっている人、十五年の人、とキャリアがちがう。したがって創作に役立つものを求めたいという欲求は同じでも、その内容が違ふ。各人が抱えている当面の問題も違ふ。発

言がまちまちで噛み合うはずがなかった。また発言者の多くが経験主義的な発言にとどまつて一歩も出ようとしないのも既述の因だつたと思う。

そこには小島真木も居た。はくたちは作者も交えて論議しつつ、「旅立ち」のなかからどういうリアリズムの理論が取り出せるか、「綿ぼこり」から「旅立ち」への到達をドラマツルギーの上でどう押えるか、を検討すべきであつたのだ。

結局、戯曲合評会のような形となつてしまひ、戯曲に注文をつけ、作者が応戦し、書き直しがきくかきかないかの問題になつて、いつの間にかぼくと萩坂氏が小島真木の弁護側に向つてというていたらくであつた。これではどうしようもない。

そのなかで助言者の山田善靖氏の人物の行動線をもたつての分析ははくは得るところがあつた。いましかとは言えないが、リアリズムを追求する上での手段として役に立ちそう

だ。とにかく次回分科会を参加者の要求に応じてさらに細分化するなり、一定の討議目標を置くなりして、各人がなにがしかの共有の論理を持つて知れるようにしたい。

報告にもならない感想

——東リ演ゼミ・演出分科会より——

久保田 明

（劇団名古屋）

「旅立ち」の演出者西さんも含め、総数十八名の参加者は一人を除いて演出の経験者であり、またそのほとんどが集団の組織責任者でもあるという、分科会でした。

(1) 「旅立ち」は、身近な少年たちの姿を私たちにつきつけ、親として、大人としての解答をせまる舞台。

メンバーの年令にもよるのでしよう。我が子の事として受け取りおだやかならざる思いがしたと、中野勤演の小坂さん（子どもさんは学齢前前のはず）、こうつきつけられるとおたおたします、と、すがおの加藤さんらの感想が語られました。弘演の秋本さんからは彼女の喫茶店で働く娘さんとその男友達の切れない仲を心痛める毎日から、「旅立ち」が人立ちの形にすすめるのかは、まだ舞台から確かめきれなかつたとの発言もありました。

はぐるまの汲田さんの話も印象的でした。

外出をした途次、みかけたとある喫茶店とは名ばかりの、お好み焼屋まがいの店の中で、たむろしていた高校生の話。そのいかにも殺風景な店内で、教師や友だちの噂話をとりとめもなくする仲間と少しはなれて、そのグループのメンバーである一組の男女が、ずっと抱きあつていて、というのです。何とも情緒のない雰囲気、情熱すらそこに見出せない抱擁と、その仲間の話題の貧弱さ、青春の無為さを覚えたというのです。

そしていつてみれば、このような種類の否定的側面が舞台に生き生きと表現できるだろうか、とも汲田さんはつけ加えました。

千里の目立たない（それは教師、大人達の目に、であつて、千里の属性ではないはず）存在が、舞台で主役として存在しうるか、それは興味深いものでした。

名芸の拓殖さんの生徒に説ませた感想、一度千春に会つてみたい、を含め、この舞台、この台本は、確かに何もものかをつきつける力を持つものでした。

(2) 生き生きと存在した生徒グループと、スキ間風を感じさせた教師グループ、その演技の質の違いが問題。

聞きとりにくいセリフではあつたが博之の存在感（拓殖さん）、ナチュラルな部分があった（汲田さん）、達也の目に疎外された者の、いらだち、さみしさ、怒りをみることもあつた少年たち。それは、生であつても感動的であつた（東芸・山脇さん）というのが大半の感想でした。

しかし、扇子をバクバクと動かし、時にあらぬ方に目をやる演技で、達者さを見せつけているかのような朝比奈先生の演技には（小坂さん）どうしようもない古さ、手の内を役をつくる生気のなきが見え、鎌田さんの地と重なつての坂本先生にも誠実らしさが押しつけられるものの弱点は浮かびあがらず、この教師の偽善・独善よりも、この教師を演ずる者の独善がみえて来るような気がしたというわけです。

まだ演技にまで至っていない部分の発刺さ

と、まさに演技をもって舞台に存在しようとした部分の類型を、どう統一し止揚していくのか。そこに静芸の課題、のみならず多くの東演劇団の課題を見た思いがします。

(3) 感想を述べた後、一度、台本にもどり千春の線を追ってみました。

博之に近づき、博之を抱きあうまでの千里を、ただこの芝居の発端と考ればきほどの無理はない。しかし、目立たない、おとなしい(他人からみて)女の子の、ちよっとした出来事(テニス事件)が、彼女自身にとつてどれほどのものであったかを、博之と寝てしまった、というショックな事件から逆照射するだけで十分かどうかは疑問。(この問題は、あまり深められませんでした。)

しかし、このショックな事件以後千里が博之に尚一層関わりつつ、それがために友人関係から傷ついた博之と逃避行を試みるまでの経過は、流れとしてよく描けている。問題は、それが博之の死を通して、彼女の旅立ちという結末にいく前の、もう一度、起承転結の「転」にあたる部分の弱きにならないだろうか。逃避行とその失敗から、千里が博之にトルエンをやめさせるために、とりあげて捨ててしまう。この行動の作品の流れからくる必

然性とその持つ意味があまりにはっきりしていない。そこが結末の印象の不鮮明を生んでいないだろうか。

教師・観の描き方が台本としても類型にみえるのは、ドラマの進行とのカラミが弱く小道具的存在になっているからであろうが、細かい分析まではできなかった。

(4) 演出の問題。西さんの話。

台本・素材にのりこみすぎて、台本として、これを分析することが弱かったのではない。ドラマとしてその流れを見極めなかったために作家の後追いに終わったのではないかと、というのが結論です。西さんが、静岡の少年達の、台本で描かれている以上の様々な事実を多く語られたことから、そう思います。

小坂さんは、結末を冒頭にもって来てる、「イルクーツク」「不毛」「スタイルの人物語るV形にしたら、と(やや思いつきだがと云われて)述べました。非行を扱った社会問題劇が、初恋物語か、風俗劇か心理劇か既成のわくにはめこむという意味でなく、演出の視点を定めるべきであったと思います。

丁寧な台本の舞台化は、がさつな一人よがりの舞台化より遙かに好感の持てたことは確

かですが、台本を読んだ者には台本以上のものできなかったという印象がまぬがれません。

第二場・少年少女のトルエンと乱交の場、それはショックではあるが、舞台の奥にすべて隠れてしまい(このような方法しかないとは没田さんの意見)本当に他に処理方法がなかったのか。ピニールの袋を四人がそれぞれ口にする場が、滑稽でそれだけ恐ろしくも思われただけに、作家が別の部屋を設けてそこへ退場させはしなかっただけに、演出の弱さを思うのです。

このことは、寝たあとの千里と博之の、妊娠のおそれとそれからの解放という場が(台本でも電話で処理されていますが)、舞台ではカットしてしまうことにもつながっています。作家が筆をすすめていく時、どうしようもなく自分で動いて行ってしまう登場人物たちに、創造者であるはずなのに逆におそれおののくといった瞬間があるとすれば、演出は同様に、そんな時をいつ持たたいのか。何かいつも解釈のみを下すしたり顔の男が演出者にダブってしまうのではたまりません。

結末はどうか。ここでも演出家が身がって主人公に未来を托そうとはしなかったか。

はぐるま没田さんのラストのとらえ方はさすがでした。肯定・否定といった他者からの批判をむしろ拒否する自立への旅立ち、それはまた誰もが通らねばならない大人への道を彼女が歩みだす所、とみるのです。となると、しっかりとるのよ」と千里の肩を抱く母に自らも身を寄せて行く千里が不満だということです。母を拒否しなければ、振り払わねばというのです。舞台の千里はそこまでの存在ではなかった。

ほかにも幾つかの疑問があり、総じて、どの人物にも、人間としての揺れが巾狭い、というところが云われました。しかし中々論争にまではすまず、スタッフへの目配りの弱さも出ました。

はくらはみんな気がついていても、出来ないことを多く抱えこんでしまっているためか、謙虚によりも卑屈にすらなりかねない。出来ないのは、俳優のせいではなく、金のせいではなく、台本のせいではなく、ほんとうに自分・演出のせいだと思わねばならない。(西さんの事でなく、はく自身の事です)

(5) 『旅立ち』から離れて演出上のいくつかのこと。

演出者の位置が仙小の石橋さんから問われ

それが集団の組織者としての役割を担っている事が話されました。

やまなみの梅津さんは去っていった人の多い事に心傷める思いを語られ、小坂さんは、自分たちの看板・顔を持たなければとその芯に演出がいる事を語りました。増芸の塚田さんはさすがです。演出家が組織するとは、多くの劇団員を作品を通してそこにうまくれる感動・発見を共有させる事を通してである。この感動の共有を可能にする組織者が演出である。

(6) 演出分科会の持ち方についての提言——

チューターを終えてみて。

今回もまた幾つかの発見と幾つかの共通感を参加者の発言に覚えつつあった。しかし、今一つ発刺たるものとならなかったのも事実である。「旅立ち」についても突っこんだ話をした方がよかったのか、もっと率直に自らの演出上の難点を吐露しあつたらよかつたのか。うまく発言を展開、交換しえなかつたチューターにかなりの責がある。しかし、同時に演出というきわめてトータルな仕事、その多様さ、同時にきわめて現場的な仕事であることに、この分科会の困難がある。

そこで、大学・ゼミナールともに、その都

度かなり内容を明快なものとして設定することを提案したい。その場合

(一) 完全な講義

(二) 実習(ゼミ)

(三) 懇親

(一)は、大学における長岡さん、米倉さんの講義を一つの範と考えます。

(二)は、今までの要求として(1)台本分析・演出プランの作製について (2)モデル上演・もしくは稽古過程の公開による実習。

(三)は、お互いの悩みの語りあい。

これらが、混在しないようにすること。従って、参加者は、自分の要求に見あつて参加すること。大学・ゼミであつてみれば、(二)を除いて一定の細分化は避けられないと思う。その方がいいと思う。特に(二)については、事前の完全な準備が必要で、これ迄は台本を読むこともなく参加することなどが多い為に失敗したように思います。

(附記・ただ現在幾つかの舞台の演出を手がけつつ、集団の芯に在る演出部メンバーにこの事前の準備が可能かどうか、自信がありません)

専門演出者との

協同作業の経験から

京浜協同劇団

中沢研郎
細田寿郎
佐藤張二

司会 黒沢参吉

つがつきつけられた。

黒沢 それが、小田健也という専門演出者を迎えるキッカケになった。

中沢 「九〇二」をやらなかつたら、そこは見えてひなかつた。そういう意味で基盤になつたし、だから小田さん迎えての混乱や困惑はなかつた。

細田 「九〇二」の集団創作は、それまでの京浜のレバ選定と基準がちがった。お先まつ暗などん底で、お次ぎは造船労働者の芝居やろう、なんてことじゃなかつた。

黒沢 その必死のあがきが、小田さんの目にとまった、京浜村芝居のバイタリティとして。……尤もこの段階での小田さんの評価には、若干買いかぶりもあつた。

中沢 そう、だから劇団は方法を求めていると言いつつ、方法は思想なんだと提起されても、そういうこととしては受けきれなかつたわけだ。

細田 「九〇二」の前と後で、意識が本質のところであつたね。地域にねざすという、その地域性をなすみややすい処でとらえていた。川崎は労働者の町といわれるが、その労働者も出稼ぎ的な要素がつよく、必ずしも言うところの「労働者の」じゃない。そ

絶望感の壁の中から

黒沢 萩坂編集長から、「金冠のイエス」の批評を誰かに書いてもらおうと言われたが、それより「金冠」に辿りつくまでの劇団のもろもろを話しあつて、問題提起というには未整理の部分が多いのだが、その弊化以前のところもひっくり返して投げかけてみたら。と考へた。……「金冠」にくる前段に「九〇二番船、進水……」（劇団員七人の集団創作—中沢研郎演出・74年11月初演—75年6月再演）が、どうしても通らなければならぬ経路としてあつたと思うが。

中沢 その前の劇団は、いまの東リ演の一般的な状況と似ていた。まわりの労働組合は

沈滞しており、民主運動や地域住民運動も選挙などを除けば、緑の憲法づくりの頃のもりあがりはないし、何をやればいいのか分らん、主体的な意欲もエネルギーも乏しい。……そんな壁の中からはじめたのが、「九〇二」の集団創作だが、いま考えてみると何をどう描くのか分つちやいなかったし、野暮な発想だつた。このままじゃどうにもならん、デッチあげでもいいからつくるう、つくればそこから何か出てくるだろう。この一山越えてみよう、冒険主義というか。……やつてみて、分るところもあつた。同時にやれなかつたものも残つた。野暮なゴリ押しじゃどうにもならない芝居の方法論。意欲に技術がともなわない、こい

こをとびこしているから、東リ演のよその劇団から、うちの方は消費都市で労働者はいない等と言われて、対立してしまふ。……「九〇二」に、トコトン行き詰つた八方破れで、十分な問題意識までいかないけれどもいろいろ気付いていった、例えば労働問題の両義性—たにかいから落ちこぼれて職場去つていく人間を、単純に敗北とか裏切りとかレッテル貼らない、そういう目を開かせてくれたんじゃないか。

中沢 あの時期、集団が前向きで芝居つくつていたか、正直分らないな。このメンバー、それからもう少し若い連中、総点検というところで三年ぐらい劇団と自分、人間関係などいろいろやつてきて、集団や労働運動への絶望感、自分じしんへの絶望感、どうしようもなく持つていた。

細田 リーダーの個的な絶望じゃない、集団丸ごとだから逃げ場がない。まわりにも「如端の安穩」はない、恰好よくいえば京浜という地域の階級性かな。

中沢 逃げ場のない処から、何が出てくるか分らんが叩きつけてみる、それをやったのは非常によかつた。絶望を通過しないと本当の創造集団にはなり得ないんじゃない

か、そして、はくらが「九〇二」で突破できたのは、働いている人間だからだとおもふ。……それから集団の持続本能みたいなもの、これを一切拒否しないと歴史は刺しえないんだな、そこが大事な教訓だつた。

佐藤 今そう言える状態になつたということだ。それまでの劇団に主体性はなかつた、少くとも意識的じゃなかつた。……「九〇二」の中の夜の大学へ行つてる役、あれ大事な役なんだが、終つたらやめていったよね彼。そういうことでもいいと思つたんだ、研ぎすましていかないとダメ、集団論を先行させちゃいけないんだ。

中沢 混沌の中で人がやめる、劇団いつまでも大きくなる、幹部はやめるなど説得ばかりしている。年何回か本公演やれて、稽古場もできて、学校公演で稼いで、つまりいかに水が流るかに腐心している。そこから破つていく力は生れない、くりかえしの中で度へいするしかない。持続本能でやりながら、いつかいい仕事を—なんて考へている、落し穴だよ。

佐藤 「九〇二」で中沢は、創造で団結するんだと言つたね、あれ一番の特徴だ。よく創造と普及と仲間づくりが二本柱という

が、違う。……創造で団結というヤツがあつて、だから小田さん迎えて劇団創えられたのは、そこなんだ。

集団を破壊する論理

中沢 「九〇二」演出していて、これ終つたら劇団なんかなくなつてもいい、と思つていた。はくらがガイナマイトかかえてるんじゃないか、先はあるかといつたら無い、今こいつやるしかない、そこへ自分を置くのがもの創るヤツのありようだろう。企面の先行は大事だが、その企面に何をこめるのか、それが希薄だつたらやらん方がいい、それでやるのは罪悪だ。

佐藤 罪悪と分つたらやめた方がいい、それ岡島さん（美術）の持論だ。とにかく専門家のお歴々、東になって劇団へゆきぶりかけてくるんだ。（笑）

中沢 面白かつたのは、密度はともかく悩みや彼らうとしてるものが、はくらもあの人たちも全く同じだという点。そういう風にかきたてるものが、状況なんだろが。……それで、本当に状況は変わるのか、それを問わないといけない。この芝居で変わるか、変るとすればこの芝居のどこで変わるのか。

その間いけがなくなったら、おしまいだ。

黒沢 しかし、芝居で状況を変えるとき逆に考えられないとか、安易に考えるのは危険だ、芝居そのものを狭めてしまう。

細田 「金冠」で状況変わるか、簡単に変わるまいとおもう。一つの作品がもたらすイキキ活動できる要素は、五〇%超えないんじゃないか。生きてる自分と集団、そこで年中喋ったり飲んだり(笑い)、お互いの考えが放射線にとび交って劇団の体質を作る、これがないとダメだ。稽古場じゃ当面の仕事がたてこんでいる、その仕事の範囲で切りあげてあとは閑々の生活へ戻る、これが今までの劇団だ。……この頃じゃ期生の連中もなかなか帰らない、はたは位の女の子も夜中まで引っぱって。芝居馬鹿といわれそうだが、そういう人生がある。そこまで喉いこまない状況変える力にはならないとおもう。

中沢 あることないこと、つまり芝居外的要素かな、そこへ身を置く。それがないと、芝居での立ちようもせせこましく公式的になってしまふ。

細田 劇団が仮りに半歩でも先へ出られたと

すれば、自分たちを破壊する条件「要素」をもちっていったから。運く帰ったら観に叱られるなんてヤツは一人もいない、その点では立派な河原乞食だ。

黒沢 その辺にも、小田さんたち専門家の影響があるとおもうが。方法論と言ったね、さっき。

細田 業余だけど専門家だという意識、あの頃強かったよね。思想とひとつという認識には達していないが、技術を高めたい願望は積極的であった。

中沢 それに集団破壊論、破壊への期待だ。な。「九〇二」でやっぱり殺ができてしまった。その殺をどう破るか、危険思想だね。佐藤 それで、禁断の木の実を食っちゃったわけだ。大体十年たつと劇団なんてそうなるんじゃないか、エライ指導者がいて皆それに従ってというのもあるが、自立劇団の場合十年一日の垢が鼻についてくる。

中沢 はじめの十年は、どうやって身につけるかだが、その先は垢をどうこぞげ落とすか、大気に皮膚をさらしたくなる。

黒沢 うちの場合、中心メンバーが創造者としてくりかえしの許されない年代になっている。いずれにせよ、責任をもたなければ

ならない組合だ。その焦りや充足への願望も強いだろう。

細田 これは芝居これは職場と、器用に分けられないメンバーが何人もいる。だから対立すると、問題はゴロツと劇団へ出されてくる。……昨夜も女の子が一人泣いたんだが、職員旅行が東京公演の楽日とダブる、どうしようかと涙くんた。こっちは絶対どうしろと言わない。

佐藤 決めるのは、テーマ。

細田 グラシないようだが、絶対では分けない、矛盾のままにしておくんだ。

中沢 自分が何をとるか、自分の責任だ。

細田 一見つめたいが、これも指導性なんだから。

中沢 労働者は自分の面倒、自分でみるしかない、劇団の伝統だよ。いろいろやってもきた、手あてしたりコー葉貼ったり。でもムダだな、コー葉は。

細田 劇団に絶対的な価値観はないんだ。だから「金冠」一年で二十万円かけて二十ステージなんて、バカもやれる。絶対的な見方をすれば無理にきまってる。それがそうならない、ガンガンめながら研究生までまきこんで進んでいく。若い連中もその方が育つんだ。……歴史への対し方ふくめ

て今の若い人まじめた。決めるのは自分だということ、そこを曖昧にすると、逆に自分中心の狭い思考に落ちこんでしまふ。

専門者のもたらしたもの

中沢 この間、テレビ神奈川のプロデュサーと話したら、あのお宅の劇団はプロでずねと言った。そうじゃないと説明しても、久野収さんの「僧にあらず俗にあらず」を小田さんが採用したプロにあらずアマにあらずる「第三の道」は、分つてもらえなかった。これは、新しいアマチュアリズムの復権というか、回帰というか。

佐藤 それ逆手にとって、はくらアマチュアだと売りこむ。今はそう変わっている。黒沢 この辺で、小田演説の話に入ろう。佐藤 そりゃいろいろあつてね、八割はオフレコだな。(笑い)

細田 総論的に言つて非常によかった。劇団にとつては勿論だが、失礼を省みずいえ、小田さんにとつてもそうだったと思う。専門家と俺たちは過去からずっと平行線で、一致点もなかったし、一緒に作業もしな

った。「コーカサスの白黒の輪」(テレビト作・75年秋初演76年春再演)から「金冠のイエス」(金芝河原作・76年秋初演77年秋再演)にいたる小田演説との関係は、規模や期間の長さからも、双方の力のかけようからも、演劇運動の史上初めてのことでいえる。……はじめ演出をたのんだとき、いろいろ学べる盗めると考えた訳だが、ここまで一緒にやってみて欲望の小さかったのに気付く。収権はもつと根本の処で大きかった。やってくる中で学んだことは、無限なくあつて並べきれないが。

中沢 具体的なことは稽古の中で見てもらうしかない。演劇論は稽古場でしか展開できないものだ。小田さんもそう言っている。

黒沢 専門演出者を迎えるのはマイナスだと、劇団外から忠告されたことがあるが、その意見には一定の妥当性がある。細田君のいうような共同作業を成立させるのは容易じゃないし、そこまでいかないで終ると双方にマイナスしか残らない場合もありうる。

中沢 専門家ならいいとはいえない。小田さんの特質は攻撃的だということ、プロ意識というか、いい加減なこと絶対に許さな

い。これがよかった。

佐藤 「コーカサス」初演での小田さんたちとの出会い、ああいうものは二度とあるまい。こっちは素材のままゴロツといて、そこへ乗りこんできたというのかな。最初ブレイトの「例外と原則」テキストに、小田健也の考え方ということで攻撃してきた。各個撃破ね、それで自分の考え指し分らせようとするんだが、刃物を俺たちの体にならこんでくるんだ。……役者の自立なんてよく言う。演出者がやるべきことやらないでいて役者に自立を強いる、そのまらがいやイヤってほど思い知らされた。演技は役者の発言だという。それがお前の発言か、お前の思想がそれっぽっちだということを見せられたって俺は困る、勉強してこい。(笑い)あの人、役者も舞台監督もみんなやってるだろう、裏の仕事だつてありとあらゆる……いやこれは美事だつた。

(笑い)裏の仕事こまかく自分の頭にあつた上で、しかし全部劇団にやらせる。うつべき手はチャンと自分でうっておいてやらせるんだ。岡島さんだって、プランこつちに描かせといて、最後にウンいいたらう……(笑い)あれは凄いや、自分でやっ

ちまう方がずつとラクなのに、全部やらせ
たもんだ。

中沢 「コーカサス」は、全くガンジからめ
だった。役者の立つ角度から、小道具の位
置が一尺狂っても大目玉。

佐藤 ああ、一尺狂ったら大変だ。

中沢 一歩多いとか少ないとか、そのあられ
が思想だとやられる。……「金冠」は、そ
の金縛りから少しはみ出て自由になれた。
その妙味を知らないで終ったら……

佐藤 うん、何にもならなかった。

黒沢 面白かったのは、「コーカサス」の舞
台稽古で脇にいたはくは、クソミソに言う
んだな、中沢君たちの演技。素人はやっぱ
りダメだみたい。それが初日のあとで、
よかったよかった、とびあがらんばかり、
計算なのか天衣無縫なのか……

佐藤 つきあってみないと、分らないな。

中沢 劇団ひまわりの福島さんから、五年つ
きあわないと分りませんよと言われた。ほ
くら三年だけど、一番大事なところはやっ
と分ってきた気がする。

黒沢 劇団への協力や援助というより、小田
さん自身の仕事になっている。

中沢 劇団はあいかわらず小田さんを追いか



中沢 小田さんの方にも、こいつらの能力で
ひらくしかない、その考えがある。裏から
制作にいたるまで実にマメに援助してくれ
る、こんな外部演出はまずない。(笑い)

けているが、姿が見えないほど後じやな
い、小田さんもより返って劇団をたしかめ
る、お互いが視界に入ってる。その関係の
中でほくらに攻撃をしかけ破壊し、いいも
のがあれば引き出してくれる。自分も裸足
の演出者とよぶのも、その格闘ができるか
らだ。……劇団のマイナスどころか、ほくら
の矛盾をより根元的な、ものをつくる人
間がぐらねばならぬ矛盾に直面させ
る、そういう引っぱり方をしてくれだ。

佐藤 それが、「金大中事件国民法廷」(9
月15日、東京)へ劇団をとりくませること
にもなった。この仕事劇団は当然やるだろ
う、全然疑っていないんだ。

中沢 陣子はやはり、「コーカサス」で詩か
れた。劇団も一つ一つこたえてきた。

黒沢 その関係が技術水準のアップに止まら
ない、それも含めて劇団の根幹にいくこん
でくる。それを怖れるか怖れないか、怖れ
ながらもつつこむか、そこに判断がある。

インターナショナルな視座

細田 そこが俺たちの主体性だともう。八
時間拘束されている労働者と、芝居中心に
生きている専門家をゴチャ混ぜにできな

が劇団の財産だ、とよく言う。
佐藤 「金冠」のスカートは、言われたこと
は必ず全部やっておくこと。だがこいつ
も、簡単にやない、使い走りじゃないから
ね。そいつが先へぬけたのは演出が優秀だ
からか、おれたちが労働者だからか……

中沢 劇団の財産だ、とよく言う。
佐藤 「金冠」のスカートは、言われたこと
は必ず全部やっておくこと。だがこいつ
も、簡単にやない、使い走りじゃないから
ね。そいつが先へぬけたのは演出が優秀だ
からか、おれたちが労働者だからか……

それでも実践段階ではこっちが悪戦苦斗や
るしかない、雑発しとして自分たちにやら
せる、したたかな組織者だ。

細田 経営やスタッフの仕事でもすいぶん教
えられた、その点でもめぐまれた。
佐藤 大道具屋として腕をみがいたな。「イ
ルクーツク物語」の古材の舞台、注文して
も普通できないことをうちはやってのけ
た。「コーカサス」も岡島さん喜んでくれ
たが「金冠」の装置は一つの作品といえる
だろう。……何も無いが、あるべきものは
あるという岡島美術の論理は、ナマのあか
りが一番いいのだという山内照明の主張と
照応している。

黒沢 東リ演の劇団では、美術関係のしごと
が総体に難だし古い。
佐藤 十年前の京浜、リアリズムというより
保守的だ。芳演の芝居の影響だろうが、自
分の芝居に必要なものを生み出すことが大
切だ。地域ということでは安易になったら、
自分がつまらんとおもう。

中沢 地域という言葉には麻痺性がある。地
域にねぎすとはどういうことか、そこが深
く問われるべきだ。自分の視点をどう築く
か、それをヌキに地域の状況や歴史がかけ

い。一般論でその相違を強調するのはまち
がいがいが、ケジメは集団としてピシッとし
ていなければいけない。「金冠」の再演、
小田さんはあれだけやってきたんだから、
六〇%自習すれば稽古は五回でいいとい
う。しかし、職場に行ったら労働のリズム
に入らなきゃならぬ労働者には、専門家
のいう自習は不可能なんだ。その違いをキ
チンとおさえた上で、どう四つに組むか。
その主体性が加烈になかったら、演出の人
形になってしまわうしかない。

黒沢 「コーカサス」のあと、小田さんは問
髪を入れず「金冠」をもってきた。
佐藤 これをやるうって乗りこんできたん
だ、運営委員会に。

黒沢 やられた、とおもった。「コーカサ
ス」の過程で温めていたんだ、着々と。

細田 これこそ京浜で、そう言われると弱い
んだな。(笑い)むろん小田演出は中心だ
が、安達さん(音楽)岡島さん(美術)山
内さん(照明)が「コーカサス」の延長と
してかんでくれ、合唱の協力があつたこ
と。これがなかったらもつと狭いものにし
かならなかつたらう。

中沢 小田さんも、この人たちとのつながり

るか、地域の座標だけで今日の現実がつか
めるか、そこが曖昧な気がする。……「金
冠」上演の意味はそこにある。自分の落ち
こみのひびき、絶望感、そこから地域をみ
たら見え方がちがう。太鼓叩いて民族の文
化とか伝統とか、その発想ではダメなんで
地域にどうダイナミクスしかけるか。……
黒さんが、もつとインターナショナルな視点
と言ったのは、そこなんだと思う。稽古
場上演で「カルラールのおかみさんの統」
(プレヒト作・細田寿郎演出・77年6月)
は、萩坂さんにも評価されて喜んだのだ
が、この地域のお客さんにみてもらった、
全部分ってもらえたか疑問だが、ことは始
まったといえる。生きている地盤と自分の
中から座標をみつけなおしていく第三の道
その作業をヌキに地域は考えられない。

細田 地域をかくれミノにはできない。「金
冠」にも結婚が出てきたりラブシーンがあ
ったり、風俗に流れる要素がある。風俗の
表皮の裏から真実を掘りだす、何によって
かといえれば作者の作品における思想によっ
てだ。仮りに、結婚としてうまくみせよう
みたいな処に落ちこめば、戯曲の思想では
なく、個人の技術主義が覗けてしまう。……

…そういうまちがい許さない厳しさが、演出と創造指導部に必要だが、それがインタナショナルな世界観だともいう。地域性をインタナショナルなものに立させ倭小化してしまおうと、ひよわな甘いバラバラの創造しか生まれない。

安定はないということ

黒沢 「金冠」は国際的な問題だからインタナショナルなんじゃない。ほくらとの緊張関係が、そういう質のものに高めうるかどうかのキイポイントになる。

中沢 自分の視座をどうやって集团的に確立するかの問題だ。うちだって「金冠」のあと、家庭劇をやるかもしれない、国際問題専門の劇団になるつもりはないんだから。

佐藤 いや、これからも国際問題を主題にした芝居はやった方がいい。少くとも三割位は(笑)まっ正面からやるべきだ。

細田 自分の生き方をこんなにきびしく点検させられる、そういう芝居はサラにない。

佐藤 稽古場に劇団員が貼った「貧しいのは韓国の民衆だけか?」というフレーズ、翻訳者の辛さんが、これが再演にふみきった劇団の総意ですねと言ったが、そういう立

場に日本人として立つ、自分の中の真実をみつけたす意味が必要なんだ。

黒沢 何日か前の赤旗で、小林多喜二と志賀直哉のこと読んで面白かったんだが、志賀は勿論すぐれた作家だけれど、多喜二の描いた世界は書いていない、志賀に書けない世界を多喜二は書いている、というんだ。

東リ演説会で、劇団の顔とか特色とか強調したのも、そこなんだ。

中沢 ほくら東リ演でもっと自信もって提案すべきだね、こういう芝居やろうって。

佐藤 小田さんも「金冠」のパンフで、70演劇行動のように全国でやってほしいと、書いています。

細田 ただ「金冠」は、うちにとつてあれこれのレバの一つじゃなかったからな。

中沢 うん、安定路線の中じゃやれない。絶望しないと、一辺は。

細田 おれたち東京に近くて、一國一城の主なんて構えてたらスツとばされるだろう。そうでなかったら、適当な中央反発やカックコツきの地域意識の中で、それなりに安定して芝居やっていたんじゃないか。

中沢 この間、初期の東働演を話しあう集りに出席したんだが、あの当時はくら東京の

連中より進んでいると思っていたけれど、意欲だけで実は中味がなかったのに気付いた。芳地さんや全通、ブレヒト追っかけてきた全電通の連中の方が、職場と演劇のありようをつないで方法論を探索する上でずっと進んでいたんだ。…ほくらに欠けていたそこ、今やっと立ち始めた所だ。

細田 なんだか、小田さんたち迎えて京浜はみんなうまくいってる、と思われそうだが。

中沢 どうして、どうして。

佐藤 満身創痍もいとこだ。

細田 これだけステージを重ねてきて、怖いのはやはり流されること。毎回を新鮮にくくっていくことが、どれほど難しいか。

黒沢 芝居の感動をストレートに伝えている中心に、渡柔、山口といういわば未熟な役者の、全力投球の姿勢があるのは教訓的だ。

平沢計七のいう「真実の意味の熱」だ。

細田 そこを踏みはずすと大変なことになる。仮りに聞かされたものでもやると、高いところからのお説教になる。金芝河の精神とは何の関係もなくなってしまおう。怖いとおもう。

中沢 全く怖いんだよ、芝居は。

黒沢 ではこの辺で、どうも。



関西における戦前プロレタリア演劇の研究〈二四〉

大岡欽治

京都地方のプロレタリア演劇

日本プロレタリア劇場(演劇)同盟
プロット京都支部・京都青服劇場

はじめに

京都のプロレタリア文化Ⅱ演劇活動に参加した故杉村長之助氏のことを書くことを依頼されて、京都のプロット・青服劇場のことを急に調査することになった。

それは「京都市報」に「戦前の京都新劇」として三回に亘って連載されたが、紙面の関係もあって、僅かに要約したものになってしまった。

しかし、京都におけるプロレタリア演劇連動―青服劇場の創立から終えんに至る経路を

書いたものとしては、初めての記録である。そこで、調査した資料を基にして、京都プロットの活動の全貌の記録を、この機会に数回きいて挿入させて頂くことにする。勿論、前号までの大阪の活動については、そのあとさらに継続していく。

(1) 大正から昭和初期までの 京都の新劇界

京都は、日本の新劇史の上で、一つの特異の活動を展開したことは事実である。

それは一九一八(大正七)年に、小劇場運動としての新劇団「エランヴィクトール小劇場」が生れたからである。

「エランヴィクトール」という名は、その創立から、主宰者野淵昶の死去した一九六八

(昭和四三)年に至るまで、時には一時改名したり、無活動の時期もあったが、約五十年間継続したのである。

エランヴィクトール小劇場は、一九二四(大正十三年)、東京に出来た小山内薫と土方与志による「築地小劇場」よりも六年前に創立され、戦後に至るまで存在した劇団である。

〈註〉

①今ここでエランヴィクトールに就て詳しく紹介する余裕はない、松本克平著「日本新劇史」(筑摩書房刊)の内の「京都エランヴィクトール小劇場」の項を参照願いたい。
②野淵昶の死去のあと、私は「テアトロ」(第三〇〇号、一九六八年七月号)に追悼文を書いた。

明治維新以後、関西でも演劇の新らしい運

動提はあった。それを私は、季刊「新劇界」に「関西新劇運動史」として連載していくうちに、触れていくので、今は述べない。

京都における新劇運動を、一応一九一三（大正二）年の「関西劇術研究会」とすると、明治末期の東京の「文芸協会」「東京俳優学校」の影響を受け、次いで島村抱月、松井須磨子の「芸術座」の関西公演から、「エランヴィタール」の方向が打ち出されたといえるだろう。

野淵は「芸術座」の公演を南座で見た印象や、抱月や須磨子の当時の姿を、私に話したこともあった。

しかし、もう一つの東京の新劇運動、即ち小山内薫と市川左團次による「自由劇場」の影響は、一九一六（大正五）年三月に南座でゴリキイの「夜の宿」（どん底）の上演一同と、一九二二（大正十一）年に、左團次一座によって十月一日に、智恵院の山門を舞台にしたペリジエント「織田信長」でセンセーションを起したただけであるから、芸術座の京都公演七回に比較すれば、当然その影響は小さかったといえるだろう。

次の時代に移り、一九二四（大正一三）年前年だった関東大震災のあと、東京に出現

した「築地小劇場」の活動に刺激を受けた新劇団が関西に出てきたのは、翌一四年の築地の宝塚公演、続いて一五年の、宝塚、京都、大阪での公演活動が展開された時からだったといえるだろう。特にこの年十月に、大阪北の渡辺橋に出来た朝日ビル内の大阪朝日会館という、大阪の文化を表徴する文化殿堂の出現と、そのこけら落しに、「築地小劇場」の大阪第一回公演として、ロマン、ローラン作フランス革命劇「狼」が上演された反響は大きかった。

この上演に際して、作品が群衆劇であるため、関西の各大学の劇研からエキストラを募集することになった。私自身もこの時に応募した一人で、そのために、これから築地小劇場との関係も出来、新劇界に入る第一歩となった。

野淵は、築地小劇場より先に出発したという気負いもあっただろう。また「芸術座」の系列を追ったためでもあろうか、アンチ・築地を生涯主張し、やがて反プロレタリア演劇の立場で終始し、「純粋演劇論」を一貫して通した。

一方、築地小劇場は、大阪に確実な足場を得たので、翌一九二七（昭和二）年からは、

毎年京都、大阪での地方公演を定期的に持つようになった。このことは、関西各地の演劇青年は、築地の系列を追う演劇活動へ、劇団結成へと進展していった。

京都においては、特に大学生グループ、美術家グループ、映画人グループ、或はこれらの観合によって新劇団が結成されていったのは、京都という地域性から発生した現象ともいえるだろう。

一九二七（昭和二）年の京都での新劇団のリストには「美術劇場」（美術、映画、学生）の混成部隊。画家福田豊四郎、シナリオ作家八田元夫、演劇研究者高谷伸、それに学生だった山川幸世、大岡欽治など参加。「群衆劇場」（京大、同志社大演劇研究会が主体）「近代演劇社」（映画人日疋重亮、東京俳優学校出身主宰）「獨體座」（文芸協会系佐々木頼主宰）が挙げられる。

「エランヴィタール」も「伯父ワニーヤ」や「生ける屍」を上演して、入江たか子（後映画女優）をデビューさせたのだった。

翌年には、築地小劇場の京都後援団体「パシタルン」の構成員と、京大、同大の劇研のメンバーによって「原始劇場」が創立され

た。

これらの劇団は、それぞれに急進的方向、或は小市民的芸術方向を持っていることは、別表の上演作品表を見て理解していただきたい。

そして、このような急進的な劇団が出てきた原因としては、一つには東京からプロレタリア劇団の大阪、京都における諸活動があったからだった。

昭和二年九月に東京の「前衛座」が、大阪と京都で関西公演を持つことになり、十日大阪朝日会館、十二日京都岡崎公会堂で開催されることになった、ところが大阪では脚本検閲の結果、五つの作品の内、許可されたのは

村山知義作「進水式」同「カイゼリンと園医者」ウイットフォーゲル作「炭坑夫」の三本で、村山知義作「やっぱり奴隷だ」アプトン・シムクレア作「二階の男」の二篇は上演禁止になった。そして、いよいよ公演当日、先づ最初に「進水式」を上演したが、主役カイゼル（ドイツ皇帝）に扮した佐々木孝丸が、台本に「舞台でつまづく」とあるのを、気絶したので検束され、公演は禁止、佐々木は天満警察署に連行され、即決で廿九日間の拘留に処せられた。（この事件は佐々木孝丸の著

書や、その他に書かれているが、この場に一観客として私は一部始終を見ていた。

またこれで、京都公演は中止のはめに落ちた。しかし、そのために「検閲制度改正期成同盟関西支部」も出き、京都から京大、同大の劇研が参加した。このようなジャーナリズムも騒ぎだすので、一般のプロレタリア演劇に対する関心も高まってきた。

さらに翌昭和三年十二月廿五日には、わが国新劇運動の先覚者、自由劇場から築地小劇場の創立者であった小山内薫が死去した。（この日は「ナップ」の再組織の日でもあった。後述）

そして築地小劇場は、翌四年二月に「どん底」を小山内追悼公演として、大阪、京都、名古屋、東京で上演、それが終了した時、土方与志を中心とする脱退派が「新築地劇団」を創立、残留組は「劇団築地小劇場」を組織していった。その後にはプロレタリア演劇の高揚、東京左翼劇場の飛躍的発展があった。このような影響を敏感に受けとめたのが、京都では京大と同大の演劇研究会だった、当時、岡田文部大臣は、学生の演劇上演活動を禁止していたので、学内では研究会として、実際の上演は、劇団名を名乗って公然と舞台

に出すようになった。「群衆劇場」「原始劇場」の活動はその現れであった。

それぞれプロレタリア芸術連盟、それから分裂していった労働芸術家連盟、前衛芸術家連盟、さらにプロ芸と前芸の合同による全日本無産者芸術連盟（一九二八年三月結成）の地方組織の演劇部という形になっていった。

さらにこの年十二月に、全日本無産者芸術団体協議会（略称ナップ）となり、芸術各ジャンルの組織確立が計られ、一九二九（昭和四）年二月には演劇では東京左翼劇場、大阪戦旗座などにより日本プロレタリア劇場同盟（略称プロット）が成立した。

(2) 一九二九（昭和四）年

このように演劇の全国的組織が発足した時点において、京都ではまた劇団組織の確立に至らない状態だった。しかし急進的な方向にある演劇人は、この状況に即応して、京都にもプロレタリア劇団を組織すべきであるとの意見が一致して、「青服劇場」と名づけてプロット加盟を申入れた。ナップ関西オルグとして大阪に常駐していた久板栄二郎の協力もあって、同年三月五日に、プロット加盟劇団

として承認されることになった。

ところが、奇しくもこの三月五日に、帝國議会の治安維持法改正緊急勅令承諾案可決に唯一人反対していた山本宣治代議士が刺殺される事件が起きた。山本宣治は京都宇治出身、京大、同志社大の講師でもあった人であった。

翌六日、ナツプ関西オルグ久板栄二郎を中心に、ナツプの関西地方協議会の確立強化のための会合が、淀川の土手でもたれ、京都ナツプ地協を協議することになっていた。山本宣治の対策が持ちこまれた。

三月九日、山宣の遺骨が、宇治花やしきに帰ってきた時から、久板を初め京都のナツプ員は花やしきに閉じこもって、十五日の京都での労農界の準備を協議することになった。

この時に集まったものは、オルグ久板を中心、青服劇場としては辻本浩一郎、大同欽治、作家同盟から北川鉄夫、田木繁、映画同盟から上田勇、松崎啓次などがいた。

私たちは警官や特高に包囲されている花やしきに入るため、裏手の山を越えて潜入した。作家同盟では追悼歌の作成、青服劇場は十四日夜の通夜の席で上演する即興劇の制作準備、映画同盟では労農界のデモと式場の撮影

のためのカメラの手配など、こつた返しの状態になってきた。

追悼歌は北川鉄夫の書いた「東雲暗く反動の……」という詩を、赤旗の譜で歌うことになった。

西尾治郎平、矢沢保共著「日本の革命歌」(一社社刊)には詩、譜共に掲載されている。北川の「思い出」の一文も参考になる。

即興劇「山宣追悼」は、久板と北川と辻本浩一郎の三人が分担して書き上げた。

この台本は、プロット機関誌「プロレタリア演劇」の山宣追悼特集に掲載されている。その構成は次の如くである。

即興劇

山×(宣)追悼(六場)

一九二六・三・一四 山×(宣)宅に於て京都青服劇場演出

第一場 ブルジョアの妾宅 (ブルジョアと田中の対話、妾、鈴×(木文治))

第二場 待合の一室 (黒田半金で承諾)

厳しい服装の男(警視總監) 黒×(田)ブルジョア

第三場 旅館 (黒田、山宣、女将の問答)

第四場 街頭 山×(宣) 暗×(殺)の号外を読む

第五場 衆議院第一控室 (裏切者の協議)

第六場 衆議院本会議 (アジ演説)

内務大臣 浅×(原) 奥×(村) 甚××(之助)

八註

- ①「プロレタリア芸術教程」第三輯(世界社刊)所載 久板栄二郎「プロレタリア戯曲作法」の内の「四 煽動劇の戯曲に就いて」において、大要を説明している。
- ②前記の部分、秋庭太郎著「日本新劇史」下巻(理論社刊)に再録されている。

この劇は三月十四日夜、花やしきの二階の大広間の床の間に、山宣の遺骨を安置し、西日本の各地から集った労働者農民の代表約百五十名の前で、座敷の二畳位を使用して演じ

られた。演出は、久板と辻本、私は装置(といつても機を利用したり、机や座蒲団位を使用し、旅館の場は障紙の外の廊下を使って影絵式にしたりした。)と効果を受持った。

山宣は舞台には出ないのだが、声とした山宣の声色の上手だった田村敬男(政経書院経営、借家人同盟、現在京都ライトハウス常務理事)が演じた。

最後の衆議院本会議の場では、奥村甚之助(当時はまだ革命的労働者だった)がアジ演説をぶった。

その他、合唱として、ナツプ員によって「黒い嵐」「赤旗の歌」と共に「山宣追悼歌」が歌われ、また詩の朗読「故山本宣治を悼む」と「死んだ娘のうた」二篇があった。

確かに劇としては、単純素材だったが、明日は治安維持法のために斗った山宣の労農界を行う前夜であり、生々しい場面が与えた感銘は大きかった。

その翌日十五日、京都三条通りの青年会館を会場とする「山本宣治労農葬」が行われるので、山宣の遺骨をかかえて、花やしきから京阪宇治駅までデモをしながら宇治の町中を通る状況を撮影したのが、現在残っている

「山宣労農葬」というプロレタリア・ドキメンタリー映画である。

撮影は八ミリ二台のカメラで、プロキノの上田勇と松崎啓次が担当。私は松崎と組んで花やしきから宇治駅までのデモを、時には民家の二階から、時には道端の溝に入って実況を撮った。

しかし宇治駅で特高に追いかけてられ撮れなくなってしまうが、この映画は今日でも残っており、日本映画の貴重な作品となっているのは喜びである。

当時プロキノ員であった映画評論家岩崎昶は、その著書の中で、この映画が誰が撮ったかわからないと書いているが、事実は以上の通りであった。

京都三条通りの青年会館は、制服のポリと私服の特高で完全に包囲され、目ぼしい人物はすぐに検束されたので、それを奪還しようとする大衆のデモが組織され、京都の中心地三条、四条、五条の大通りは終日どよめいていた。

八注

山本宣治労農葬及び「山宣追悼劇」上演に関する記事は次のものがある。
①プロット機関誌「プロレタリア演劇」

一九三〇年八月号「究禁 特集「山宣追悼」号

②「赤旗」(一九六八年四月一八日号)

③「近代日本演劇の足跡」③「山宣追悼」大岡欽治

④「踊りもの 京都新劇史 その二」(一九七六年 京都新劇団協議会発行)

「戦前・戦後の京都の新劇」北川鉄夫 「私の京都新劇外史」北川鉄夫 北川の文中には、「山宣追悼」劇の作者を久板、北川と神戸ナツプの三木武夫としているが、これは誤りで三木ではなく青服の辻本浩太郎である。三木は関西の学生で大阪戦旗隊員であるが、この時には参加していない。前記「プロレタリア演劇」に執筆している北川の記事「山×追悼」の上巻の内に辻本と書いてあるので、北川の記憶の誤りである。

山宣暗殺について、「日本共産党の五十年」は次の如く記している。(新日本文庫版、五十五頁)

「政府は、この第五十六帝國議会が日本人民にとって最大の屈辱の一つである改憲治安維持法を、一九二九年三月、強行的に通過さ

せたが、これに反対して敢然とたたかっていた旧労働者の山本宣治は、その夜、暴徒によって刺殺された。党は民主主義と人民の自由のために生命をささげた山本宣治の活動をたたえ、死後のかれを共産党員としての資格をもつて仰ることをきめ、労働報をおこなった。

一つ別の記録がある。それは「日本プロレタリア劇場同盟第二回全国大会議事録(抜萃)」の内にある青服劇場の報告の記録である。その関係部分を挙げてみる。

しかし、その創立当時に参加している私の資料や記録、そして記憶には「急進劇団春秋座、戦斗座」に因して何も残っていないのである。沖圭一郎、小山勇、西条栄二の三名は、劇団創立当時はまだ参加していないのだが、どのように調査したのか、今となっては分らない。

前記のように、私は「群衆劇場」「原始劇場」には参加したが、そこを脱して青服劇場の創立に参加するようになってきたのである。

▲注▼ 参考文献資料

- ① 佐々木敏二「山本宣治」上・下 汐文社
- ② 田村敬男編「山本宣治―白色テロルは生きている―」宝賀書店刊
- ③ 西口克巳「山本宣治」(「礎をきづいた人びと」京都民報社刊)
- ④ 西口克巳「青年に贈る、山本宣治の革命的生涯」(雑誌「前衛」四一七号 一九七七年十一月号)
- ⑤ 「山宣研究」(第一号、第二号、京都「同志社山宣会」発行)
- ⑥ 映画「武器なき闘い」 山本薩夫監督
プロキノ映画「山宣労働舞」
「プロキノ」青服劇場の創立について、もういっ。

京都新劇略年表 (1)

年月日	劇団名	会場	戯曲名	作者	演出者	出演者	その他	備考
1912 (明治45) 年								
6/27~7/2	文芸協会	南座	故郷	ゲーデルマン	島村抱月	松井須磨子		文芸協会京都第1回公演
1913 (大正2) 年								
2/21~25	文芸協会 関西劇術研究会	南座 新座	思惟僧	ライエルフ エメル ヌテル ハカナトマン	松原松憲	松井須磨子 奥野香之輔	京大藤代博士後援	第2回公演
1914 (大正3) 年								
4・24-28	芸術座	南座	復活	トルストイ アフリカ バグアイユ	島村抱月	横川唯治 松井須磨子		芸術座第1回公演
11・15-19	芸術座	南座	剣刺	中村吉蔵 中村吉蔵 シェイクスピア	中村吉蔵 中村吉蔵 島村抱月	松井須磨子 中井哲	「カチヤー」の明し和馬綱風詩中山晋平曲	第2回公演
1915 (大正4) 年								
1・8-12	新劇社	南座	出発前半時間	ウエデキン バズナ アブ・シ イ	伊庭孝	伊庭孝 酒井よね子		第1回公演
5・25-29	芸術座	南座	夜の前進	ツルゲーネフ 楠山正雄 オスカー・ワイルド	中村吉蔵			芸術座第3回公演

1916 (大正5) 年

2・4-8	芸術座	南座	与真論 人 間 清盛と仏御前	中村吉蔵 中村吉蔵 島村抱月			検閲改訂	芸術座第4回公演
3-22-26	自由劇場	南座	夜の宿	ゴーリキイ シェイクスピア	小山内 薫	市川左団次		第1回公演
7-12-16	無名会	南座	マクベス	坪内逍遙	坪内 士行	東儀 鉄笛 香川 玉枝		第1回公演
10-25-29	芸術座	南座	爆 発 アンナ・カレニナ	中村吉蔵 トルストイ 松居 松葉		中井 哲 松井須磨子 沢田正二郎		芸術座第5回公演

1918 (大正7) 年

1-12-16	芸術座	南座	生ける屍	トルストイ 島村抱月・川村花菱	野淵 昶	松井須磨子 武田 正憲		芸術座第6回公演
4-18	エランヴィ タル小劇 場	同志社 青年会館	帽子ピン 未能力者の仲間	中村吉蔵 武者小路 実篤	野淵 昶	中井 哲		第1回試演会
9-18-27	芸術座	南座	沈 鐘 神 主 の 娘 暎の女房を 持てる男	ハウプトマン 楠山正雄 松居 松葉 アナートル・フ ランス 坪内 士行		松井須磨子 中井 哲 河合 武雄		芸術座と河合武雄の 公衆劇団の合同公演 松竹提携第1回

1919 (大正8) 年

1・5	松井須磨子自殺、芸術座解散							
9	自由劇場、帝劇にてユーージェェス・ブリウ作・小山内薫訳「信仰」を上演。最後の公演となる。							

1920 (大正9) 年

6-1-8	新文芸協会	南座	三浦製練場主 法 難	久米正雄 坪内逍遙		東儀 鉄笛 森 英治郎		
-------	-------	----	---------------	--------------	--	----------------	--	--

1921 (大正10) 年

10-28-29	生命座 (エラング ィタルの 改称)	南座	能 祇 罪 と 罰	田 島 淳 ドストエフスキー	野淵 昶	野淵 昶 佐野 篤 郡 光子		第24回公演
----------	-----------------------------	----	--------------	-------------------	------	----------------------	--	--------

1922 (大正11) 年

4-24-28	舞台協会	南座	出家と其弟子	倉田 百三		山田 隆弥 岡田 嘉子		
10-1	左団次一座	知恩院山 門前	織 田 信 長	松居 松葉	小山内 薫	市川左団次	(一時混乱す)	松竹合名社主催ベ ージェント

1923 (大正12) 年

9-1 関東大震災

1924 (大正13) 年

6-13 東京に築地小劇場開場

1925 (大正14) 年

8-29- 9/3	築地小劇場	宝塚 中劇場	牧場の花嫁 犬 海 戦 横っ面をはられる 彼	シュートランム 小山内 薫 チェエホフ 小山内 薫 ゲエリング 伊藤 武雄 アンドレーフ 北村 熊沢	小山内 薫 小山内 薫 土方 与志 青山 杉作		マチネエ 夜	関西地方 宝塚第1回公演
--------------	-------	-----------	------------------------------------	---	----------------------------------	--	---------------	-----------------

1926 (大正15) 年

3/22-27	築地小劇場	宝塚 中劇場	熱 風 白鳥の歌 長男の権利 ホ ー ゼ	ストリンデル 楠山正雄 チェエホフ 小山内 薫 T.C.マアレ 小山内 薫 シュテルンハ 久保 栄	青山 杉作 小山内 薫 小山内 薫 土方 与志		マチネエ 夜	宝塚第2回公演
---------	-------	-----------	-------------------------------	--	----------------------------------	--	---------------	---------

10・4	築地小劇場	岡崎公会堂	つ横面をはられる 被息子	アンドレーフ 北村・熊沢 小山内 薫	土方 与志 小山内 薫	汐見洋・若 宮よし子		京都第1回公演
	"	"	馬盗坊 海戦	バーナード・ショオ 森 鷗外 ゲーリング 伊藤 武雄	土方 与志 土方 与志			
10・16-18	"	大阪朝日会館	狼	ロマン・ローラン 高橋 邦太郎	土方 与志			朝日会館初開場 大阪第1回公演

1927(昭和2)年

1・29 30	築地小劇場	岡崎公会堂	愛ホ	武者小路実篤 シュテルンハイム 久保 栄	土方 与志 土方 与志	友田 恭助 山本 安英 細川ちか子		京都第2回公演
5・17-18	美術劇場	三条青年会館	紙風船 生きている小平次 街角	岸田 国士 鈴木 泉三郎 高田 保	泉 三善 高谷 伸 八田 元夫	上演禁止		第1回公演
5・13-19	築地小劇場	松竹座	休みの日	エミール・マゾオ 小山内 薫	小山内 薫			映遷アトラクション
5・20-21	エランヴィ タール小劇場	青年会館	犬	チェーホフ 小山内 薫	野淵 昶			第2回公演
6・22-23	美術劇場	青年会館	心にもなき悲劇役者 ある時代 ケルンの鐘	チェーホフ 鈴木 泉三郎 小島 昂	野淵 昶 八田 元夫 高谷 伸	入江たか子 (初出演) 山川 幸世 大岡 欽治		第47回公演
6・25-26	エランヴィ タール小劇場	青年会館	留商船テナシテイ	岸田 国士 ヴィルドラック	野淵 昶 野淵 昶			第48回公演
9・6-7	近代演劇社	岡崎公会堂	牧場の兄弟 ベルス(鈴の音)	久米 正雄 シャトリアン	日正 重亮 日正 重亮	歌川るり子		

9・12	(東京) 前衛座	岡崎会堂	進水式 二階の男	村山 知義 アプトン・ シンクレア	村山 知義 佐々木孝丸		上演中止 上演禁止	10日大阪朝日会館公 演中佐々木孝丸検束
			やっぱり奴隷だ 炭坑夫 カイゼリンと歯医者	村山 知義 ル・メルテン 村山 知義	村山 知義 佐々木孝丸 村山 知義		上演禁止	され拘置されたため 創立10周年記念公演
9・20	エランヴィ タール小劇場	岡崎会堂	生ける屍	トルストイ	野淵 昶	入江たか子		
9・21	検閲制度改	正期成同盟	結成(京大・同志社)	演劇研究会参加)				於大阪
10・29	群衆劇場	先斗町 歌舞練場	ブルジョア・ シッペル	シュテルンハイム 久保 栄	高州 基 工藤信一良	築地 浪子 大岡 欽治	京大・同志 社演研後援	京都第1回
11・15	同志社演劇 研究会	同志社 チャペル	狼	ロマン・ロオラン 高橋 邦太郎	山川 幸世 蘆葦 三郎			
11・17-18	築地小劇場	岡崎会堂	伯父ワーニヤ 熊	チェーホフ 米川 正夫 チェーホフ 米川 正夫	小山内 薫 小山内 薫			第52回公演
11・25	エランヴィ タール小劇場	岡崎会堂	ジュノーと孔雀	ショー・ オケイシイ	野淵 昶			
12・18-20	偶體座	先斗町 歌舞練場	寛大な恋人 或る両室の主 性 真 似	アーピン 武者小路実篤 菊池 寛	野淵 昶 佐々木 積 " "			第1回公演

劇団通信

通信依頼の要領

- ①八月の東西リ演・総会・ゼミ参加の感想
 - ②近況、公演の成果など
 - ③今後の展望とスケジュール
 - ④その他御意見感想
- (通信はほぼこれに準じて答えてある)

劇団未来

秋です。お元気のことでしょう。……とはいえ、いつも本当にご苦労さまです。感謝もねざらぬ言葉だけで、何程かのご支援も出来ないのを、心苦しく思っております。どうぞご奮闘を。

◇西リ演総会は「いこら」の本拠・湯浅町で大変楽しい総会でした。何しろ、来年のゼミナールをもう一度湯浅町でと決ったくらいですから。「いこら」の皆さん、どうもありがとうございました。

◇さて、劇団創立15周年記念②は期待の創作劇(和田澄子が病身をおしての久々の力作)

「ああその時の太陽は」(寺下保演出) 11月24・25日、大阪郵便貯金ホールです。「女工哀史」が書かれた大正時代、紡績女工の実態を赤裸に浮きぼりにしながら、クキリと生きる。先覚的婦人労働者の愛と闘いの青春ドラマ。ご期待下さい。

◇いま、けい占だけなわ。女優陣が先頭きって張切っています。男も、もろん(N)。
(大阪市西区江之子島一丁目七十一
新うつぼビル4F)

①西リ演総会。私達サークルからは2名参加和歌山の湯浅での「いこら」の、地域での結びつきの大きさと、深きに大変うらやましく思いました。民主町政の中での「いこら」の役割が本当に町民の中で理解され、支持されている姿に、私達の伊丹でも、一日も早く民主市政を確立し、その先頭に私達が文化活動を強化しなければと、学ぶこと多くが大変参考になりました。

②9月15日(祭)。第一回青年劇場「走れ!俺達の明日へ」2幕7場。作・井上満寿夫、演出・山本哲也。於伊丹文化会館大ホール。観客四五〇人。

当日は敬老の日でもあるので老人無料招待

を企画したり、当日は作者の井上氏、劇団大阪の熊本一氏にも観劇して頂き、公演終了後ロビーにて台評会を行いました。その中で、舞台の空間・テンポが少し間のびし、全体に少しノンビリしているのではとか、演出意図がよく理解できなかったとか、構成舞台の転換がスムーズだったとか、全体に新鮮さを感じた等の意見が出ました。

③第2回親子劇場は、初の創作で、12月公演予定。(於伊丹中央公民館)サークル員の水野希民子の創作で、山本哲也の演出を予定。
(文責・宇間太朗)

(伊丹市千僧字船原20-9坂上方)
劇団四日市市民劇場
静芸の皆さん、すばらしい舞台を観せて頂き、ありがとうございます。
からつ風、つくし、やまなみの皆さん、お世話になりました。
やまなみの有志と、四日市の有志で計八名が、皆なの帰ったあと、清風荘で、もう一晚泊してもらいました。

昨夜のあの猛烈な熱気が、うそのようにごっそりと、風も夏を忘れたように涼しく、互にじっくりと感想を出し合いました。
こうした東リ演全体のゼミが、隔年毎にな

るのは、いさか淋しい思いです。しかし又相まみえる折は、きつとすばらしい、エネルギーが集まると信じます。
体を大切に、(特に梅津さん、私のような中老は)地域に深く根ざした活動を積み重ね実りある報告を引っかけて、など考えるのです。

現在ほこども向き、大人向きと多様なレパートリーに取り組み、移動小公演をこまめに消化し、忙しい秋を経過しております。ちょっと変わったことでは、十月三十日(日)午後一時より、四日市市民ホールで、森賢郎・作並構成・演出「緑よ、水よ、空よ、海よ、我が故郷よ」全5景を公演します。

これは市制八十周年記念、市民文化祭フェスティバルと銘打ち、地域に育った軽音楽、器楽、洋舞、合唱、演劇の各パートがひとつの脚本に結集したものです。総会でも、若干話が出ました、地域での演劇以外の文化団体との関連、動向に、この公演は何らかの答えが出てくるものと確信しております。(森)

(四日市市栄町四一九 アンデレセンカ
I内)

劇団尼崎フアーベル

①西リ演総会、劇団員5名全員参加で、特別

報告までさせてもらい、いつになく西リ演に近親感を覚えていきます。いこらの活動も本当に地域に必要なものになっているのを感じました。政治の革新を望むなら演劇の革新こそ私たちの使命ですね。

②最近の成果。新人2名入団ノ新人研究コースを開設します。只今、新人大募集中です。きぬという道連れ、ケイコ場12回、労働福祉会館3回、合計15回公演を終えました。

③今年中に創作劇をつくろうとしています。これをもって来年は、地域の労働者の中へ深く入ってゆこうと思っております。現在資料あつめと人さがしにあけています。
④その他のこと。きぬという道連れ!上演の際、丹後へ行って現地取材と丹後の現状とその地を懐き織って来たおばあさんや、安保の時の闘いや組合づくりの話や丹後の女の強さを聞いて、地域の人たちとともに創ること、演劇的行爲だと再確認しました。そのことが地域の素材の中で私たちの芝居をつくらうと気持がかりたてられました。

(尼崎市杭瀬北新町3-147
尾尻コーポ4F)

名古屋演劇集団

①遂に念願の新しいけい古場へ移転いたしましたノアドレスは次の通りです。
〒451 名古屋市中区庄内通4-16-3

TEL 〇五二一五二四一五九七五

10月1日が移転日だったので、大変なガラクタの山、いや貴重な道具類をかかえて難航、前後10日間程かかりそうです。いよいよ永久的拠点が出来たと思うと……いや借金の山のことを思うと……胸が一杯です。

②9月21・22両日、中小企業センターホールで、寺島アキ子作・若尾正也演出の「かあちゃん達の明日」上演が好評……自分等でもピント来ない程の好評のうちに終わりました。
「お客の方から電話がどんどんかかって」来てと劇団のあちやん達は満足そうです。
③いよいよ秋の移動ラッシュです。例えば11月は「アンネの日記」「奇蹟の人」「夕鶴」「三家福」の四本が、11日上演します。移動とからんで、てんやわんやのうちに研究所もふくめて、三ヶ所、四ヶ所からけい古の音がわかかえています。12月頃には新人の勉強会を、3月には第2回創作劇場を予定していますが作品は未定。

④劇団内にスタッフ中心のプロダクションを

作る意見が強くなりつつあります。主として三十代の男性達から出ているわけですが、生活がかかっているので慎重に検討中です。劇団めんくら座

いつも「演劇会議」の編集・発行御苦労様です。もう西リ演の総会の報告でご存知だと思いますが、この八月に劇団荷車を解散して新しく劇団めんくら座を発足させました。つきましては、めんくら座は西リ演に非加盟のため、荷車時代の演劇会議20部は停止して下さい。今度の劇団の中にはまだ西リ演のことや演劇会議のことを知らない人が多いので、とりあえず購読をつづける希望者を把握して早急にお知らせします。

追伸。旗上公演は、十二月八日に「銀河鉄道の恋人たち」を上演します。(季広和枝)

(姫路市南畝町四三九 内田方)
世仁下之一座

①東海ブロックの奮闘によってゼミが成功の内に終わったことを深く感謝いたします。(創作分科会での切っ先鋭い意見の対立を期待したのですが自分に対する不満も含めて残念だったと思います)②6月25日。創作「明治暗黒台驛子」を無事終えて。③12月16・17日創作「別れが辻」(作・岡安伸治)東働演参加

第5回本公演、四ツ谷公会堂にて。5年目を迎えて一つのくきりと云う意味でこれまでの歩みとこれからの展望について討議を企画中(東京都練馬区羽沢2の23美好在一五)

劇団河童

②十一月五日(土)「三角帽子」へ向けて週五日の稽古です。二十一年目の再演ですが、全団員初めての作品です。衣裳は原則としてジーンズスタイル、各景紹介の看板持ちを設け、全部異なった方法で観客へ伝える予定です。音楽は生ギター二本でスパニッシュダンスも取り入れる予定です。

八日に稽古場交流会をやりまします。オホーツクブロック主催で、今年から取組み、七月の美幌交流会につづき2回目です。道演集加盟劇団にとどまらず、農村青年団も参加します。十二月四日には、市民会館をまきこんでの効果音に関する教室も開かれます。(六月には照明がありました)

今年から、劇団機関誌も発行できないのにブロック機関誌を発行。すでに第3号で、年内には第4号も出ます。2号から、オホーツク演劇教育連盟の松岡義和氏に実務をお願いしています。

③来年は第八回道演集全道演劇祭兼第四回オ

ホーツクブロックの演劇祭(北見で)の年で、日程は九月十六・十七日の二日間。創作劇で参加したいと思っておりますが……。

劇団やまなみ

○八月のゼミには、事務局の応援も兼ねて十一名が参加。三百名の受入れ業務の一垣をこなしての経験は貴重なものとなりました。この経験を生かして、来年のブロックゼミの受入れ体制を確立したいと考えています。

○昨年来の懸案であった山梨演劇フェスティバルが開かれました。始めてのことで、取組む側は若干のときどきもありましたが、十月一日富士吉田、十三日甲府で、四劇団の公演がもたれました。表現座の「彷彿」どんぐり座の「祭り」、演集の「迷散」、やまなみの「鳩」。

○秋の公演は、森本薫「女の一生」に決まりけい古に入っています。公演は十二月十四、十五日の両日、県民会館小ホールです。

○けい古場の借り歩きで音をあげています。今年中に構想を練って、来年はどうしてもけい古場をつくりたいと思います。

(甲府市青沼一丁目八―五)

岡崎演劇集団

①(総会感想)多くの議題をかかえてなのでしかたがないかもしれませんが、重要な問題がとつくりと議論できず、時間に迫られる結果となったことが残念。(ゼミ感想)今回若い劇団員が多く参加したので彼らから聞いてみると、芝居をつくるのがいかに難しく大変なことかを感じたとのこと。また多くの仲間がやっていることにはげみを得たようです。

②③今は、十二月の公演「三角帽子」のけい古をしており、それとともに新人教育も併行しておりますが、いづれも出席率が悪く思うように捗りていません。十月下旬より子供劇場「三家福」のけい古に入るので忙しくなり、出席率、けい古共拍車をかけなくてはなりません。上演日程。十一月二七日市芸術祭参加子供劇場「三家福」十二月十八日第18回公演「三角帽子」

④東リゼミ中、「私と舞台」の分科会の一つでチューターの独善的な進め方があったようですので残念に思います。(柴田)

(岡崎市元町三丁目十の三)
劇団展望

アンケートのお葉書いただき恐縮でございます

ます。劇団展望ではまた東リ演参加の資格を得ていませんが、東リ演との連帯を日々の仕事の中で自覚している集団とお考えいただきたいのだなとご好意を喜びながら記します。

②③一九七七・十二月8日・12日 阿佐谷小劇場にて。集団創作「真昼のちようらん」―日本繁栄学落第―を上演いたします。(後篇は来年四月6日・10日の予定です)

一九七六年「プレヒトの会」のお仕事「七〇年代の総括・日本の恐怖と貧困」をテーマに四人の作家(大橋喜一・芳地隆介・矢野喬・山田民雄の四氏)による「日本繁栄学入門」に刺激されて、私たちがなりの問題提起と行動をめざしたものです。

その主題はともかく設定した状況に無理があるネ。この人物の選択した行為は?これは生活描写にすぎないよ。等々、毎日検討と変更です。

目下基礎台本のそのまた母体らしきものはできていますが、十二月の上演当日まで討論と稽古を通じて、より先へ進みたいと一同やっております。

(東京都杉並区阿佐谷南三―三三三二)
劇団ぐみ

①八月の総会には九月公演だった為参加する

ことができませんでした。

②九月三日、米子市公会堂に於て定期公演を行いました。作品は「たけのこ」煙突のあるオアシス。観客は二百六〇名。券は倍以上出していたのに観てもらえなくて残念。役者の半分が両方かけもちといった状態で、公演前日まで大変でした。

③十一月十九日、米子市公会堂に於て市民芸術祭が開かれます。それに「妻ふみ」をもつて参加します。

④みんなが自分の意見をどんどん云える組織づくりを。

追記・演劇会議11部よろしくお願ひします
(米子市富益町四五九)

劇団いこら

○西リ演総会には、大変へんびなところまで足をはこんでいただき申訳ございませんでした。これまでお世話になりましたが、これまでもお世話になりました。あらためて、会場うけいれ地のこれまでの御苦勞がおもわれました。

○その後「ともだち劇場」のともだちと遊ぶだけです。いままなお展望が生まれません。

(栗原)

(和歌山県有田郡湯浅町馬浅二二五九)

演劇集団わだち

先号は近況報告が出せず大変失礼しました
ある東リ演所の方から「貴団の活動を楽し
みにしているのに何故送らないのですか」と
きつく叱られました。今後は心して送ること
に努めます。幸い、次回からは木下という担
当者も決まりましたのでユニークな報告をし
てくれると思います。

民芸、関芸、そしてわが劇団とひととき大
阪で起った「奇蹟の人」ブームも終り、劇団
の総括も済み、現在は「陽気な地獄破り」小
学校公演・米村嶺広演出でとりにくいでいま
が、そのあとが仲々決りません。おそらく来
春の「大阪春の演劇まつり」に創作劇とい
うことになれば……と思っっています。爽り豊
かな秋、皆様がたのすばらしい創造活動を願
つてやみません。

大阪府福島区福島6-12-17
川村ビル4F

人形劇団クラレテ

①西リ演総会参加できなかつたので解りませ
ん。

②近況・成果

A 8月下旬〜9月上旬まで「ゼロ弾きのゴ
ーシュ」をもって北海道・東北の親子劇

場を好評のうちに巡演

B 9月下旬〜10月上旬まで「お父さんがく
れた燃える草の実のくびかざり」をもつ
て沖繩・九州の親子劇場を好評、巡演
C 10月20日の初日に向けて近松人形芝居・
其ノ五「嘉平次おきか・生玉心中」の制
作、ケイコも奮闘中

③今後の展望とスケジュール

A 来年昭和53年は劇団創立30周年を迎える
ので目下盛沢山の企画を予定。
B こどものための人形劇上演予定。来年2
月に「どんべさんの赤ちゃん」二幕を堺
市民会館を皮切りに一年間上演します。
(大阪府住之江区南加賀屋4-17-22)

青年劇場

①今年の東リ演ゼミ・総会には「偽原始人」
の東京公演を控え、また「かげの誓」の作品
も役替え稽古と重なっていたため参加者を多
数出せなかつた(今年は延べ6名が、それぞ
れ大変いい勉強になったようである。現在感
想文集を作成しておりますので出来次第送
ります。「旅立ち」大変好評です。劇団のレバ
ートリーにあげたい動きもあり、只今戯曲を
更に読み深めつつあります。
②井上ひさし原作・瓜生正美台本・堀口始演

出「偽原始人」を9月8日〜12日、東京一般
公演(6ステージ、入場者数、招待客も含め
て二二五八名)。9月6日高校公演2ステー
ジ。受験地獄、乱塾、家出、自殺、退魔的マ
スコミ文化をパロディ化して描き、現代を諷
刺した今回の作品は、笑いの渦の中で、好評
の裡に終る。続いて、学校公演の旅に出発、
関東、中国、九州を12月下旬まで巡演。

③小寺隆昭作・堀口始演出「かげの誓」は9
月中旬から12月末まで、労演、実行委形式の
一般公演、子ども劇場、おやこ劇場、高校、
中学など幅広い観客に迎えられて巡演中。
(東京都渋谷区千駄谷五-33-6)

人形劇団京芸

女西リ演第16回総会の感想
本当に久しぶりに総会に出席してそれぞれ
苦しい状況下にもかかわらず、地道に地域の
住民運動と結びついて活動されている湯浅町
での「いこら」の活動、又こどもたちが、自
主的に人ともだち劇場Vで楽しみながら、学
んでいくのを指導されていることは、一方全
児演での児童劇運動に一つの問題提起になる
と思いました。
早八月末日慣例の大学習会をやって、今年
は「発想の転換」と云うテーマで清水寺に出か

けて、宗教と社会主義思想についての講話を
聞きました。

・9月4日には京都でのルーマニア児童劇
団歓迎交流会に積極的な役割を果たしました。

・9月17日。第9回人形寄席が今年もやら
れました。今年は狂言の茂山氏の狂言人形劇
台本と演出でひげやぐらをやって劇団員はい
い勉強をしました。茂山氏のお話では、京芸
のみなさんは小学校の公演をよくやって発声
がきたえられているのか、はじめてにしては
良いセンを行いましたとの事でした。元々狂
言の発声は野外用のものだそうです。

卒来年は劇団にとって一つの転機に立つ年
なりそうです。劇団員の約半数以上が世帯持
ちになりましたし、その生活保証と保育問題
編組の改正、宇治白川の京芸技を今後どの様
にしていくか、現実的な課題で苦しんで何か
を生み出さねばならない年になりそうです。

(事務局長・辰巳鈴太郎)

中野動演

ここにちには中野動演です。

①夏の東リ演ゼミには中心メンバー四人が参
加、静芸のモデル上演に、我集団のかかえた
演技的課題と同じものを感じました。生きた

現実生活の体現のむずかしさと型にはまった
演技等。各分科会においては感想は賛否両論
各集団のカラーをどうよい刺激として集団に
もち帰るかが参加したメンバーの重大な任務
でしたが、集団を強化して多忙なスケジュ
ールをこなしている他劇団に負けじと鼻息荒く
頑張ろうと思えます。

②ただ今、オフ・ブロードウェイ・アクチ
ユアルシアター・パート2に向つての公演体
制に入っています。マレー・シスガンの「虎」
とブレヒトの「闇の光」の二本を俳優座の佐
伯氏を演出に迎え、11月27日中野駅近くの喫
茶店「シモヤ」で上演しますが、人数足りず
に困っています。新人の出入りが多く、事務局
として人間関係づくりから芝居のおもしろさ
から新人に対応できるように人材がほしいと
ころです。それと二年計画で稽古場を借りよ
うと貯蓄をはじめました。現在手もとの積立
貯金の口座には五万二〇〇〇円とうちこまれ
ています。前途多難。されど光ありです。

(牧山記)

①総会、又ゼミにおける分科会、交流会等は
意義深く一定の成果があつたとしたが、モデ

(東京都中野区新井二丁目18-五渡辺方)

演劇集団未踏

①総会、又ゼミにおける分科会、交流会等は
意義深く一定の成果があつたとしたが、モデ

(東京都新宿区新宿一-10-15
新宿御苑ビル内)

関西芸術座

①「劇団いこら」のおひさまとでの総会。栗原さんの運転するバイクのうしろに乗って、町の有力者の方々へ挨拶廻り。街の辻々ですれちがう住民とアイサツがかわされる様子にまさに「いこら」が湯浅町民の劇団であるという実感がわく(仲)

総会は、運動への苦悩をどう突き破るかなど例年になくとても重い感じ。「月曜会」の「ジョー・ヒル」を通じての「演劇の祭り化」は一つの燭光。

②二十周年記念公演「桂春団治」は毎日新聞社後援などの今までにはない大きな企画だったが九月二十八・九日毎日ホールは盛況。久しぶりに一七〇〇名動員。観客もずいぶん広がった感じ。仁鶴さん、都蝶々さんなどの顔もみえ、楽屋見舞いたく。

③新稽古場建設いよいよ開始。53年3月末完成予定。資金募集中。仮事務所、稽古場次の通り。

(大阪市西成区萩の茶屋二一九一七
近畿高等美容学校4F)

電話 ○六一六四七—三一八五七

劇団大阪

東西り演の皆様、お元気で御活躍の事とお

劇団協同

東海Bのみさん、ゼミナール本当にごくろうさんでした。来年は会えないのかと思うと残念です。

私共は八月末までの「子ども劇場・移動小公演」が五会場、ハステージ、千二百名余で終了し、秋の21回公演の準備に大車輪のところで。

21回公演は再々「若者たち」に取り組んでいます。今公演は郡立川社会教育会館創立十周年記念行事のひとつで、共催事業として行なわれます。又演劇集団「未踏」の岡部政明氏と地域演劇サークル「びよ」の二名の方の客演協力もあり、前回以上の舞台をと張り切って準備を進めています。

とは云え、回分にも少人数の上、今年は一月より例年になく上演回数が多く、全員少々バテ気味なところもあります。公演日は十一月二十六日(土)、二十七日(日)の2ステージです。

(立川市曙町三丁四八七)

劇団静芸

○全国ゼミナールを担当した東海ブロックとしても、予想を上廻る全国の仲間に出会い感激しました。「旅立ち」を軸にというスロー

もいます。

湯浅での西り演総会には四名の代表が参加しました。その中で感じた事。役者の問題。

「生き方だけで芝居が続けられるのか?」「寄つかれる技術的なものも必要ではないのか」「全力を注いで好い舞台が創れる」「いつも同じ芝居に観える」等や演出の受け止め方と役者の受け止め方の違いもある月曜会の「ジョー・ヒル」は楽しかった。「河」はもう芝居をやめようとおもったという役者さん、二つともそんなに凄らんといい土屋さん。

又、女、子供に新劇が乗っ取られるとだけかが言ったノ一般公演から児童劇、子供相手の劇団活動の問題。一般公演では仲々お客さんも集らんし、団員も燃えないが、子供の公演では楽しくやれて団員も燃えるし黒字にもなる等の報告。たしかに長い目で見ての判断というより、やむにやまれずといったこともあるし、そんなところが増えてる事が問題やないとも感じつつ、いづれも充分煮つまるころまで行かずに残念でした。が、西り演の現状を知る上では本当に良い総会であったとおもいます。

さて私達の公演が先日、十月五、六日「あ

カンで行われた全国ゼミ、それに果して答えたのか。劇団はほとんどの劇団員が参加し、上演者として沢山の教訓をえました。期せずしてこの様なゼミナールは今年度で終りになりますが、その最後を「公演」という型で参加出来た事がうれしかった。

○秋の公演は十一月二〇日、二十三日予定で芳地隆介作「人間蒸発」を劇団稽古場にて、即ち劇団静芸小劇場として公演します。ぜひ静芸の小劇場公演を観に来て下さい。

○一月末には「旅立ち」(小島真木作)を演劇教室として上演予定。

○来年度春の候補作品として現在「アディオス号の歌」(秋元松代作)があがって居り、現在上演許可の手続きをすすめている所です。

(劇団通信のように、ブロック通信の頁をもうけて、各ブロックの短信なりをのせたらどうでしょう。ブロック活動の実態をありのまま知りたいです)

(静岡市昭府町二八九—二)

人間座

◆人間座第二十五回公演(府文化芸術劇場)は、十二月十日、十一日の両日府立文化芸術会館で「道よ、たかなれ」(原作右邊俊郎

あ野麦峠」が終ったところですが、11月14日堺公演を予定していますし、中間報告ということにさせて頂きます。まず観客数での前進、ステージ、一五四〇人(微増)であった事、やはり私達は全員が一生懸命になって券を売らないとダメだという事が思い知らされた事、労組等には文化論で切り結んで行かないとお客さんには仲々といった事でした。

ほぼ歴史劇をやる様な思いの中で二百数十万円の予算を費しましたが、やはり裏方を自分達で持たない事はこれからもついて回りそうです。又、今までの公演形態がケイコ場、小ホールと続いたことと始めての会場であったことなどが障いして、声が聞えないという批判にはおどろいています。全体としてはアンサンブルがとれ切れず迫力がもう一つ出切らない舞台になった様ですが、次回はいよいよ良いものを、と再びケイコに力を注いでいます。

11月14日(月)堺市民会館ホール
大橋喜一作「あ野麦峠」
12月中旬 第七回劇団総会

(大阪市南区谷町七丁目二一—
新谷町第二ビル一〇三号)

「呼松水路」・脚色草川八重子・演出芦田雄雄」を上演します。

◆「人形師知吉の余生」を九月十八日東舞鶴高校文化祭で上演。また、京都府移動文化芸術劇場として十月二十九日に龜岡市で公演。三月には、丹後半島突端の丹後町で公演すべく準備を進めています。

◆前号で報じました「朗読教室」の学校巡回ですが、二学期は丹後・丹波及び市内の中学校十数校をまわります。(芦田記)

(京都市左京区下鴨東高木町二一)

劇団若者座

①「いこら」の皆さん、大変ご苦勞でした「地域に根ざす」ことの意義や、その重みを痛感いたしました。それから、全体的に年々きびしさを増してきた様に受けとめています。総会に参加してそのきびしさをはね返す為に頑張らねばと決意を新たにしています。

(岡田雄三)

②若い女性が二名相ついで入団し、みんな色めき立っています。十月九日、地元のマンドリン・オーケストラの定期演奏会に、司会、舞臺、音効として一部コーラスに賛助出演する等、提携を深めています。

③学習部が中心となって発声や肉體訓練など

基礎学習にとりこんでいる。演出部は地域の「子ども会」からの要請で二ヶ所指導に参加している。又来春の「十五周年記念公演」を目指して戯曲の選考が進められている。現在「アンネの日記」「奇蹟の人」「河」などがあがっています。

④「演劇会議」誌を十六部に変更して下さい
(天羽)

(宇部市松山町四—10—24 東洋針灸科内 浜田義治気付)

劇団上野市民劇場

夏の名物、東リ演ゼミも終って早や二ヶ月担当劇団の皆さん、ごくろうさまでした。

- ①今年には劇団の新人で初参加者が3名で、東リ演の運動そのものは充分汲み得なかったが同じ仲間との連帯をしっかりと纏えて帰って来た中で秋の公演で大きな力を発揮しています。劇団にとって何よりも成果であります。
- ②物理的に大変困難な県下の劇団(津演)との合同公演「小市民」(ゴリキキ作)に全力を傾注している処です。厳しさと喜びをみしめ乍ら自らの小市民性をえぐりつつ、ゴリキキの古典上演に終らせぬよう、今日との接点を見きわめたいと努力しています。
- ③公演に集中するとうしても疎かになる組

織問題、及合同公演の経括及来年度のスケジュールを決定し、新しいいけい古場での一年の活動を総点検する。//77年度総会を12月に開催し、新たな展望を拓きたいとおもいます。

④各地の仲間皆さんから公演のご案内をいただいたりも遠距離等のため仲々伺えないでいることを誌上を借りてお詫び致します。

(三重県上野市丸ノ内共同ビル3F)

劇団名古屋

①東リ演ゼミの感想「劇団静芸による「旅立ち」はショックな舞台だった。このモデル上演を中心にしての各分科会のあり方についてならばその企画自体は注目すべきであるがそれに伴う副作用に対する処置に甘きがなかったか、また各分科会にこの頃マンネリ化が出て来たのではないか等の問題が出ました。

- ②近況・公演の成果「7月8・10日(5ステージ)に公演した「金冠のイエス」(作・金子河、訳・井出樹樹、演出・久保田明)は800名余の観客に観ていただくことが出来ました。「目をそむけたい問題を真正面に見すえて取組まれ劇団に敬意を表します」等のアンケート評がありました。現在は次回公演、劇団創立20周年記念公演の第2弾としての「日本の青春」―里はまだ夜深し富士の朝日

影―(作・しかたしん、演出・久保田明・12月8・9日2ステージ、東別院青少年会館)の公演に向けて毎日稽古にはげんでいます。この創作劇は天保時代、葦山代官であった江川太郎左衛門が主人公。大きな時代の変革を間もなく控えた時代を今、大きな時代の変革を望む私たちの眼で大きくつてみようと思っています。

③附属演劇研究所第10期生卒業公演。12月24日25日、名演小劇場。
(少)

劇団造形劇場

農業と演劇の創造的統一を目指して創立以来十三年目になりますが、今年から漸く自然と調和した百姓の生き方を求めて先づ山林に輪を育て、果樹園を開き約五十本の果樹を植

え、又荒田一段を開墾し稲刈りも終わりました。水稲は最近では最高の出来栄えとして評判です。味噌・醤油を造る為大豆を五畝植えこれも見事な成育です。家畜も次第に増えています。飼羊二頭、山羊三頭、七面鳥三羽、チャボ二十二羽と賑やかにになりました。動物もそれぞれ個性があつて毎日見ている見飽きず、楽しい日々です。

近い中に純日本産として数少くなっている

対馬の対州馬が手に入りそうです。こちら山地農業ですので使役用に働いて貰う予定ですが、又跑も一審飼えそうです。その後豊後の黒牛と薩摩の黒豚を入れ、来春名古屋コーチンを二十羽ばかり入れる計画です。私共の生き方が、東海教育研究所出版の月刊誌「望星」の十一月に「土と演劇に生きる大分の吉四六さん」として紹介されました。私自身もこれ迄のこと、これからのこと等を「土と舞台と人生」と題してまとめるよう構想中です。真直で造るカヤ篋の造り方も覚え。農閑期にはミノ造りもして見ます。(野呂祐吉)

(大分県大野郡野津町)

劇団さつば

- ①千名の参加、昨年に比較して激減、さつばの現状を反映しているか(？)、しかし参加者は充実感ある会談だったと報告。
- ②相かわらず劇団活動はメンバーの減少に困難を来している。そんな中でも若い男性を迎え、たったひとりの入団が稽古場の雰囲気を変えている。
- ③十月三十日(橋本公演)十一月十三日(小山公演)で第十一回公演、これも劇場にとりこんでいる。「なまけの山」一幕。作家は地

元教師、初めての地元の作家、各学校の先生方に援助を依頼、観客動員数で現在の低帯をどれたけ打破できるか、今後がかかっている公演だ。

(栃木県下都賀郡大平町川連六〇八)

劇団同胞(はらから)

- 皆さんはじめまして。私たちは昨年9月に①創作劇をつくり上げよう。②団員の舞台創造追求は互いに尊重しあうこと、を課題として結成しました。団員5名でスタートした劇団も現在15名です。
- 6月には旭川市民文化会館小ホールにて試演会「ぼんち絵」(作・高橋文雄、演出・沢田和彦)を無事に上演することができました。
- 8月中旬より11月21・22日本公演として「チェルカシ・男たちの船出」(原作・M・ゴリキキ、脚色・加藤雅敏、演出・沢田和彦)のけい古に入っています。この作品は団員が脚色したもので今後の創作づくりの大きな力になることと期待しています。
- 12月には劇団総会を行い、東西リアリズム演劇会議・北海道演劇集団について話し合うことになっていきます。今後共よろしくお願ひします。(高桑修一)

(旭川市末広千条8丁目五〇一三一―12) 演劇集団あり

演劇集団あり

公演続きで連絡が遅れました。

9月19日、米子市公会堂で木村快・作「希望」三幕六場を、月岡達演出で公演しました「あり」結成以来16回公演でしたが観客数は二〇〇名程で前回公演より一〇〇程下りましたが、毎回行なうはがき批評は次第に数を増してきました。次回公演は松山市で行ないます。国鉄関西演劇祭に参加します。作品は宮倉義文作「お茶を飲まない訪問者」一幕商月19日米子市公会堂での米子市民演劇祭鳥取県演劇連盟文化祭に同作品で参加します。

「あり」第16回公演から観客、サークルのなか、共に若者が体あたりで創れる作品をと云う声が多く出されてきました。

(米子市昭和町二三 宮倉義文方)

劇団埼玉

今年には埼玉創立10周年記念の最初の公演として、旗巻げ公演と同じ小山祐士・作「日本の幽霊」を、これまた初演と同じく塚田恒夫の演出で、6月25・26日、埼玉県商工会館(大宮)で行いました。続いて7月9・10日都勤労福祉会館で久々の東京公演を持ちました。この公演は埼玉が今迄ずっと大変お世話

になって来た故八田元夫先生の追悼の意もこめて行ったのですが、東京公演の終った翌日11日に下村先生の計をきき、驚きと共に、一年ばかりの短い間に演劇における二人の大先輩を相ついで失ったことを心から残念に思うばかりです。

公演の結果については、舞台の方は一定の先輩、戦争体験のある人たちからは一定の感動を呼んだようでしたが、若い層にはピンと来にくいものようでした。劇団内でも、若い層にはこの作品のテーマが充分滲透していませんという問題がありました。

動員した観客は約九〇〇名、財政的には前回に続いて赤字をふやしました。さて現在は第28回公演(11月25・26日於浦和市民会館)の稽古の終盤に入っています。今度の演目は次の通りです。

「三時下水管」矢野喬・作、川村武夫・演出、「橋のある風景」芳地隆介・作、洪沢洋俊・演出の二本立てです。

東り演、東陽演の仲間作家の作品二つとなりましたが、「三時下水管」は主として新人教育の場に、「橋のある風景」の方はじっくりとした勉強の場にしていきたいと考えています。

今年にはスケジュールの都合で児童公演を来年に延期しましたが、今迄に埼玉の舞台を觀て下さった学校その他から今年もやってほしいと云う要望がありました。それに応ずることが出来ませんでしたので、来年はぜひ良い舞台をつくって、出来るだけ移動公演を重ねよう、今から企画しています。

第四期研究生については大体九月で座学を終り、今、来春一月をメドに卒業公演が持てるよう準備にとりかかったところです。

なお、このほど「埼玉十年史」の編集にとりかかりました。自立劇団10年の歩みを出るだけ具体的に正確にあとづけられる資料集として企画しています。来春に完成させたいと思っています。以上。

(川口市領家五十一一六九)
福井劇の会

①ゼミへの参加は数年前の創作脚本研究の折江藤寛「エリーゼのために」をもって参加して以来のことで2度目になります。今回は中堅として期待している若き女性2名が、再三の誘いにも気のり薄かったのに突然変異をおこし参加しました。「東り演」のことは全くと云っていいほど知らない2人でしたが、黒沢議長をはじめ、皆さんに暖かく迎えられるこ

とも含めて「エリーゼのために」の研究発表を月初めに予定し、現在けい古を行なっています。職場、家庭がらみになって演劇運動をすすめていく状況がますます深まっています。20周年を土台に活動をゆるぎないものにしたいと考えています。

(福井県坂井郡会津町旭92の11田島方)
劇団新芸

①は参加してないので回答できないのです。②についてご連絡いたします。10周年記念公演として11月18日小樽市民会館で、矢代静一「悲しき恋泥棒」を上演すべく、けい古を重ねましたが、9月26日臨時總會で中止を決定しました。理由は(1)読み合せ終了時になっても本がつかめきれない事。(2)表現のむつかしさを改めて讀んだ事。(3)スタッフ、キャストとも力量がつかっていない事と結果の良くない部分の改善見通しがたない事。(4)十周年記念作品として歴史的に納得できるものになつていなかった事現在の劇団員一人づつがやれると納得していたのではなかった事、などです。

来年春(5月/6月)をめどにもう一度やり直します。作品選びからはじてゆきます。今月10月23日(日)道民芸術祭に岩内公民館

で後志のうみねこ・波・新芸が参加します。「犬を喰つてはならない」再演のためのけい古に入っています。

(小樽市銭函2-47-16鹿角優一方)
だいこん座

大変ごぶさたしました。僕も鶴岡へ来て三年目になりました。「だいこん座」という劇団をつくり、現在九名で中央公民館をケイコ場に借りて、週2回のケイコをつづけています。公演は各部落ごとの公民館で50-100人規模での移動公演をすでに10回以上行なっています。この市には「麦の会」「いでは」という戦後間もなくのNHK放送劇団から発展している二つの劇団があり、毎年秋の市民芸術祭に文化会館で2ステージ1000人ほどの公演を行なっています。

空気もおいしく、景色もよいところですが不景気の波をもろにかぶり、仕事のない人があふれ、失業保険をもらうため安定所に列ができています。

「演劇会蔵」次号より3冊送って下さい。「こばやしひろし作品集2」を1冊送って下さい。

(山形県鶴岡市本町三丁目十九一十一)
編集部・註。高橋寛さんは青年劇場で活躍

と、相当年配の方々が力強く生き生きと運動をすすめておられること、福井劇の会が意外のこと注目され、創作劇を生みだしていること、この意義を再認識させられたことなど、感激の面持ちで報告してくれました。以後の彼女たちの意欲的な姿が、これ以外にも多くの収穫のあったことを物語ってくれていました。数々の御配慮ありがとうございました。

③来年の、会創立20周年を控え、これまでの運動を総括し、現状を明らかにして、今後の運動をどうすすめていくかを主旨に、9月7日限外の日一員にも呼びかけて、泊りこみの第一回準備会を開きました。結論として、圧倒的市民の共感を呼び、これまでの集大成ともなるべき創作劇を生み出すことを中心におくことが確認され、創作委員会が発足し、目下資料集めにかかっています。

来年は福井空襲33年目に当り、記録も刊行され、原水禁運動の統一も促進していくという状況をふまえ、空襲を題材とするテーマを追求しているところです。公演は七月に予定しています。

これと合わせて現在会員の%以上が(二)三年の会員であることから、これまでの成果を継承し、空襲および戦時下の生活を知ることを目指しています。この人、東り演では馴染深い。「だいこん座」のレパートリーは、「消えたバークシャ」(伊藤貞助)「和尚さんと小僧さん」(木下順二)「外郎売り」(ガマの油売り)「雄羊とお嬢さん」(チエホフ)「さっぱ夜話」(竹内男太郎)などが消化されている。

劇団十年実

○すっかりシーズンになりましたが今秋の公演を控えるにやむなく十年実では、来春の公演目標をもってエネルギーをたくわえています。

○若い仲間の相次ぐ退団で心臓を抉られたようになりましたが、いまに「誰かが続けること」を信条に少数の仲間を支えられ、新しい仲間を迎える準備で、再び蘇える活動を報告できる日を信じています。

(大阪市平野区喜連東三丁目六番32-101)
劇団支木

「旅立ち」も含めて事務局を担当されたみなさんの努力で、すがすがしい印象のゼミでした。事務局のみなさんおつかれさま。ゼミ途中、支木劇団員で制作のチーフを担当していた小和田忠(30才)が交通事故で死亡の知らせが入り、飛んで帰りました。無惨としか云いようがありませんでした。みなさんから

暖い心づかいに、ご遺族共々恐縮しております。この誌面をお借りしてお礼申し上げます。

9日、けい古場完成。ご支援ありがとうございます。12坪足らずのけい古場ですが、何物にも代えがたい僕らの城です。秋から冬にかけて、けい古場共演をはじめます。No.1は「橋」を予定。

新しい古場。

030青森市本町二丁目六の十四ふじビル内

TEL 〇一七七(七七) 四六七七

演劇集団おけら

①東リ演ゼミ！今回までいつも一人のみ参加に終り、収獲も集団のものになっていなかった。今回は三人参加とよくらみ、東リ演加盟を、ひとつの目標ができたよう。

②近況！11月27日の茨城県芸術祭を目指して「日本繁栄学入門」の中から五つ選んで、目下新人も交えて特訓中。発声や野口体操など、今までの基礎訓練も効を奏しているようである。

③一般に文化的水準が低いときえ云われる当地において、昨年充足した茨城文化連絡協議会において自覚的に、ある意味では演劇という枠にこだわらない創作活動をめざして、当

面詳細なスケジュールはないが水戸市にある他の劇集との合同公演など、他劇集団との交流の中で、話のほつている。

(水戸市見和二二二五―二中島右浩方) 劇団さつぽろ

前略、毎回の大変なお仕事御苦勞様です。

①総会では、「攻め」へ転ずるという事。文化の北方志向と云う話題が印象に残りました。

②小学校公演「チポリーノの冒険」・小劇場公演の二班は十一月中旬まで公演が続きま

③年度末に総会を持ち、第四回定期公演を二月又は三月に予定しています。それと劇団付属研究所をなんとしても来年度開所したいというのが念願です。

(札幌市西区手稲宮の沢四八五番四一) 演劇集団土の会

大変おそくなりました。東リ演係田久の再度の入院をはじめ、劇団員の事故相つぎ、活動にかなりの不都合を生じてしまいました。

ゼミには四名参加、総会のテープ録音とあわせて情況をつかみ、自分たちなりの理解をいたしました。青年劇場の報など参考となるものが多々あります。

土の会の秋の活動は糟古場での小劇場の活動が中心となります。その日程記せば

勝山俊介作・よしたはじめ演出

「嵐」 11月26日(土) 7時半

11月27日(日) 2時

1月21日(土) 7時半

真山青果作・矢野喬演出

「玄朴と長英」 12月11日(日) 2時

1月28日(土) 7時半

会場は劇団の糟古場である板橋大山の陽光保育園です。

11月1日か12月にかけて、第15回東京働くものの演劇祭(東勤演)が行なわれますが、この活動をもって参加ということになります。また丁度「銅鑼」が「冬の鬼火―高野長英考」を上演、いろいろな意味で観戦を受けています。(よした)

(東京都練馬区大泉学園町四七四一八) 劇団すがを

担当者が変わり失念しておりました。申訳ありません。間に合ったら掲載して下さい。

①夏のゼミナール。時間がたつて印象がうすれてしまいましたが、モデル上演、交流会、分科会と初めての参加でしたが、みんなはじめて会う人なのに話やすく、自分をさらけ

だすことができた様でした。みんな素晴らしい仲間だ、感謝。(渡地)

②第18回公演(みにみに劇場)

道井直次・作、加藤武夫・演出

「はだかの王様」 約八〇〇名

糟古場の補落し公演とその他移動で5ステージ初舞台のメンバーが多く必死の公演で芝居づくりのみに忙殺(というより手一杯)制作その他補落しらしいことは何もできませんでしたが、子供会や子供劇場のバックアップなどの公演も満員札止めの盛況さでした。芝居の方は問題点も多くありますが、5ステージ目あたりでやっと雰囲気をつかんできたようでした。

③次回公演(来春一般公演)

ギリエルメ・フィゲレイド作

「狐とぶどう」 3幕

久々の一般公演の台本を決定した所です。

(桑名市森忠上野一〇五八)

京浜協同劇団

○「金冠のイエス・ソウル三文オペラー」(金芝河作、小田健也脚本・演出)の再演は、横浜、東京、川崎の三会場で九月十月に行ないました。テレビ、新聞、雑誌など二十を超えるマスコミでもとりあげられ話題とな

り、二五〇〇名の観客に好評をいただきました。東リ演のみなさん、ご協力ありがとうございます。

○これに先だち、裁判劇「国民法廷金大中事件」(九月、東京)に出演、弁護士や評論家の方々も協力しての初めての仕事でしたが、私たちが自身にとっても貴重な体験となりました。会場は予想を上回って一〇〇〇人の超満員となり、五時間余に及ぶ法廷が「短く感じられた」ほどでした。小田健也、藤島宇内、上田誠吉氏らの手による台本は近く本と映画になる予定で、大阪でも上演される予定です。

○東リ演関東ブロックの事務局長に再選されましたので、精一杯がんばります。宜しく。

(川崎市幸区古市場二一〇九)

湘南アートシアター

①モデル上演が単なる批評にならない様配慮があり、実際その様に進行されたのは良かったです。しかし内容は、準備不足の分科会(舞美で装飾や効果に分かれた分科会など)があり充分とは言えなかった。「私と舞台」も昨年と比べるともう一步、さえない気がする。

②7月22・23・24日(6ステージ)、第一回夏休み親子劇場「牛鬼退治」(作・かたおか

しろう、演出・貞包蔵)の観客数は一五二九名でした。

③11月11・12日、藤沢市民会館において、第十五回公演「イカルの冒険」(作・アンソアレグリア、訳・ガリ。真砂子、台本・早川昭二、演出・石橋宏、演出協力・大内三郎)来年四月第十六回公演及七月に第二回夏休み劇場。

◆第十五回公演は「夕鶴」の予定であったが役者の病気で断念した。今新たな気持で「イカルス」に取り組んでいます。

(藤沢市辻堂新町一四一―二五貞包方)



「酒田演研」からのあいさつ

— 東リ演加盟にあたって —

榎 田 幸 男

実のところ、まだ殆んどが見知らぬ方々へのご挨拶を、どんなふうにし述べたいやら、いさか途惑い困惑しています。紋切型に、こんど東リ演の仲間に加えていただくことになった酒田演劇研究会です——と、私どもの来歴やら構成などを並べあげれば、それでもいいのじやないかとも思うのですが、どうもそれではおもしろくもない、第一そんなものを並べてみたところで、胸を張って自慢できるようなものが何かあるのか、ということになると全く自信がないのです。

私ごとになりますが、私は自分でもちっとも気がつかない間に健康を害し、この夏の盛りから病院ぐらしを余儀なくされています。病床に親んで三カ月、まだしばらくはこの生活を続けなくてはならないのですが、このために、私は秋の公演「商船テナシティ」の

婚外にいたくはならなくなりました。二十年あまり、何らかのかたちで演研の公演をはじめ、さまざまの行動に参与してきた私にとって、これは全くはじめての経験です。

そのことが、実は、私の人生のこれまでの半ばを占めようという年月、知らず知らず演研という奴が、私の生活のはずみになり、リズムを作ってきたことを悟らせてくれるのです。

いま私たちの演研は新しい会員がでず、ただが十数名の片肺飛行で氣息奄々あえいでいます。それでもなお、そんな演研に対しての愛着が、いま行動できぬもどかしさと一緒に、絶ちがたいのです。

結成当初からのメンバーは二人きりになっしまいました。入ってきて、出ていった人たちの数は、よく数えてみたこともありませ

の都度見送ってきたのですから。
ですから、私たちは正直のところ全国の仲間たちの援助を求めているわけです。叱咤激励がほしいのです。こうしちゃおれんぞと奮いたつほどのハッパをどうぞかけてやってください。

もちろん、稽古場もたず、劣悪な労働条件の多いバラバラの職場から集ってくるのですから、一人一人にはそれなりの苦勞や努力は、皆さんと共通に味合っているのです。そこを乗り越えて、二十一年間、集りを絶やさなかつた、そのことを自負するだけでは、もはや日を追って反動化していく環境のなかでの演劇活動はありえません。

もつと地域のなかに、でんと根をはって、地域の人たちとの協同作業のなから舞台が生みだせるような劇団にならなければ意味はないと思うのですが、それにつけても結成以来の二十年、頭の片すみだけでそんなことを思いつづけながら無為に過ごしてしまつた歳月がくやまれるのです。

問題はいろいろあります。一作年「河」をやらしてもらつたときに痛切に感じたことですが、ヒロシマが現在の問題としか考えられ

ない仲間と、それが歴史的な事実としてとらえる仲間とがあつて、実は後者の方がはるかに多いのです。何しろ、いま活動に携わっている人たちの大部分は、ヒロシマの日から何年もたつて生まれた人たちなんだあつてことをつくづく感じたわけですよ。

だから、その人たちにとっては安保だつて生れたときからあつたわけです。中国でも朝鮮もいまの体制のまんまなのです。

そして、いま私たちの演劇活動を實際のところ支えているのは、この年代の仲間たちにはかならないわけです。このあたりどころを、少くとも私は本当に理解しているんだろうか、自問自答してみることがあります。

東リ演の一員として、その端っこに連なることになった酒田演研には、考えるほどに課題が多いようです。学習はおろか基礎的訓練にしろ、何一つ確実に遂行されてはいないのです。

それでも、私たちはなおふんばっていています。少しでも前へ進みたいと歯を喰いしばっています。そんなときに、あの町にも、この町にも、同じように歯がみしている仲間たちが、たくさんいるんだということを実感する

んが、百人はとうの昔に超えました。まるでガラリ入替つた中味でも、やはり酒田演研は酒田演研にほかならないのです。いい加減にすばらでノンキで、いつまでたつても下手くそなまままで、妙に家族的であつたり、なんともなま温いのがやり切れないのです。

劇団だとか、サークルだとかいういかめしさとは無縁の同人みたいなところがありすぎるのです。

運営を年に一回ひらく総会で投票してきめた書記局が受持つことにしていますが、この書記長が再選はあつても、三選はなかなかできないのです。総会の都度、書記局のズボラさが指弾され、交迭ということになるわけです。そのくせ、仲間のみんなが同じような体質をもっているものとみえ、またぞろ一年間同じような経過を繰り返すのです。

東リ演の仲間に加わる決意をした裏側にはこんな微温的な住み心地から、自分自身を脱け出させるきっかけにしたいという、身勝手な願望が混つていることを否定するわけにはいきません。これまでは、私たちが加盟することによって、少しでも東リ演の力をますことができるという自信がもてる体制ができたまではと、何度かあつた加盟の機会を、そ

ことほど心強いはげましになるものはありません。

酒田演研、東リ演の数々の劇団のなかでも創設からの年月では決して新しい方には入らないのかも知れません。しかし本当の意味での演劇活動は、実はこれからはじまろうとしている新生の赤児みたいなものです。まとも一人歩きできる日が、一日も早くやってくるか、せいぜいのご指導をお願いしなければなりません。

病室の窓の外は秋晴れの青空がひろがり、秋あかねが飛び交っています。百メートルほど歩くと昨年の大火で焼かれた広々とした雑居にです。ようやく一部分には家の新築がはじまっています。この焼跡に再び町並がでるとき、以前のそれとはまったく別の顔ができるんだろうかと思えます。

（劇団住所 酒田市東泉町一丁目四の五）

◇編集部より。新しく西リ演加盟の劇団の裏にも原稿を依頼しましたが来ませんでした。

面白さへの移行について

— 関西芸術座「初代桂春団治」 —

木津川 計

関西芸術座の創造範囲がどんどん広がっていきます。シリアス劇から民話劇、児童劇から喜劇に至る幅の広さと、こなし得る力量はやはり二十年の蓄積をもつ関芸の大ききであり、水準の高きであります。

熱演でした。やはり関芸の、誇るべき私たちの劇団の新しい高峰への登攀を目の当りにしてほくもうれしかったのです。

敬服する道井さんの、たえずひたむきに地平を切り拓く姿勢を讃えます。すべての俳優陣に暑い夏の稽古場で流した汗のご苦労と一杯の舞台を見せてくださったことに、ほくは惜しみない拍手をおくるのです。

わけても、すばらしい演技、じつと耐え、別れても尽す女の切なさをにじませた新家英子さんの好演をゴシツクで強調したいのです。新家さんにはほくは惚れました。人柄でもあります。ほくは生まれる前年だけに、知る由も

さん役の山村弘三さんがいいですね。関芸の逸材です。おとき役の和泉敬子さんは、うぶな娘からけなげに生きる女を演じて光りました。藤山喜子さん、松井加容子さん、道井恵美子さんらのベテラン陣はかいまの演技ながら、さすがにうまいものです。ちよっと上ずったきらいはありましたが北見唯一さんの池田屋は、やはりこの人をもってしか出せない役柄、いつもながらの感嘆です。林田の芝本正さん、執達吏の亀井賢二さんらも寸景ながらほくの好きな演技、よく感じがでていました。なんといつても演技力の総合水準で関芸は在阪劇団のはるかな頂点にあつて揺るがないという印象をこんども受けました。

春団治が胃ガンで死んだのは昭和九年ですから、春団治の時代はもはや通り過ぎて遙かです。ほくの生まれる前年だけに、知る由もぬ羽目におちいったのが残念です。

大きな課題でありながら、いまだに向学心に燃えた「猿真似」をもちつづけて右往左往しているのが、僕たち新劇の実状ではないだろうか。「古くから庶民大衆に支えられてきた大衆演劇に体当りでぶつかなければ、観念倒れになると気づいた。とりあえず、大阪の土地に生れ、根づき、育った松竹新喜劇の脚本をということになって、それではと、すんなり「桂春団治」に決った次第である」(傍点筆者)

道井さんの文章は実によく言葉が選ばれ加えてまことに適切な造語メーカーとして湧えていました。教えをうけることしばしばなのは、問題の所在を鮮やかに刷出して呈示してくださる。そのすばらしきでした。ですが、

多くの文章をお書きになるなかには、締切りにあわて、推敲もできないまま、心ならずも差し出す原稿もあります。右に紹介した文章もひっくり返る多忙さの中で、走り書きされたものに違いないとほくには思えます。ですが活字になってしまつと、執筆時の状態は論外とされる、そんな目にはほくも会って往生したことが何度かありました。それだけに、ほくも心苦しいいくらかの感想を述べねばなら

ありませんが、名前に備わったイメージとはいたしたものですね。

桂米朝さんの師匠は桂米団治という春団治より後の方ですが、楽屋で「中央公論」を読んでいたそうですからびっくりです。当然、アカの烙印を押されたのがお気の毒でした。米団治の世界は、ですから生真面目で、目立たず、面白さより謹厳さが勝っているイメージです。一方、パレオの名手でした春団治は謹厳を知らず、崩れ、赤い俵を走らせては観客をまき散らしました。その華やかで陽気な世界は米団治を秋にたとえて、文字通り浮かれ騒ぎの、春のさんざめきを思わせるのです。

さて、関芸の「桂春団治」です。公演パンフレットで道井さんは演出の意図をこう書いておられます。

「新劇の歴史は鎖国の遅れをとりもどすため、伝統芸能や庶民大衆とたちきつて、明治の知識層が当時の西欧の現代劇を基盤としてつくりあげたことを見出だす。封建思想をすて、進歩自由を獲得するためには、やむを得ないこととはいえ、『猿真似』からの出発はやはり、不幸だというほかはない。その後、伝統芸能との結びつき、庶民大衆への接近は

脚本を書いた渋谷天外さんは、言っています。「大正人間の典型みたいなのを書こうと思ひまして」と。それは明治の気骨でなく昭和の憂愁でない、大正デモクラシー下の気楽な人間という意味に解すれば、道井さんの説の中では「無目的」に生きた一芸人と素直に見たほうが、どれだけ実像としての春団治に近いことでしょうか。

猿真似からの出発はたしかに不幸ではあります。何の猿真似かを問わまいとして、関芸の「桂春団治」は松竹新喜劇のあとをなぞっているのはどういふことでしょうか。

もつとも違ひがないのではありません。劇の進行につれ、スライドでうつる政治や労働運動や戦争の危機といった動きが演出上の新味をもたらせていたのです。ですが、破天荒に、勝手気儘に生きた春団治の世界と何の脈絡も持たないまま、まるで取つてつけたような効果をしかみなかったことを残念に思うのです。

芝居は面白くあつてほしい、と願うほくの見方からして、春団治の時代が通り過ぎて遙かなように「桂春団治」もいささか遠かったようです。それというのも、溝田繁さんの春

団治の、重々苦しく、割腹に振舞っても払拭しきれぬ重たい演技が終始気になって仕方がなかったのです。本来、春団治役は喜劇役者の人であります。加藤剛や仲代達也がエノケンやロッパを演じて確実な失敗が約束されるにくらべたら溝田さんは立派でした。従来の殻を破らんとする体当りの演技が伝わってきたのですから。しかし、演ずれば演ずるほど、いわば桂米朝の春団治が現われ、「爆発的な笑いのプレゼント」をもたらせた筈の春団治は消えていくのでした。

キャストイングの難しさは逆もまたしかりでして、映画「桂春団治」で酔わせた森繁久彌が「憂愁平野」に出演、霧にけむる白樺の林にアラン・ドロンのように現われると、美貌の女性が睫毛を濡らして待ちわびている、という正味の二枚目を演じてアホらしき意味あわせてくれたことがありました。「三等重役」のイメージが強烈だったからの滑稽さです。溝田さんには気の毒ですが、これにこりてはなりません。演技の幅を広げる得難い経験を積まれたのですから。

「桂春団治」には、いかにも原作長谷川幸延好みの見せ場、がありました。春子という

子を生んだ女房のおとぎを棄てる際、春団治は赤い俵に腰をおろしたまま言うのです「短い命やったら、上手に使わな損や。……家も女房も子どももいらん。芸人が芸の道に勤むのは誰の力もいらん。芸の道は一人ぼっちゃや」のくだりです。もし当の春団治が聞いたら作家や劇作家の筆先で祭り上げられ、高められる手法にただただ驚嘆し、「わてのことでっか？」と恥じたものの、セリフに合わせ、あわてて一人ぼっちの芸の阿修羅に自らを偽装せねばならぬ体のものであったろう。とほくには思えて仕方ありません。

晩年、春団治は、と道井氏はパンフレットで言われます。「自分の行動に非人間性を発見したとき、彼は死へ急転してゆく。つまりわが子に対する無責任さの自覚である。そんなドラマツルギーはアリストテレスの『詩学』に通じる」とまでの手離しの評価に値するほど「桂春団治」がすぐれているかどうか、疑問なのです。新劇の生み出した多くの秀作ドラマツルギーをもってしても、まるで『詩学』に及ぶことはなほほしい、というふうにもそれは聞こえます。なにより、西欧現代劇の狼真似に対する反発が、現代劇としては義理人情を主軸にした、封建性色濃い

処世調的松竹新喜劇への回帰になっては無念だとほくは考えるものです。

確かに『詩学』は演劇理論の原点です。ですが、アリストテレスは、女性を独自の性的所産、つまり「生ま煮えの精子」たる月経の血を分泌するが故に、女性は男性より熱が低く、男性にくらべて劣っている、とした男性優位主義者でもあったのです。

「桂春団治」ドラマツルギーの『詩学』的カタルシス論は、女性たちの零落と没我的愛を当然として構わなかった春団治を『詩学』の故に救い、アリストテレスの欠落に似て、

芸の道々なる美名のもとで春団治の奔放をアリストテレス的に許容しているのです。ほくはこう思うのです。「ひとたび自分の行動に非人間性を発見したとき、彼は死へ急転してゆく」のではなく、逆の構図、つまり胃ガンにおかされ、死へ急転してゆきながら、自らの非人間性にめざめた、と解するほうが死に臨んで、やはり弱くなった人間春団治への素直な見方でありましょう。

泣く泣く泣く。お前の幸福は、お父さん遠いところから祈ってるでエ」と叫ぶ亡者姿の春団治の、娘春子に対する思いやり、棄てた女たちへの自責と「非人間性の発見」が、

実は『詩学』に通じないほど稀薄なドラマツルギーと思うほどに「桂春団治」の終幕は無感動であり、白い俵の単なる見せ物になっていく、とほくには思えるのです。

なるほど、二幕第三場「おとぎの家」での春団治に「非人間性の発見」あるいは発見後の姿をかき見せることはできません。しかし、これほど不真面目な復縁のもちかけは松竹新喜劇に許されても、新劇のそれであっては困るのです。薄っぺらな人情の場面の喜劇に新劇が迎合してはならず、同時に、過去にきた「伝統芸能や庶民大衆」との復縁を迫るあまり、新劇がなりふり構わずくどいては、おとぎが拒否したように、新喜劇一筋の操をつらぬいてきた松竹新喜劇も新劇の無節操をなじります。関雲の公演に際し、天外さんが次のように言った意味は、まされもなくこれまでの新劇の身勝手な内心なじったうえ復縁を申しこんできたことに対する発言だったと読みとるのは読みすぎというべきでしょうか。即ち天外さんの言です。「わたしの脚本を、新劇さんがやってくればはるのも、もうそろそろそんな時代になってきましたのやなあ」とそれは、一人よがりな難解劇、底の浅い政治

演劇、やたら裸の得体の知れぬアングラ劇で観客を疲れさせ、難反させていった現代新劇に対する渋谷天外さんのひそかな勝利宣言にほかならなかつたのです。

面白さへの重心移行をほくは歓迎します。歓迎しますが、面白ければと、「とりあえず」「すんなり」「松竹新喜劇の脚本をということになって」しまふ安易さをほくは恐れます。なぜなら、それは、新劇主権の放棄であり、再創造すべき要素を多く持つ「伝統芸能への無批判な加担であり、よくいって政治的アパシーの吹き込み、悪くいけば今夏新橋演舞場で、保革逆転ならなかった参院選の結果を舞台の上で何度も口にし、よろこんだ藤山寛美の保守性を免罪することにもつながるのだとほくは考えるのです。

先に「右往左往」の表現にはくは異議を唱えたのでした。仮にその言葉が有効であるとしたら、西欧の狼真似への反省が松竹新喜劇へと折れる、それしも「右往左往」と言うべく、また、今日の苦悶する新劇の危機を示して際立つのだと申しましようか。もしか、と考えるのです。ひょっとするとドンデン返し



〔「上方芸能」編集長〕

的に道井さんは、右往左往の新劇、その実情を知ってもらいたいあまり、ほくがここまで書いたことをも予測されて、あえて「桂春団治」をとり上げられたのかもしれない。だとすると、してやられたり、道井さんにはただただ脱帽するしかありません。

劇団四紀会公演

「星の牧場」を観て

小松 徹

ありつたけの力を、今年は公演活動につつまいでいこう——と四紀会は考えたとようである。規模の大小はあろうけど、十一月に予定されている実験劇場を加えると、今年一年で6公演——つまり二ヶ月に一回平均の公演をやりとげようというのだから、そこへ贈ける「思い」のすさまじさもわからうというもんだ。

創立二〇周年を、そのようにして迎え、未来へ橋をわたしていこうと、彼らは考えたのである。

「星の牧場」は、その6公演のレパートリーのなかでも、もっとも大きな規模をもった作品であり、作品スタイルの面でも写実を基調とした作品を主としてきたこの劇団としては、さらに創造の巾をひろげる可能性をもった公演と、云えるだろう劇団の絶力をあげての公演であった——と演出の新木祥之君は云

を重ねながら、オーケストラのなかに未来への夢をひらいていく——というものだ。
美しいメルヘンである。

以上のなかで明らかなように、しかしこの美しくメルヘンを支えているのは、ひとつには人間の生活を破壊しつつした戦争の深い傷跡を忘れまいという決意と、ふたつめには、それを本当に癒やすものは、働きつつ創りあげる文化によって充たされる生活の実現であるという確信——であるように私には思われる。

まず戦争の傷跡——その痛みが、セリフとしては語られても、もどかしいくらいに伝ってこない。演じる人に戦争体験がないからだというような云い方は、この際失礼であろう。日常の生活の斗いがそれをつかみとっていく途をきりひろくことぐらい、四紀会の俳優諸君なら骨身にしみて知っている苦だから。

ジブシーたちは爽に楽しげである。がその楽しげな姿の奥に、手に汗して働いている人間がまるで見えてこない。憂な云いかたが見えてこないほどに楽しげだ。

つた。
期待も大きくふくらむのが当然だ。

一幕——幕間が待ちどおしいほどに退屈でチラチラと腕の時計をみながら、この八しんどきVはどこから来るのだろう、まじめにとりくんでいるにはらがないのに——と考え

ていた。
二幕になって、この劇団の二〇年の殆どを支えてきた労働者俳優を中心に配役された、ジブシーたちと、彼らの妻であるオーケストラによって、舞台は安定した空間をつくりはじめた。

さすがだな、と思った。
二〇年の新緑が、応援の激演連の俳優をも含めて、これだけの舞台空間をつくり出したのだな、日本の業余劇団もいくつか、こうした力をもつようになったのだなと、ある感慨

こういう書きかたをすると、この作品世界を成立させている、一番底の部分があるで欠落していることになり、まるでミもフタもないことになる訳で、四紀会の諸君にはカンカンに怒られそうだが、卒直にこうとしか云いようがないので御勘弁いただきたい。

公演パンフをみても、上演後演出の新木君と話合った時にも、四紀会が、この二つの基本的な課題を大切に考えていたことは間違いない。

にもかかわらずである。
それが——そう、まるででてこなかったというのはどういうことなのだろう。

言葉をかえると、労働者俳優である四紀会の人たちが、どうして「手に汗して働く人間」の魅力を表現し得ないのか——安定した舞台空間をつくりながらだ——ということでもある。写実の舞台でない困難さを云う人もあろうが、それも四紀会に対してむしろ失礼というものだろう。

私は、職業専門劇団の芝居に、近年とみに見えはじめたイヤらしさとの類似性をみる。
それは一言で云えば、創りだす舞台に、創りだす人間の生きざまが反映されなくなってきた——稀薄になってきている——イヤ

にふけていた。

だが待てよ。感慨にふけるゆとり(？)を現に展開されている舞台に対しては私に与えてくれるというのは、一体どういうことなんだ。

それは喜べることなのか。

順序があと、ききしたが、この作品内容のあらかたを紹介しておこう。

モミイチは牧場に働く青年であった。第二次大戦で召集され、愛馬ツキスミとともに転戦——が船は魚雷攻撃によって沈没した。奇跡的に命はとりとめたものの、失ったツキスミへの思い以外は記憶を失ってモミイチは、戦後牧場へ帰ってきた。あたたかく迎えてくれる周りの人々も、幻聴となっておそうツキスミのひずめの音を追うモミイチに対してはいぶかしげなまなざしをおくるだけ。孤独のなかにとじこもる彼の意識のなかで、ジブシーの世界が展開する。

それぞれに、手に汗をして働きながら、得意とする楽器を持ちよっては、時にオーケストラを奏でるジブシーの世界。彼らのなかにモミイチは、戦争中出逢った上官や戦友の像

らしきことだ。むしろ、おのれの生活と切れたところで、安定した演技をつくりだすのが職業俳優だとまじめに思っている、自称俳優が増えている事実があるのだ。

働らきつつオーケストラをつくりだしている人間像には、働らきながら芝居を創るおのれが重ってくる苦ではないのか。胸がワクワクするほど、彼らを創造へとかりたてるものがあって当然なのではないか。「星の牧場」のジブシー像は、働きながら芝居を創りだそうとしている集団によってこそ、高次の形象がなされて当然ではないのか。

だとすると——そこには怖ろしいほど本質的な問題がひそんでいるように思われる。

ハッとおのれをふりかえる瞬間は、安定した舞台空間からは絶体には得られない——のではないか。

力は大切に使ってほしい。

一 応さかんだが……

— 中部ブロック77年度前半の上演から —

丸子礼二

(名古屋演劇集団)

名古屋演劇集団 名古屋青少年のための

芸術劇場 3/11・12 於名古屋市民会館中

ホール ギブスン作丸子礼二演出「奇蹟の人」

附属研究所14期卒業公演 広渡常敏作・

若尾正也演出「明日を紡ぐ娘たち」

劇団はぐるま 3/27 於岐阜市民会館

こばやしひろし作・演出「ひしめきあう不

毛の季節から」

夏休み親と子の劇場 7/22/24 於岐阜市

民会館 8/28 於大垣市民会館 ファーブル

原作 松岡直太郎 脚色・演出「昆虫記」

劇団つむぎ座 4/15・16 於名古屋小劇場

モリエール作・栗木登喜雄演出「守銭奴」

岡崎演劇集団 6/12 於岡崎勤労会館

夏目つとむ作・浅井克彦演出「いまだ僕らの

旗手は」

劇団名古屋 創立20周年記念公演 7/8

於名古屋小劇場 金芝河作・久保田明演出

「金冠のイエス」

劇団名芸 名古屋市民会館自主企画 7/

16・17 於名古屋市民会館中ホール シェー

クスピア作・池田博演出「ロミオとジュリエ

ット」

劇団すがお みにみにげきじょう 7/30

31、8/22・27・28 於桑名演劇センター

(すがおが最近完成した新しい古場である)

道井直次作・加藤武夫演出「はだかの王様」

他

上野市民劇場は自主公演がなく秋は三重県

の劇団津演と合同でゴリキ作「小市民」を

公演する。これらの他小公演、こどものため

の企画(例えば名芸の「はだかの王様」四日

市の「陽気なハンス」)更に、はぐるま、演

集、名古屋等の学校移動公演は記録できな

った。従って前記は各劇団の活動の一部にす

ぎないのだから。

名芸の「ロミオ」が二千数百、演集の

「奇蹟」が三千数百、はぐるまの「昆虫

記」にいたっては一万数千。この普及の成果

は素晴らしい。その大半は高校・中学生ある

いは小学生以下のことも違ではあったが、超

議員の客席が舞台の創造を盛り上げてくれる

り上げつづけて来た劇団名古屋が、その積み

上げの上に立って、独特のストレートな芝居

づくりが、生きて迫って来た。はぐるまの

「ひしめき」は前回名古屋演劇の例会で見

た時より格段にまとまりのある舞台で、特に

昌夫の三島幸司はきめの細かい、気持のこも

った好演であった。「明日を紡ぐ娘」は研究

生の発表だったが、私はこの古い作品に心を

うたれモロに泣かされてしまった。若々しく

自然な舞台で、娘たちの明日への想いがひし

ひしと迫って来た。(私は元来抒情的人間な

ので。邪魔やマイナスの少ない舞台を見せられ

ると、スゲ乗ってしまうのである)

創作は先の「昆虫記」と四日市の森賢郎作

「戦中派」岡崎の夏目つとむ作「いまだ僕等

の旗手は」の三作、名古屋市内の劇団から

は出ていない……

「どうだい、丸子さん、芝居になつた

かやう?」「おう、なつるとも、ま、がんば

つて」「戦中派」の終演後舞台裏でかわした

このやりとりで、私の云いたいことはつきて

いるかも知れない。私も戦中派の一人なので

森がこの題名にこめた思いも、それが出し切

れないもどかしさもわかる気がする。地味な

作品を生活感でふくらませる力量も現在の四

(一)
76年度後半の小劇場中心の傾向から一転し
て、77年度前半の中部ブロック各劇団の上演
は、スケールの大きいものが目立ち、活況を
呈していると言ってもよいだろう。しかし、
創造委員という変な肩書きを相愛らず荷
厄介にしながら、コッコツと見て、いや見せ
ていただいで廻っていた私としては、それな
りに種々な問題も感じているので、以下記録
にあわせて個人的感想を述べさせてもらおう
と思う。

- 2月から8月までの上演を列記して見ると
- 四日市民劇場 創立十五周年記念公演、
- 2/26・27 於四日市民ホール
- 森賢郎作・演出「戦中派」
- 中部ブロックゼミモデル上演 5/4 於尾
- 高原キャンプ場 宮本研作・森賢郎演出
- 「人を食った話」

感じは何ともいえないものがある。一番先に
自分の劇団を例にあげて恐縮だが演集の「奇
蹟」でもこれ迄の十数回の上演になかった
高揚した舞台となった「何でこの劇場、千人
ちよつとしか入れんの」と立ち並ぶお客に
申しわけなくて、私もあまり経験のない悲鳴
をあげさせてもらった。

はぐるまの親と子の劇場の歌は私も覚えて
しまったが、「エイエイオウ」と超満員の
客席が合唱する時はとても楽しい。「昆虫記」
は装置も大がかりである。舞台中央の上端か
ら下手迄、草の形を横した巨大なスベリ台に
なっていて昆虫達がサーツと下りて来る等と
いうのは、普及の実績が可能にしていること
だろう。

しかしまた、一方でこういう大きい公演を
見ていると、すがおの「みにみに」のような
小人数のアトホームな楽しさもまた目
立って来る芝居とは面白いものである。

「昆虫記」は多様な虫の生活を脚色・演出
の松岡直太郎がよくまとめた。アリ、ハ
チ、チョウ、クモシ、カマキリ、クモとバ
ラエターに富み、歌と踊りも入り、それぞれ
に楽しくはぐるまの演技陣の厚みを感じた。
カマキリ、クモといった敵役がとくにすこ味

があった。

……どうしても話が理に落ちると、主役が
コウロギであるためか「泣き」の芝居が中心
になるのが気になった。

すがおの「はだかの王様」も子供達は断
んで見ているのだが、私は、演技が生硬に感じ
られて、どうも心配になってしまった。こど
も劇場では、どうしても観客を意識しすぎて
形式的演技に終り勝ちである。すがおの場合
も、このまま、みにみにを続けていては創造
的に発展出来なくなるのではないかと思う。

演技のことだけでなく、我々の周囲に多数
集って来る「次の世代」に何を、どう渡して
行くかという問題に、我々は東リ演としても
もっと正面から取り組まないと「地域に根ざ
す」(こどもに根ざす)かな? ことになら
ないのじゃないかとこの頃つくづく思うので
ある。

(三)

話をもとへ戻して、私にとって印象の深か
った舞台をあげて行くと、名古屋の「金冠の
イエス」はぐるまの「ひしめきあう不毛の季
節から」演集研究所発表の「明日を紡ぐ娘た
ち」というところだった。

「金冠のイエス」では一言して朝鮮問題をと

日市にはない。しかし苦勞にむくいる程度のまとまりある舞台であり、十五年歩みつづけるところまで来たという事こそ、大きく評価すべきだと思う。

過疎地帯に生きる青年を追究した夏目つとむの第二作「いまだ僕等の旗手は」は、その努力とねばりは今後も期待するのだが、今回は花祭りの里の生活感がなかった。ストーリーだけを追った感じで、意外と演技も地についでいないのである。地域の特異性を舞台上に具体化することが、かえって問題を普遍的なものにすると思うのだが、構成的演出の岡演の舞台からは「農村一般の」ようなものしか感じられなかった。

つむぎ座の「守銭奴」はまだ古典に挑むには力不足を感じたにとどまった。名芸の「ロミオ」は見るのが出来なかつたので8月總會における拓殖氏の感想を紹介しておく。「いや、だいぶきびしい批評は受けたんですが、ロミオとジュリエットの所へファンレターが沢山来ましてね。しかしうちのようなやり方も行きつく所へ来ている感じですよな」(名芸はこの所、観客と共に楽しむ芝居という方向で「文七元結」「十二夜」とつづけて来た)

劇評

観劇雑感

青森県五所川原の劇団レオの「響になれ」(後藤志げお作)は台本を買って読んでいたが、もしそうでなかつたら二年前の、劇団支木の「土のうた」と同じ日に会うところであつた。津軽弁は、それが日常会話風に語られれば、語られる程、まるで解らない。客席にドット起きる笑声にも、ああ、今のは可笑かつたんだな、といったたぐいである。しかしこんどは、解り易い話を解り易く動いてくれて、はくも時々釣られて笑つたりした。

出稼ぎなしではやっていけない山田清造一家があつて、息子の清一は農業高校の三年生で成績も良く公立の大学の望みもあり、母親は必死である。夫婦が一年のうちの何ヶ月も別れ別れで暮らすような出稼ぎ農民の生活だけは息子に継がせたくない。

山田清一と同じ学校の下級に朱実という少女がいるが彼女の家で、父親が蒸発し、母親

四

現場を見て廻っていると「盆成の枝ぶり」でも見るような結果論の批評を云う気がしなくなり、「いやどうも御苦勞様です」と云いたくなくてしまふ。とにかく悪い条件の中で一応幕を開ける迄が大変なのである。創造以前のネットワークが沢山ある我々の生活なのだ。と弁解した上で、77年前半期の中部ブロックの上演は全体として「さかん」であつた」と云えるかも知れない。「さかん」と云うことばは、これも8月の總會議案における黒沢参吉議長の記事からの無断借用である。

本当の「さかん」はまだまだこんなもんじやないんだろが……。



萩坂桃彦

が夜の商売に出ていたりして、売春検査の酒にひっかかる。少女は絶望する。少年と少女の関係は衝動的に急速に深まり、その恋愛の現場を、朱実の家に家庭訪問に来た岸本先生(主任)に押さえられる。

退学処分を主張する岸本先生と大学進学の学校の名譽のためにも、また清一と朱実の關係は不純ではないと考える津田先生との対立、それに今村教頭をまじえての三人の場面は、この戯曲の重要な部分である。(そこにひびきつけられた)

清一は自ら進学を断念、百姓に生きることを決意する。山田家の祖母(後藤エミコ)怒容迫らざる演技。あとで作者後藤氏夫人と判つた)の幹なほからいで清一と朱実の若い夫婦が成立。目出度い席の、そこへ、出稼ぎ先の父親清造の事故死の電報である。母親(つまり清造の妻)の涙に革命的自覚が起きる。一家は立ち上がる。「死んだ親父がいつも歌

第15回東京働くものの演劇祭

勤勞福祉会館(八丁堀)

11月2日 全通演劇集団

「俺たちの夜」作・村松孝明、演出・榎本昭太郎

11月8・19日 演劇サークル土くれ

「夜の告白」作・アルプーゾフ、演出・福田悦雄

11月12・13・15日 江東演劇集団合同

「木場の鉄太郎」作・境野修次、演出・高田彰

11月17・18日 演劇サークル豊の会

「創世記」作・勝山俊介、演出・吉岡利根雄

11月23・24日 全通・全電通合同

「黄金の海を見ていた」作・芳地隆介、演出・大島健

目黒区民センター

12月3日 演劇集団ぶどう

「猪は走り鹿は跳び夜毎蝶が……」作・山本俊夫、演出・垣内俊一

四谷公会堂

12月16・17日 世仁下乃一座

「別れが辻」作、演出・岡安伸治

ついでだ、どじょこふなつこの歌ば歌って送るべしや」と、清一が歌い出し全員の合唱で幕。歌は――

春になれば シガマコ添けて

田せぎ 小せぎコの ドジョコだの

フナコだのて

夜が明けたと 思うべやね……

はくはこの本については、少年少女の恋愛場面(同窓の直前)と最後の父親の死は便宜の過ぎ、しかも、父親が手紙の中で諄々と説く言葉の中で実は彼がすぐれた農民運動の活動家であつたという設定には無理があるうとクレームをつけたのだが、後藤氏には通じなかつたらしく、舞台では全く元のままであり、本の上ではどうなると思つた「私を抱いて」の少女のせりふには観客が健康に笑い、跳りかかっていた清一には爆笑という形ではくの心配も消しとんだ。父親(赤井臨吾、実は後藤志げお)の手紙の朗読もさすがで、やわらかに伝わってくる。

出稼ぎ問題と朱実の家に見られるような農家の破壊、少年少女の友情の溢れた恋愛が非行とされる教育問題など丁度、先にききだみつお氏の「吹雪のうた」があり、あとに小島

真木さんの「豚立ち」があるが、後藤氏はこの二つを併合して提示したのである。比較の意味ではなく云えば後藤氏は格段に楽天的だ。そしてやはり軽いと云えただろう。

しかし、これを何かボロクソに云えないところに妙なレオの魅力があった。幼稚とか拙劣とかというのは別で、いやむしろ時にはうまい。ところが簡単な演技上のリアリティやいろいろな芝居の約束といったことが、諸所で平気で破られるのである。そして例えば20才位の少女が母親役（藤森蘭子・初舞台）つまり40才位の役を、懸命にしがみついているとか筋を通して見せてしまおう、一寸云い表したい爽やかさ。

どうやら、これはいわば「後藤ファミリー」の魅力ではないかと、ぼくには思えてきた。つまり小うるさい芝居の上のデテイルなどは余り必要としない。食卓を開んだ農家の茶の間なら、それをそのまま舞台上のせて成り立たせているような感じ。忘れたセリフを慌てずに、ゆっくり時間をかけて思い出しているなど。音楽などもフンダンに使われていた。

この作り方には、横着な、むしろ一種の強情さがあると思う。そして、あの魅力に富んだ局面の描き方など要所を逸することなく原作に即したきびしさが出たのには感心した。

ところでぼくはここで一寸別のことを挿まなければならぬ。それは、弘前での、「浮標」の演出者との別れが、（秋本博子さんの店ブラジルでだったが）酒の上とは云え、口汚い罵り台いで終止符を打ったということだ。この後味の悪さをぬきにしては正直芝居の印象は語れないのである。というより「浮標」に就ては何も云いたくないという程のものだが、しかしこのことは二次会も果ての席なので、多くの弘演のひと達の与り知らぬこととであり、やっとうしてこゝまで書いてきたが、やはりこれ以上書きたくない。

おそらく、書いて賣いたくもない——「おめえなんか何が解る」と云った演出者の気持を尊重してでも、ぼくは口を噤んだ方がよい。「浮標」は劇団の創立者作間雄二に捧げられ、演出者飯田信之氏を始めとする劇団きつばの強力な支援が、作間氏の願い——信じ合って仲間がからを合せる——にも添うて成功したと云えたが、12時間の列車に耐えて、客席にかけつけたぼくにも亡き作間への熱い想いはあったのだ。それが、東リ演や演劇会演をカサに著した批評家面として、そういうこと

だ役者たちを、どうやらこの強情さの中にとじこめておきたいように思える。あのひとたちの限りない自主的な創造の喜びが開きまわらないのだ。

作・演出・主役・音楽の多才な後藤氏の枠をどこかで破るような——この人によってまとめられてゆくのではないもう一つの別のちから。レオはこれを生成すべきである。八年にもわたる豊かな児童劇の舞台など無視して、たった一つのシリアスな芝居を一度見て、酷評にすぎるかと思うが、大きな市民会館で、前の方にひとかたまりといった感じの観客にカーテンコールをし、にこやかに後藤氏自らアコを弾いて「レオ」の劇団歌をうたってくれたとき、そこで安んじると、ぼくは心の裡で叱りたくなったのであった。

五所川原までは弘前から車で一時間。前日（10月17日）の弘演の「浮標」の公演の債務を終えて、二台の車を駆って送ってくれたのである。

佐藤伴造氏や秋本博子さん、川村勝氏、それに劇団きつばの林申茂樹氏藤原章氏といったメンバーだった。レオの会場では劇団支

として現れたという風に見えたとしたら、ぼくは醜態そのものである。

作間氏生存の頃の弘前は、ぼくに対して或は優しすぎたのかもしれなかった。駅まで送ってくれて、別れの舞手をくれた作間の爽やかな手のぬくもりが今でも戻ってくる程だが、それへの甘えが今、ぼくに不遜となつてあらわれているとしたら、辛い。そんな風に見えるとしたら弘演の皆さん、許してほしい。

こういう経験をする芝居の批評なんて阿呆らしくなる。批評は実は批評される材料でもあるからである。或る信頼する作家が自作の批評の一つに対して、その批評家を軽蔑すると言った時、ぼくは成程と思った。

この例は別としても、しかし、物言えは唇寒しではどうにもなるまい。そのくせ、公演には「きびしい御批判を」と来るのである。誰にせよ、自分を褒めてくれるものだけを相手にして、それでえちくなっていると思つているとしたら、これに過ぐる墮落はない。批評する側もそうであつて、やつつけて好い気になつておられると大莫迦野郎である。

こういう低い次元からは脱したいというのがぼくの批評の願いであつた。弘前ではどう

木の藤原浩平氏やエキちゃんたちと弘前につづく再会であつた。

さて弘演の「浮標」は、ぼく申し分ない成功といえただろう。1ステージ、八五〇というこれまでの弘演の記録を破り、三好十郎の直弟子であり、「三好十郎の仕事」という貴重な本を刊行した大武正人氏が見えたりして、その興味あるお話でも「浮標」そのものが作り、舞台の作り方の確かさ熱気は、よく作間雄二の遺志にこたえた。至難と思われた我五郎の役（成田準）が成功しており、ぼくなどにも成功が当然と思えたにせよ、秋本博子さんの美緒が一入奥行きを見せてくれた。端し端しの役までに到る克明な鑑別は、演出（飯田信之）劇団きつばののちからだった。五郎の住居と浜辺の舞台の交互の転換にも妙味を見せ、5幕の大作をほぼ3時間余で破綻なく見せてくれたのである。

「その人を知らず」が作者三好十郎の戦争責任を自己に課した作品であるとすれば、「浮標」は左翼運動をくぐった転向の問題を抜きにしては語れない。この重さの理解は、さすがに、今の若い人たちにむづかしかった。従つてそのへんの軽さは否めなかったとしても、赤井源一郎（庄司知治）が戦地に赴

やら大莫迦野郎のピエロで終つたらしい。

書き返しのゆとりのないままとどうとう紙數切れにきたが、やはり言葉短くても、未踏の「平沢計七の見果てぬ夢——一人と千三百人」にふれておきたい。

作家を研究すると云うことにその作品を上讀して具さに作者の在態を探るということはあるが、その作者に成り代つて、「果せられなかつた夢」斯くもあろうと書いて見せたという例は余り知らない。

考えてみればここに到る立川雄三氏にはそれに相応しい必然性があつた。これまでの計七作品の上演にも追慕以上の「噴らいつき」があり、自作「強盗猫」脚色「村達の裁判」をつらぬいた性根はびつたりと平沢作品のモチーフに照準が合うのである。

平沢の戯曲に出てくる、あの簡傲だが、労働者への熾烈な愛情と勝利への確信。これが立川氏を悩殺するのである。

芝居の強さ、たのしき、それを通して一人の人間が生きられることを「一人と千三百人」が見せてくれた。半世紀の昔を語つて今日を語る企ては、むしろ「立川雄三の見果てぬ夢」として迎えさせられた。

岐阜労働創立10周年記念例会
劇団はぐるま上演台本

かわいた湿地

4 幕

こばやしひろし

登場人物

河村 (朝鮮人技師)
康子 (その妻、日本人)
和夫 (河村の長男)
姜春仙 (河村の母)
朴又貞 (朝鮮連の役員)
倉地 (元崎建設の幹部)
村松 (元崎建設社員)
吉岡 ()
とし子 (松乃家のおかみ)
乞食
隣の水
警防団員

李 (自由労働者)
山野 ()
鈴木 ()
老婆 ()
富枝 (和夫の友人)
君子 ()
金玉順 (ドブ屋のおかみ)
部落の女
私服
税務署員
その他 部落の人々

舞台の隅に康子浮び出る。疲れた様子。

康子 私日本人です。私の父も日本人であり、母も又そうです。それでいて、私は日本人としての立場を日本人によって奪われてしまったのです。

私には夫があります。少し気が小さくて、背伸びしがちな所もありますが、私を愛していてくれる夫です。それなのに、私は一般的な意味での妻の座を手に入れることが

できませんでした。法律的には私の夫は夫でもないわけです。

子供が一人あります。男の子です。何の変りもない父親と母親をもちながら、この子供は法律的には母親しかない子供、即ち、私生児という立場しか与えられなかったのです。もう一度いましょう。私生児なんです。それは、たんに私の夫が朝鮮人であるためなのです。

ただ、それだけのことです。私の夫が朝鮮人だからです。……一たい私にとって、朝鮮人ってなんなんでしょう。……(客席に向い)あなたにとって、そう、あなたにとっても朝鮮人ってなんなんでしょう。

康子消える。
舞台は戦時中の急造といった感じの社宅。そのわりに小綺麗なのは、新婚の雰囲気が残っているせいであろう。しかし、肝心の新妻がいない空虚感がどことなく漂っている。上手は玄関、下手は居間になり、下手奥の台所に通じている。労働課の吉岡、村松、それに松乃家の女将とし子が河村と麻雀をしている。

吉岡 (とし子に) もう一チャンどうだい。どうしても駄目か。

とし子 ごめんね 勝逃げで。どうしても用があるの。

吉岡 どうしても用があるって。昼日中、係長、大丈夫かい。止めて頂戴よ。

とし子 (吉岡の膝をつねり) 冗談じゃないわよ。

吉岡 いたた ほんとかい。しかし、まいったねえ。どうやら俺の一人沈みか。俺の分みんなおかみに吸いとられたってわけや。

とし子 俺は女に弱いからね。

吉岡 いやいや。河村さん、これから気をつけなさいよ。このお二人には、とくにおかみに手をだしちゃいけませんよ。

村松 おいおい、まじめな人に、と。

吉岡 (笑い) まじめな人につか。しかし、係長、この仕事こんなに早くかえられるとは思わなかったねえ。これからののに。

村松 うん、それに俺の時は殆んど朝鮮人労働者がいなかったからな。

吉岡 そうそうヨボさんがいないと、この仕事もだめなもの。

村松 河村君はその点運がいいぞ。

吉岡 やはり来るってか。

村松 うん、はっきりしないけど、近々な。

吉岡 かき集めてくる頃やもんな。河村さん、ヨボってのはね、うるさいけど、多ければ多いほど美味があるんや。ま、食べ物にしてるようなもんやけどね。(笑い) たまらんよ。

とし子 私、リーチよ。

吉岡 えっ、おいおいおい。

村松 リーチか。うーん。

吉岡 こんなに早くちやピンフだな。

とし子 と思ってる大きいわよ。吉さまから、たんまりまきあげちゃうから。

吉岡 へ、そうは聞屋は下ろしませんよ。

とし子 麻雀しましょうね、麻雀。

吉岡 はい、はい。(パイを捨てる)

とし子 はい、それまで。

吉岡 (あわて) えっ、ほんとかい。番生//とし子 たいしたことないわ。一、九、二の流れの二千三百。

吉岡 俺の分みんなかつさらって行ったよ。
なあ、河さんよ、おかみは俺たちの安サラ
リーをかつさらうのが商売やからね。無慈悲
なもんや。

とし子 嘘おっしゃい。自分のお金で来たこ
となくせに。

吉岡 おいおい恥かかすな。ためてあるんだ
よ。ためておかないとおかみも淋しいと思
つて。(笑う)おい、こんでもう終りか。

村松 終りにしよう。そりやそうと、河村君
今日そろって来たのはほかでもないが、こ
の前一寸話した件だよ。

河村 ……はあ。

村松 ま、要する所なあ、あとよろしく頼む
ということなんだ。

吉岡 そ、そう、そうなんや。

河村 ……。

吉岡 そう、深刻に考えずにさ、けど、自地
部長が河さんの所へ係長もって行くとは思
わなかったねえ。

村松 いや、部長にはちゃんと考えがあった
んだ。(河村に)それで、こんどの辞令で
職員になった。

河村 なっていません。

吉岡 ほんとかい。第三ちうのはみんなの複

望的のやのになあ。それを職員にやらせる
なんて。

村松 いや、職員の係長は、これからいくら
でも出るよ。応召した後釜をつぎつぎ職員
にしたら復員した時困るだろう。係長まで
は職員でやらせてゆくよ。

吉岡 そうか、いずれにしても河さん。なん
ていえないね、上役やもん。ま、部長に見
込まれたんやな、羨しい限りだよ。なんで
も大学じゃ自地部長の後輩やつてな。

河村 ……。

吉岡 それがどうして職員なんやろうなあ。

村松 何か事情があるんだよ。

吉岡 事情ねえ。しかし、こんどの人事は無
理があるよ。ひよつとすると、憲兵や警察
にさしたものが。

村松 いや、だったら前任の岩田の方が派手
だったよ。それに俺はこれでも栄転だよ。

吉岡 少々の栄転でもさ。配給にぎつてる第
三係長ちうのはますます光つてくるんやか
らねえ。

何でも統制、統制で。

とし子 そうよ。何でも配給ちうことは、何
でも聞つてことでしょんね。

村松 ま、それで後釜の君に、何だ…、卒

直にいえば今まで通り松乃家へも面倒みて
やつて欲しいんや。ま、酒、砂糖、肉とか
ねえ。

河村 ……。

吉岡 河さん、悪くしないから、黙つて俺の
すること見ててくれりゃいいんだよ。

とし子 ほんとにお願ひしますわ。私の方で
もできるだけのことはさせていただきます
から。

吉岡 ということは、サービスの方も、どん
なサービスでもしてくれろということなん
や。

なあ、おかみ。

とし子 いやな人。

村松 部長もあんたを見込んだんだが、俺の
顔も立ててくれや。こいつも、バツタリじ
や困るんだ。

河村 ……はあ。

吉岡 そうかしこまらなくなつていいじゃな
いか。なあ、河さんよ、あんな部長と同じ
ように一億一心のゴチゴチか。一億みな要
領という部分も必要なんだよ。それに、ヨ
ボさんがくるつてんやから、ますます楽な
んだよ。ヨボさんへの割当はいくらでも処
分できるから。な。

河村 ……はあ。

吉岡 相変わらず、はあつていつてるよ。部長の
ミコがいいだけある。ま、ま、それはそれ
でいいからさ。俺が絶対うまくやるから、
まかせろつていつてくれよ。

河村 ええ、それはなんですが、仕事の内容
もまだはつきり。

吉岡 そんなことはいいつたら。俺は万事う
まくやるから。

河村 ……。

吉岡 弱つたなあ。(村松に)え。

村松 ……じゃ河村君、君、わかてるだろ
うなあ、採用間もない職員を自地部長
がこの仕事に推したつてこと。

河村 ええの?

村松 そりや大学は出てるやろ。しかし、
職員なんや。

吉岡 部長のヒキだよ。

村松 いや、それだけじゃない。なあ、河村
君、君が一番よく知つてる筈や。

河村 はつ……はあ。

村松 (押しかぶせるように) わかつてくれ
るな、俺の立場も。傾む。

河村 ……はあ。

とし子 ま、傾し。一つよろしくお願ひしま

すわ。

村松 ありがとう。それじゃ今夜ね、いろい
ろ打合せもしたいし、松乃家でまつてるか
ら。

吉岡 ほんとだぜ、大丈夫やな、おい。

村松 いや、その点、河村君わかってくれる
よ、ちゃんと。じゃ、六時頃な。

とし子 もう少し、おそい方がいいわ。八時
頃でどう。

村松 そうか。じゃ八時。

吉岡 頼むよ。おかみ、ちゃんときれいな所
よんどいてくれよ。係長はおかみがいるか
らいいかも知れんが、なあ、河さん。

とし子 じゃ、河さま、よろしくお願ひしま
すわ。今夜、お待ちしますから。

村松、吉岡、とし子玄關へ。河村ぼんや
り見送る。

吉岡 今夜こそ復讐だぜ、おかみ。

とし子 今夜は女の子でしょう。

吉岡 おいおいおい。(康子を気にして奥を
のぞく)

村松 奥さんいないんだつて。

吉岡 在所か。そりゃいい。(卑猥な笑い)

とし子 じゃ、お待ちしますから。

吉岡 じゃ。

三人退場 遠くで爆音と交錯して軍歌が
聞えてくる。

河村 知つてる。…こうなると何もかも終
りだ。いやいずれば…。

しばらくして、女の乞食が入ってくる。

乞食 あの、満州事変で夫を失い、女一人で
かせいできましたが、無理に無理を重ねて
妙な病氣になつてしまい、こうして、身寄
りもなしに、…はい、みなさまのお恵み
をいただいております。はい、何でも結構
でございますから、お願ひいたします。

河村……。

乞食 お願ひいたします。働くにも働けない
身の上でございます。お願ひいたします。

爆音と軍歌が聞えてくる。

乞食 朝鮮で何とかやってきましたが、結局喰
いつぶして。

河村 朝鮮。

乞食 はい、お願いでございます。何でも結構でございます。

河村 (乞食をみつめ) あんた、……日本人だろう。

乞食 はあ？ はあ。

河村 ちがいない。(金を渡す)

乞食 ありがとうございます。ありがとうございます。

乞食出て行く。河村部屋にもどり転る。

河村 知つてるとしたら……番生、俺は、俺は。

倉地 部長入つてくる。

倉地 河村君いるか。

河村 は？ はあ。(玄関に出る) 部長ですか。

倉地 ちょっと、君に話したいことがあってね、……奥さん、まだ何もいって来ないかね。

河村 はあ。

とと思うんだが。
河村 御心配おかけします。
倉地 いやいや、これでも仲人だからね。しかし、あの親爺さんも頑固だねえ。仲人の僕に康子さんにも会わせないんだ。親戚へやつてあるとかいってね。ま、なんだなあ、僕は帰つてくると思うがねえ、お腹に子供があるんだし。それだけにショックは大きかったかも知れんが、落ちついたら、いろいろ考えようと思うんだ。
河村 そうでしようか。……子供を流すようなことはないでしようか。
倉地 いや、ひよつとしたら、もう。
倉地 そんなことはないよ、それに簡単に流すなんてできやしないじゃないか。今時。
河村 ……。
倉地 ……しかし、こういうことは最初にはつきりしとした方がよかつたねえ。
河村 ……。
倉地 僕が卒直にいえば納得したと思うよ。少くとも康子さんは。妊娠してはれたからよくなかつたんだ。ああいう時はねえ、異常な時なんだから。
河村 ……。

倉地 しかしね、河村君、僕はねえ、これらの時局にむしろこういう結婚への期待をもつてんだ。アジア人の団結つてのが大切な時だよ。どしどしこういうケースの結婚が生れて来なくちゃいけないよ。康子さんには僕はそういうつもりだ。朝鮮人と日本人、日本人と支那人、こういう結婚ができないということが、どこか妙だと思わなにかね。日本人の純粋性を守るつていった所が、昔は帰化人が一ぱい日本に来てるんだから。それに、君なんか、言葉にしろ、生活にしろ、日本人とちつとも変らないだろう。
河村 そうかも知れませんが、……私は逆に無理なことをしたと思ひました。さつきも女の乞食が来ましたが「日本人か」って聞いたんです。……考えてみりや、朝鮮人の乞食なんて日本じゃお目にかかつたことがありません。
倉地 そりや、どういふことだね。
河村 朝鮮人じゃ、人の好意にだけ頼る乞食つて商売がなりたないんですよ。
倉地 ……そんな。
河村 いや、ほんとなんです。なんとか朝鮮人からぬけだしたいと希つてゐる朝鮮人が

一ぱいいます。そりや、もう涙ぐましいほどです。私は日本で生まれ言葉にナマリもありませんが、二世でなく朝鮮から来たものは、真夜中五十銭五十銭と一生懸命発音して、なんとかコジッセンから五十銭になれないかと練習するつていいます。私は、それに、なにか朝鮮人の宿命みたいなものを感じてゐます。……結局日本人になりきれない。

倉地 ……。

河村 独立を考ふる奴の気がわかるような気がします。

倉地 おいおい。

河村 いや、そんなことはできっこないことは私が一番よく知つてますから。

倉地 ま、康子さんも必ず帰つてくると思うから、いや、僕が責任もつよ。

河村 いや、諦めていませう。そりや結婚できた時は、これで日本人になりきれるといふ喜びで一ぱいでした。その上子供ができたんです。日本人の子供と考えるだけで。

(自嘲的な笑い)

倉地 そりや、わかる、わかるがね。ま、落着け。康子さんだつて驚くのは無理ないと

思うんだ。日本人だと思つていたのが、朝鮮服を着たお袋さんが突然現れたんだからね、ショックだつたんだよ。それはそうとお袋さんはまだいるの、この町に。
河村 ええ。
倉地 困つたもんだね、お袋さんの気持もわかるが。
河村 親が近くにいと困るなんて、妙な話だと思われよう。いや、ほんとなんです。学生時代から道で会つても知らん顔して来たんです。親をだまし、妻をだましじゃ、その報いはいつか現れますよ。
倉地 おいおい。
河村 いや、妙な努力がこんなふうになつてゆくと、自分が衰へてくるんです。……実は、村松係長も私のことは知つてるよ。……
倉地 知つてるつて。
河村 なぜ君を配給の元締めになる第三係長にしたかわかつてるだろうというんです。
倉地 どこから聞きこんだんだろうなあ。
河村 どこからでもばれますよ。母が訪ねて来なかつたとしても、この一月半ぐらいのうちに二度も警察が来ていますし。ばれな

いのが不思議です。部長、こんな私を係長にしていいんですか。もし……。
倉地 いや、そりや所長とも相談の上でやつたことだから、別に氣を使わなくていい。しかし、警察にも君のことはちゃんといつておいたんだがなあ。それはいいが村松君何か。
河村 朝鮮人労働者が大量に入るんだとか。
倉地 それで。
河村 ……。
倉地 そうか。あれのことだからろくなことじゃないだろう。実はそのことで君に話した方がいと思つて来たんだがね。君も知つて通り、飛行場と工場の第二期工事ははじまるんだ。それで村松君のいう通り大量の朝鮮人労働者を入れることにした。それで、前に朝鮮人労働者がいた時、岩田君が相当派手に横流しをしたことがあるんだよ。あの頃はまだ物資は豊富だったが、日米通商条約が破棄され、さらに時局が逼迫した今日では、この仕事は非常に重要なんだよ。ここじゃ辛い問題は起きてないが、北海道やその他では、このことで朝鮮人労働者が騒いだりしている。そこで、実をいうとこの仕事の適任者として君以外ないと僕らで考えたんだ。こん

なことで軍が介入し、流血騒ぎが起きてはかなわんからね。

河村 ……適任者ですか。

倉地 いや、妙にとつてくれちゃ困るよ。僕らはねえ、日本人も朝鮮人も同じ日本国民として御奉公するには実体がなくちゃいけないと思ってるんだ。即ち口でどんな美しいこといっても差別があつちやいけないんだよ。いや、あるとしたら少しでもなくさなくちゃいけない。そうでなければ内鮮一体の実をあげることはできない。それが僕らの考えなんだ。

河村 ……はあ。

倉地 だからねえ、まず朝鮮人労働者への食糧その他の諸物資の配給はとくに厳正にしなければいけない。村松君のようなやり方じゃ困るんだ。いや、むしろ村松君には逆に気をつけて欲しいんだ。僕らの方でも君をもうたて、守って行くから。

河村 ……

倉地 どうだね、わかつてくれるかね。
河村 ……はあ。
倉地 いや、ほんとに頼むよ。安易な気持ちじゃこれからの時局はのりきれないんだよ。それからもう一つ。朝鮮人労働者の中に要

注意者がいるんだ。朴又貞といってね。僕たちと同じ大学を中退し、朝鮮に帰り小作争議を指導したというんだ。君、知らないか。

河村 いいえ。

倉地 そうか。くわしいことは、入ったらすぐ君に伝えるが、十分気をつけて欲しいんだ。

康子入ってくる。

河村 どなたですか。康子ノ(玄関へとび出て)康子じゃないか。

康子 ……

倉地 それ見ろ。だからいわんこつちやないんだ。康子さん、いやよかったですよ。

河村君やせる思いでしたよ。

康子 すみませんでした。

河村 (信じられない面持で)か、帰ってきたくれたんか。

倉地 当前じゃないか。ねえ。

康子 ……

河村 康子、ほんとうか。

康子 ……(うなづく)

倉地 何いってる。いや、よかったです、ね、こ

の調子なんですよ。

康子 ほんとに御迷惑おかけしました。

倉地 いや、僕のことはいいですよ。

河村 それで家では。

康子 ……

河村 どうなんだ。

康子 もう二度と帰りません。

河村 そ、そんなことより、……そうか。

倉地 ま、いい、ま、上って話さないよ。

三人居間に入る。

河村 康子、すまん。

康子 ……

倉地 あんたがいなくなつてからというものの、氣も狂わんばかりでね。ま、康子さん、いろいろ深刻にためて考えられたでしょうが、河村君もあなたに黙っていたということは、本当に悪かつたと思ってるし、僕も一半の責任を感じている。許して欲しいと思ってる。ね。

康子 いいえ。

倉地 しかしねえ、康子さん、君たちは好きあつた仲だよ。僕は恋愛には朝鮮人も日本人もなれないと思うんだ。愛しあつたんだか

ら。そりや確かに河村君は朝鮮人だ。しかし、何も愛つたし聞かない。そうでしよう。それどころかこの我々にだつて朝鮮人の血が流れているんですよ。僕は康子さんのお父さんにもいつたがね、僕の故郷に大宮神社つてのがあるんだ。こりやねえ、河村君、朝鮮の王様を祭つた神社なんだ。だからねえ、帰化人なんて一べいいるよ。駒井、駒月なんて苗字は高麗のコマから来てるんだそうだよ、それにねえ、井上、中村ねえ、みんな帰化人からの姓だそうだよ。それが昔は朝鮮からいくらでも入つてきて、日本に文化をもたらしたんだ。何も不思議なことじゃない。だからねえ、こんどは逆に朝鮮や支那に日本の文化を伝えるんだよ。大東亜共栄圏とかいうがねえ、こりや戦争だけじゃ片づかないよ。こういった同胞主義がなくちゃ。僕はその主義だ。そう

じゃないか河村君。

河村 は、はあ。

倉地 天皇陛下の御威光を東洋に知らしめるというんだろ。狭い考えじゃだめだよ。東洋民族というかねえ、「アジアは一なり」といったが、東洋は一つの民族という考えにたたくちや。

康子 ……

倉地 ヨーロッパはあれで一つの民族と同じようなものだからね、イギリスとフランス人、フランス人とドイツ人が結婚してもどうてことないんだから。当り前で何の不思議もないんだから。イギリスの何という人だつたつて、うん、ハノーヴァ王朝のジョージ一世ねえ、ありや英語も知らないドイツ人なんだよ。それを王様に迎えたんだ。

日本でいや、日本語を知らない朝鮮人を天皇陛下に迎えたようなものじゃないかね。

こんなこというとムキになる日本人がいるかも知れんが、もう、日本もこれくらいの腹をもたなくちゃ、大東亜は一つになれないよ。いつまでも明治時代のような気がしやだめなんだよ。康子さん、そう思わんかね。

康子 はあ…。

倉地 そりや、あなたのお父さんの気持もわかるがね。もうわれわれは考えを改めなくちゃ。東洋の指導民族になれませんよ。

ま、一つ、ね、うまくやって下さい。何でも相談にのりますから。

康子 ありがとうございます。

倉地 よかった、よかった、よかったなあ、

河村君。じゃ、僕はこれで失礼するから。村松君には気をつけてね。

河村 はい。

倉地 じゃ。

康子 ほんとにどうも。

倉地 去る。河村送って出て何か話している。康子、部屋にもどつてじつと考える。

河村入ってくる。

河村 康子、ほんとにすまなかつた。許してくれ。だましたようなことして。

康子 ……すんだことだわ。

河村 ……そういわれると一言もないが、ほんとに俺の所へ帰つてきてくれたんか。

康子 それより仕方がないでしょう。

河村 ……

康子 そりや、私を閉じこめたまま、親族会議は何べんも開かれたわ。倉地部長が来られる、あなたも二度、三度やつてくる。門前払いくつて。その中にそれが村に知れ、

時になつて。

河村 ……

康子 あなたを恨んでるわけじゃないの、妙

なものね、あなたが朝鮮人というだけで。
河村 ……

康子 私はもう…… あなたの所でしか生きられないのよ。……もう、どこへも行けないんだわ。私。

河村 すまん。……じゃ康子、俺と一緒に生きてくれるんだな、俺と。

康子 ……

河村 すまん、なんとか、なんとかして幸せにしてみせるから。

康子 (急にしがみついてすすりあげる) ほんとよ。

河村 ほんとだよ。倉地さんも親切にして下さるし、俺も一生懸命働く。

康子 それでいいの、私はそれだけで。

河村 康子、それで、……子供は。

康子 (うなづく)

河村 ありがとう康子、ありがとう。

康子 ……家の者は子供を流すため、医者へ相談にもいったわ。そんなことしてくれるはずもないのに。できないとなったら父は辰己屋の恥だって、腹を押えたり、わめいたり、私は一生懸命守ったの。子供に何の罪があるというの……。

河村 ……すまん。

康子 母は泣いてるだけ。私があなたの所へ戻るといいでしたら、……結局、勘当を云

いわたされたの。

河村 勘当。

康子 村からも、家からもしめだされたのよ、私は。……あなたが朝鮮人というだけで。(泣く)

河村 ……

康子 夜、こっそり家を出たら、母が風呂敷をかぶって駅まで送ってくれた。

河村 許してくれ、康子。

康子 私はねえ、もう、日本人としては村へ帰れないのよ。私は、あなたと一緒になの。

河村 馬鹿、日本人じゃないか、お前は。

康子 日本人の資格を失ってしまったの。

河村 日本人だよ、俺もお前も。

康子 いいえ、結局あなたも私も国籍のない人間よ。私は親や村の人からつきはなされた日本人だし、あなたは朝鮮語を使わない朝鮮人だわ。二人とも、すなおに親とよべる人がいないじゃないの。

河村 (うめくように) 何いう。日本人になるんだよ。誰が何というかと。倉地部長だって、なんの差別意識もないじゃないか、ぶつかって行くんだよ。堂々とぶつかって

行くんだよ。そうすれば、きつとなれる。

康子 ……

河村の母、委春仙入ってくる。

妻 コモンなさい。

河村、はっと立上り玄関へ出ると、狂気のように母を押しだそうとする。

河村 来ちゃいかんといったじゃないか。

康子 あなた、まって。私が来て下さいといったのよ。あなた、自分のお母さんに何するの。

河村 来ちゃいかん。絶対に寄りついでい

かんのだ。俺の家に。

康子 まって、まって。

河村、康子の止めるのも聞かず、委春仙を外にしまだし、呆然と立ちつくす。

康子泣いている。

康子 私がよんで来たの、探して探してやつとみつけたのよ。あなたと生活して行くんだもの。一度三人でいるんな相談しようとい

思っで、あなたを育てるのにずい分苦勞な

きつたんでしよう。そういういろんな苦勞をみんな話してもらおうと思っで、私が、私が来て下さいといつたのよ、私が、……向んでらしたわ。……それを、あなたのお母さんは、私のお母さんじゃないの。もう、朝鮮人だとわかつたつて驚きやしないのよ。私は、もう、ここからどこも出てかないのよ。

河村 ……

河村立つたまま。遠くから軍歌が聞えてくる。

幕

2

舞台は前幕と同じ。数年後の秋。太平洋戦争は苛烈な段階に入っている。男は殆んど国民服か作業服であり、女はモンペ姿である。砂袋、バケツ類が玄関においである。電球には黒の覆いがしてあり、

戸には黒幕がつけてある。

夜、康子、食卓に茶碗を並べて布巾を上

にかけ、時計を見る。七時に近く、あたりはうす暗い。

ややあって、町内の主婦が入って来る。

女 それじゃいきましたよか、奥さん。

康子 ああ すみません。

女 あんた、糸足りた?

康子 ええ、何とか。

女 私はやつぱり下手なんやね。あれつく

らしいの糸じゃ、とつても全部はかがれん

よ。

康子 なかなか要領がわかりませんものね。

私だつて、ぎりぎりですわ。

女 わたしやこういうことは苦手でねえ。

ただでさえ子供が多うて忙しいと思つてる

のに。まあ、あれやつたりこれやつたり、ちつともはかどらせんのですよ。ま

だ、だいぶ来るらしいね、トラックで来た

つたから。

康子 軍手はいろんな所で使うから、沢山要

るんでしようね。

女 そりやそうと、あんたとこの人、会社

じゃずいぶんうるさくいわれとるそうやな

いの。

康子 ……

女 なんでもね、(いいよどみ)

康子 (きつぱりと) スパイやつてことでし

よう。

女 え、ええ、(うなづく)

康子 ……

女 ひどいこというねえ。

康子 馴れましたわ。いろんなこといわれる

のには。

女 けどね、東京でもね、空襲の時には、

ちゃんと懐中電燈で東京の位置を知らせる

人がいるんやと。これはほんとうらしいっ

て、いえ、あんたとこの人みたいなじめ

な人がそんなことするはずないか。ちつと

も日本人と交りやせんもの。けど、東京で

は、ひどいそうやで。

康子 ……

女 (ふと気づき、話をそらす。小声にな

つて) そりやそうとね、サイパンが落っ

て、今度硫黄島が危いそうやないの。

康子 そうですつてね。

女 うちの人の工場なんか、たいへんや

よ。一機でも多くサイパンへつていうん

で、月末は三十六時間連続神風突貫作業で

やっただのに、とうとう墮落してまったがね。
ね。
廉子 三十六時間、たいへんやっただでしょうね。

女 ナーに、飛行機の胴体でこそつとねたりしとるらしい。(笑う) それでもせな身体がもたんもの、そんなにしとつても、疲れて帰って来るがね。今は月始めで寒らしいけど、又月末になると。

廉子 ほんとにたいへんですね。
女 その点、あんたんとこはええわ、朝鮮の人ばつか使うんやから。
廉子 いいえ、うちだって。
女 トンネル掘りやね、今は、まあ、お互いに兵隊さんのこと思つて辛抱せな仕様がなあわ。

(大きく笑う) あ、そんなら行きましようか。あれ、和夫ちゃんは?
廉子 御飯たべて、又、あそびに。
女 子供はええね、安気で。

二人、軍手の入った荷物をもって出て行く。爆音が聞え、しばらくして和夫が元氣よくとびこんで来る。五才、柳の刀を腰にさし、防空頭巾をかぶっている。刀

をぬいてかまえる。防空頭巾が大きいので滑稽にみえる。又、外に出て行こうとする時、村松が入って来る。和夫は父が帰って来たと思ひ「ヤッ」と切りつけ、村松と知つて驚く。

村松 坊や、お父ちゃんは?
和夫 おらへん。
村松 そうか。
和夫 (外を見て) あ、お父ちゃんや。お父ちゃん。
河村、入って来る。

村松 ああ、丁度いい所や。
河村 (和夫に) 和夫ちゃんは遊びに行つていでね。お母ちゃんは?
和夫 知らん。
和夫 出て行く。

村松 やあ、しばらくやなあ。
河村 はあ。
村松 どうも山の中にも疲れたよ河村君。単調で、女氣なしで。(笑う)

河村 はあ。(警戒氣味)
村松 君は運がいいよ、ずつとここだから。俺ら見てくれ、あつちへ行つたり、こつちへ行つたりさ。
河村 ……それは……

村松 いや、俺は何も、君に恨みごとを言つてるんじやないよ。本当のことをいってただけなんや。本土決戦かどうか知らんが、この頃は飛行場作りなんてもんじやないよ。山の横穴掘り専門さ。馬鹿みたいに。
河村 ええ、こつちだつて同じですよ。中学生なんか動員して、エン体濼作りだとか、トンネル掘りです。

村松 そうかい。
河村 酔つてるんですか。
村松 う、うん。(笑う) 少しね、松乃家で一杯やつて来たんだ。
河村 ……
村松 ぜい分前になあ。五年か。(思ひ出して笑う)

吉岡も飛ばされちまつたねえ、結局。どこだったつけ、おお、九州じやないか。さすがの俺も吉岡も、バックが倉地じや俺がたなかつたつてわけだ。
河村 (やや氣色ばんで) 私は何も、倉地さ

んに告口したことなんか決して。

村松 いや、いいんだよ、そんなことは、誰がやつたつていいさ。(曖昧に) 倉地も副所長で、今の所君も安泰だな、うん、しかし、今日、会社へよつて聞いたんだが、君のことであつて困つてるらしいつて話だぜ。(うすく笑う)

河村 ……
村松 君は固すぎるんだな、結局。少しは融通をきかせなま。
河村 はあ……。村松さん、上つて下さい。こんな所では何んですから。

村松 いやいや、いいんや。じきに失礼するから。それより、君、なかなか思うようにしてくれないつて、恨んでるようだぞ、皆。
河村 いや、皆さんには出来るだけのことをしてはいるんですが、何しろ、もの働らなくなりましたから。

村松 そりや、そうだろう。しかし、皆は、そこを何とかしてもらいたいのさ。そこを何とかするのが君の腕だと思つてるからね。……ところで、松乃家のとし子のことについては、何も聞かんかね。
河村 さあ……。

村松 まあいいや。俺が長野へ行つてから、監督官の三木少佐と關係してたことはよく知つてるんだが……。ま、そりやいいが。

河村 ……
村松 いや、今日はね、実はとし子に頼まれてやつて来たんだが、その……酒の余裕はないかね。
河村 (表情を堅くして無言)

村松 ま、甘い男やと君は笑うかもしれないだが、彼奴とはどうしても別れられないんだよ。
ふふ……。男つて妙な動物だよ。

河村 ……
村松 俺がここを離れてからも、度々用を作つてやつて来るのは、とし子に会うためさ。とし子との關係が原因で飛ばされたとわかつていてもね。

河村 ……
村松 河村君、頼む。度々ですまんが、一斗ばかり、何とか廻してやつてくれんか。
河村 今、酒はありません。
村松 そんなこといわずに、な。
河村 いえ、本当なんです。
村松 そうか、もう、俺なんかの頼みは聞けないつていうんだな。

河村 そんな……。今は物資不足で前のようには行かないんです。

村松 しかし、朝鮮人労働者が千島から帰つて来る警じやないか。
河村 (思はず語氣が強くなる) 朝鮮人、朝鮮人といわれますがね、朝鮮人には、酒の配給なんて一滴も来なくなつてはいるんです。

村松 ……そうか、わかつた。
倉地が入つて来る。

倉地 やあ、村松君じやないか。
村松 はあ。
倉地 いつ来たんだ。
村松 (照れ臭そうに) 昨日です。
倉地 松乃家が忘れられんかね。
村松 いや、とんでもない。仕事で

村松 (笑い乍ら) まあ、いいさ。
倉地 じゃ、失礼します。河村君、まあ、元氣でやつてくれよ。
村松、そそくさと去る。倉地、上によりながら。

倉地 何の用で来たんだね。
河村 ……少し融通してほしいって……。

倉地 何を？
河村 酒です。

倉地 仕様のない男だ。
河村 はあ。

倉地 それはそうと、現場の話じゃ、朝鮮人
労働者が千島から帰ってから、相当不穏だ
ってことだね。

河村 村又貞も帰って来てるんですか。

倉地 うん。彼はなかなかシッポを出さんら
しいがね。大物はそういつたもんだ。かえ
って無気味な感じだね。

河村 千島じゃ、相当重労働だったらしいで
すね。

倉地 ここより更に物がなからなあ。壕掘
りばかりさせて、真冬に地下足袋すら満足
なものが渡らなかつたってことだ。帰って
来た時なんか見給え、素足みたいなものじ
やないか。その上、食うものがジャガ芋ば
かりじゃ、そりゃたいへんだよ。
河村 私も、実は弱ってるんです。何とかし
たいんですが、何ともできないでしょう。
あちらからもこちらからも責められるし本
当にこの仕事も嫌になりました。

倉地 苦勞かけたね、君には。すまないと思
ってるよ。
河村 ええ……いえ……。

倉地、話したいことがあるが、切り出せ
ないでいる。外で、子供の「兵隊さん
よ、ありがとう。」の歌が聞える。

倉地 ああいう子供の歌を聞いてみると、世
の中も平和だね。
河村 はあ。

倉地 だが、飛行機の爆音で消されちゃっ
んだよ。
河村 ……

河村 副所長。
倉地 うん？

河村 設営隊の話ですね、御用は。
倉地 うん……まあ、そうだ。急に来たもん
でね。いや、僕も弱ってるんだ。

河村 副所長には申しわけありませんが、こ
うになつてしまつたんです。これは、い
つたにどうしてでしょうか？

倉地 ……
河村 憲兵や警察がしょつ中来るようにな
り。
倉地 いや、そのことについては、ちゃんと
申しこんでおいたのだが。

河村 だから逮捕されずにすんでいるんで
す。副所長に守つていただけなかつたら、
今ごろはもう、噂だけでほうりこまれてい
たでしょう。それでも、月に一回は必ず来
ますよ。
倉地 そうか……。しかし、これ以上は何と
も、僕の力では無理なんだ。

河村 朝鮮人も同じ日本国民だということを
信じていながら、いや、戦争が激しくなれ
ばなるほど、日本人も朝鮮人も同じ国民と
して団結しなければならぬことがわかっ
ていながら、逆に、戦争の激化と共に朝鮮
人にひきもどされてしまふんです。今度の
ことだって、所長や副所長が私に期待して
おられるのは、日本人としての河村じゃな
く、親的な朝鮮人としての河村だと思っ
てます。
倉地 そんなふうにと取つてくれちゃ困るよ。

の前、お断わりした通りです。
倉地 そうか。……

河村 ……
倉地 ……しかし、河村君、君の立場も、今
じゃ極めて微妙になつてるんだよ。

河村 ええ、わかつています。それも家内に
話したんですが、どんな仕事に変わつてもい
いというんです。

倉地 そりゃ、そうだろうけど、……所長
も是非、今日明日のうちに決めてほしいと
いうんだ。軍の方からも、戦局の逼迫して
るこの際、早く設営隊を出してほしいとい
つてるし……。朝鮮人労働者を送りさえす
りゃいいってわけにはいかんからね。そん
なことすりゃ、結果は騒ぐか、憲兵に殺さ
れるか、何にしても悲惨なことになるだけ
で、肝腎の飛行場設営はできやしないん
だ。今までに、日本人の現場指揮では、た
いてい失敗してるんだから。

河村 しかし、軍がいますから。現場へ行け
ば、そんな甘いもんじゃありません。
倉地 そういうことも考えられるがね。その
点は、現地の軍部に強く要望しておくよ。

河村 ……
倉地 ねえ、河村君。朝鮮人である君が現場

河村 いえ、そうなんです。(自棄的に笑
う)朝鮮人からの脱出というのは、私の念
願だったのに。考えてみれば馬鹿みたいな
もんでした。脱出しきれませんでした。ま
すます、朝鮮人の座にひき戻されてしまっ
たんです。
倉地 ……

河村 これはいつたにどういふことなんでし
ょう。いえ、恨みごとをいつてるんじゃない
い、私にはわからないんです。
倉地 ……(苦しげに)戦争が苛烈になつた
からねえ、何もかも、歪んで来てるんだ
よ。
河村 それにしても、歪みすぎます。
倉地 ……うん。……そうかもしれん。

康子、出て行った時と同じような風呂敷
包みをもつて戻つて来る。
康子 只今。あ、副所長さん。
倉地 お邪魔しています。軍手ですか。
康子 ええ、軍手のががりて追いまわされて
いますわ。これも御奉公ですが、なかなか
たいへんなんです。仕事は簡単なんです
けど。

倉地 じゃ、河村君、押つけはしないが僕の立場も考えてね。奥さんとよく相談してみてくれ。

河村 ……はあ。

倉地 戦局がきびしくなって来たんだし、日本国民としての御奉公だと思ってるね。

河村 日本国民ですか。

康子 南方設営隊のことでしょうか。

倉地 (少し間が悪そうに) まあ、そうですが、河村君とよく相談してみて下さい。(河村に) じゃあ、僕は一寸用があるから失礼するよ。明日にでも、又……。

康子に訴える隙を与えず、そそくさと去る。康子玄関まで見送る。河村座ったまま。

康子 (居間に戻って) 行かなきゃならないんですか、やっぱり。

河村 ……

康子 ねえ、……あなた。

河村 (はつりと) どうしてもってことはないよ。

康子 ……私は嫌ですよ。

河村 ……

康子 絶対いや、私は。

河村 生活のことは保証するってさ。(思わず皮肉な口調になる)

康子 そんなこと別の問題よ。

河村 だから、行くとはいってないよ。康子 今まで苦労して来て……、嫌な思いばかりだったわ。その拳句、一人にさせられるなんて。朝鮮人といわれようが、なんといわれようが辛抱して来たのに。

河村 (急に感情が激して来て) いうな、何も行くとはいってないじゃないか。いや、行かないよ、行くもんか。

康子 ……この頃、すぐ怒るのね、あなた。

河村 ……

康子 どんな苦勞したっていいから、一しよに居たいって言ってるだけなのに。

河村 要は、朝鮮人と結婚したのが悪かったんだ。

康子 そんなこと、一ことも言ってやしないじゃないの。(涙ぐんで) ねえ、私にあらることないでしょ。

河村 ……

突然、サイレンがなる。警戒警報である。康子、人口の黒幕を下し、電球の覆

いをきける。

康子 私は、親子三人がはなれないで生活したいだけなのよ。それをあんたは。

河村 もういいよ(ひっくりかえる)。

俺は何処か人のいない山奥で、戻でもやいて暮らしたいよ。職場へ行ったら口を利くやつもない。一生懸命働けば点取りださ、なげなしの物資をかき集めて特配したって、「当り前」だ。(起きあがる) いったい俺は何だ。いつそのこと俺は朝鮮人だ、朝鮮人だ……その方が、どれだけの方がいいか。

「警戒警報発令ノ警戒警報発令ノ」とふれ歩く声。
町内の主婦が入ってくる。

女 河村さん、河村さん。

康子 (出て行く) はい。

女 あのね、今晚当番だそうやからね、空襲警報になってからでいいんやそうやけど、角の金井さんの前へ集って下さい。尾鷲南方やそうよ。今夜は。

康子 そうですか、おそれいりました。

女 今夜はほんものかも知れんって。いやねえ。けど、毎日ウーウー鳴るばかりで、(笑い乍ら外に出るが、又、引き返して来る。声をひそめて) ドイツも危いらしいって。ドイツみたいに強い国でもねえ。これはここの話やけど。実は主人の友達が東京から来てね、その人の知ってる人の友達、何でも東京の偉い人やから、たしかな話らしいよ。ドイツがねえ。東京も凄いらしいねえ、空襲。ほんものの爆弾が降って来るんやから。勿論、ほんものばかりやけどね、ほれ、焼夷弾やなく、ほんもの爆弾。パケツやハタキでは手が出んと。それが一尺毎に降って来てはもうあかんわねえ。空襲のたびに大勢死ぬって話やよ。なら、お願いしますよ。パケツも持ってね。今の話ではあまり役に立たんらしいけど。(低く笑って去る)

清国神社に祭られるんだよ。日本人としてね。

康子 そんな……。

河村 いや、冗談さ。

間

康子 ……倉地さん、倉地さん頼りにして来たんだけど、結局、土壇場に来ればほうり出されてしまうのね。

河村 それは、どういう意味なんだ。(起きあがって) それはいったいどういう意味なんだ。

康子 ……

玄關に朴又貞現れる。蓬髪、やつれた顔に目だけが光っている。ボロ布をまとっている。

朴 コメン下さい。

河村、康子の後から本能的に玄關へ出て来る。朴の言葉は全部朝鮮ナマリである。

河村 どなたですか。

朴 御存じでしょう。朴又貞です。朝鮮人労働者の。

河村 何の用ですか。

朴 一寸、話があるんです。

河村 別に聞くことはない警です。

朴 私の方に、用があるんです。

河村 何も会う理由はありません。帰って下さい。

朴 理由があります。第一に、あなたは私と同じ朝鮮人だ。第二に、こんな姿をしている、あなたと同じ会社で仕事しているんです。第三に、あなたは、私達に対する食糧その他の配給の係にあたってている警です。

河村 もし、そういう理由があるとしても、会社で会って下さい。ちゃんとした手続きをした上で。

朴 いや、会社では会う手続きなんてできませんよ。ということは、会えないということなんだ。

河村 それに、警戒警報のでる時に宿舍から、出たら逮捕されることは知ってるんですよ。

朴 知ってます。こつそりぬけて来まし

康子 (優しく) 辛いでしようけど、行かないでね。

河村 うん。(自嘲的に) 軍属か。死んだら

た。しかし、こんな所で言い合っている
と、かえって危険ですよ。あなたにとつて
も。

河村 君は、脅迫するのさ。

朴 (笑いを浮べ、落着いた語調で) 脅迫
かどうかは、あなたの心のもちようだ。朝
鮮人同胞であれば、これが脅迫になるはず
がない。

河村 ……
朴 いずれにしても、私の話を聞いて貰
いたい。

河村 ……じゃ、時間をきってですよ。十分
間だけ。

朴 十分間、まあ、いいでしょう。

河村、玄関の鍵をかけ、朴を居間に通
す。汗と油の滲んだ、破れた服。乞食か
囚人のような姿である。腹子、恐怖の眼
で朴を見、部屋の間じつと座ってい
る。彼はそれを気にもせず上る。

朴 長いこと、二人だけで会う機会を待っ
てました。

河村 ……
朴 あなたは、出身は何処ですか。

河村 そんなこと、君に関係したことじゃな
い。

朴 そうでしょうか。同胞が、異国の地で
お互に苦しんでいる時、出身地を聞くのは
当然だと思うんですがね。

河村 ……それで…君は、いったい何しに
来たんだ。

朴 じゃ、話に入りますが、朝鮮人同志が
話し合っているのだということを、忘れな
いで下さい。

河村 ……
朴 あなたは、いくら給料貰ってます？

河村 (激しく) そんなこと、何の関係があ
るんだ。

朴 関係がある。が、まあ、いいでしょ
う。今日来たのは、我々の利益を守ってく
れるとしたら、今の所、同胞であるあなた
以外にないと思っただけですよ。いろいろ
考えてみたが、ストライキを起したって、
今の所犠牲を出すだけで、勝てる条件はあ
りそうにないしね。あなたに頼む以外ない
んだ。

河村 そのことなら、私に期待してもらって
もだめだ。私には、何の権利もないから。
朴 そりゃ、わかってる。しかし、毎日の

食糧は確かにピンハネされてる筈だ。勿
論、あなたが着服してるとは思っ
てないが。

河村 そんなこと、できるはずがないじゃな
いか。誰であろうと。

朴 いや、私だって、それ位のこと調べる
能力はもっています。…あなたは大学で
一年先輩でしたね、私は中退したが。あな
たは、あの頃から我々同胞をよせつけな
かった。

河村 ……
朴 当然の権利を回復してほしいというだ
けなんだ。日本人と差別されていることは
わかっている。あなたの力で日本人と同等
にしてもらおうとは思っちゃいない。差別
されてながら、その上日本人にピンハネさ
れちゃ、我々は生きて行けないということ
です。

河村 僕だって、最大限の努力はしてるん
だ。自分のできる範囲での努力は。
朴 それも認めますよ。千島では、ずい分
ひどい目に会ってるから。あなたの努力に
は感謝してます。しかしね、千島で受けた
敗北は全くドレイだった。栄養失調になっ
たり、叩き殺されたりで十二人も死んだん
だ。

河村 (思わす) 僕だって、職場で苦しんで
るんだ。
朴 やはり、日本人になりきれないんです
よ。

だ、我々の同胞が。いずれにしても、残っ
たのも残れきってるんだ。今も五人ねつ
ているが、恢復の見込みなしだ。今のう
ちに、何とかしないと、千島での破れが出
て、次々と倒れるものが出て来そうなん
だ。この際、同胞として、無理な所に無理
を重ねてくれませんか。

河村 ……

朴 要求はここにかいてある。(紙をだ
す) 一つ、十時間以上の労働はさせないこ
と。二つ、日本人同様、労務加配米をブラ
スして三合五勺の穀類を完全支給するこ
と。三つ、栄養失調者、及び病人は即時入
院治療すること。これを軍監督官並びに所
長に要求する。それをあなたは内部から側
面的に援助してもらいたい。われわれも犠
牲はだしたくない。何とかあなたの力が欲
しいんだ。

河村 ……
朴 日本の帝国主義も最終の段階に来てる
んだですよ。祖国朝鮮の独立も間近かなん
だ。何とかして一人でも多くの同胞を、そ
の独立の日まで生き伸びさせなけりゃなら
ん。これは義務ですよ、朝鮮人として。ど
うなんですか。

河村 ……
朴 帰ります。われわれも犠牲を少なくし
たい。あなたが内部から影響力を發揮して
くれるかどうかにかかってるんだ。二・三
日考えて下さい。また来ます。同胞として

河村 ……
朴 帰ります。われわれも犠牲を少なくし
たい。あなたが内部から影響力を發揮して
くれるかどうかにかかってるんだ。二・三
日考えて下さい。また来ます。同胞として

現場の同胞の苦しみだけは忘れな
いで下さい。

河村 (思わす) 僕だって、職場で苦しんで
るんだ。
朴 やはり、日本人になりきれないんです
よ。

河村 君、君は。
朴 河村さん、ただ、お互いに民族の誇り
だけは忘れないでいましょう。また。

朴は去る。河村身じろぎもしない。外で
和夫のケンカする声。しばらくして泣き
喚く声がある。腹子はととび出してゆ
く。外で腹子の声「和夫、やめなさい、
和夫」。「朝鮮坊、朝鮮坊」とはや
す声。「やめて、あなたたちもやめ
て。頼むからやめて頂だい」という腹子
の声が交錯する。

河村、決意をこめて設営隊の申込書に署名、捺印する。しばらくじつと見つめて
いるが立ち上って出て行く。
腹子泣いている和夫をつれて入って
くる。

腹子 相手になっちゃだめ、相手になつら

や。辛抱してね、辛抱して。辛抱しなくちゃいけないの。(和夫を抱きしめている)

突如、空襲警報のサイレン、ややあって「空襲警報発令ノ、空襲警報発令ノ、電気を消して下さい。電気を消して下さい。河村さん、河村さん、灯りがもれてますよ。電気を消して下さいノ」

男 何やとるノ 電気を消さんかノ 電気を

土足のまま上り電気を消す。

男 空襲警報になったらすぐ消すんだノ

警防団員出てゆく。暗闇の中で康子は和夫を抱きしめたまま。

幕

3

敗戦後十数年の朝鮮部落。朝鮮動乱もすぎ、帰国運動が実を結び、帰国が開始されている。一方朴軍事政権が韓国に成立し、南北の統一は全く閉ざされた一九六〇年代である。

舞台中央に康子の経営するドブ屋。やや下手寄に六畳の間。その前(観客席側)が土間になり、裏口と店に通じている。下手の裏口には低い扉がはき、ガラケタが積上げてある。ドブを仕込む瓶がある。下手、上手に同じような汚い家が続く。

「一つ出たホイのヨサホイのホイホイ」の歌が大きく聞える中で開幕。四人の自由労働者(ニコヨン)が飲み、歌っている。康子は店で相手をしている。鉄道の近づくらしく、度々轟音と共に列車が通り、客車の時には、その灯りが

断絶してあたりを照らす。

康子 下品な歌ねえ、もう少し上品な歌うたつたら。

山野 上品な歌？ どんな歌、うたえいうんや。

李 (声色をつくり) 兎追いし、かの川……

鈴木 馬鹿 川じゃない山や。

李 (みんな笑う)

康子 だいたい一人娘ちうのはねえ、あんたらのように娘といっしょに仕事もできん、モチもせん者がひがんで刺った歌や。

老婆 遅かったなあ、こんな婆といっしょで。

(みんな笑う)

山野 何いう、俺んたニコヨンだけやないぞ。いつか川の畔の料亭に行った時。

康子 料亭？ あんたが料亭。

山野 いや、その表まで行つたんや。そこで県庁のお役人が歌つてやがったぞ。ほれ、俺んたが交渉に行く時、どいばとる奴。

李 今村か。

山野 そうや、そうや。今村。真赤な顔して

芸者抱いて。芸者の首へ口もつてきやがった。

鈴木 うん。

山野 そしたらな、(身をくねらせ)「いやだわ、イーさまン」とこきやがるんや。

鈴木 その芸者、別嬪か。

老婆 そんなこと聞いたって、お前に何の関係もないやないか。

鈴木 いや、ものは参考、参考のため。

老婆 そらきまっとるとよ、こんな男から見りや観音さまみたいなんや。

鈴木 (奇声で) いやだわ、イーさまン。

山野 (抱きつかれて) おいおい、おかみ、一言でいいからいったってくれ。

鈴木 そう、おかみの首に接吻してやるから「あら、いやだわ、すーさまン」って。

康子 何を寝言いつとるの。

鈴木 あかん、ムードの出んこと、ドブ屋のおかみじゃなあ。

老婆 わしんとこへなんで来んの。わしんとこへ。いったるよ、すーさまン。ねえ、抱いて。

鈴木 ヒエーッ、助けて。(大げさに逃げて廻る)

河村の母、養春仙が薪かきで入ってくる。

康子 (大きな声で) 裏から入らなあかんやないの。

姜 (大きな声で) ああ？

李 (大きな声で) いいよ。トブ屋に裏も表もあるか。なあ、婆さん。夜まで薪ろひいか。

姜 ああ？

李 (さらに大きく) 夜まで薪ひろいか。

姜 ああ、もったいないで。

康子 早く裏へもつていくの。

姜 あのね、この頃つんば。何も聞えな

い。

李 つんばは長生きするらうから。

姜 ああ？

李 つんばは長生きする、長生き。

姜 長生き？ ああしたくない。コロリとボクリ死にたい。

李 コロリとボクリ。そんなうまい調子にいかんわい。

康子 もういいから。

姜 長生きしてもろくなことなく。これ以上苦労いらん。けど、朝鮮へ帰って死にた

いよ。朴さん朝鮮へ帰れるというたよ。

李 朝鮮帰ってボクリとなあ、さあ早く奥へ行け、おかみにらんでるよ。

姜 この頃いつにもらむ。早く死にたい。(奥へ去る)

老婆 コロリ、ボクリ死にたいか、ほんとだよ。ボクリ死ねたらねえ。

姜 (また出て来て) 朴さん朝鮮へ帰ってもくえるいつたよ。李さん。

李 あー、くえる、くえる。(みんな笑う)

養春仙、裏へ行く。裏路では和夫と富枝が話合っている。

富枝 朴さんねえ、和夫さんのことすごく気にしてるの。お母さんの気持もわかるし、お母さんやお父さん愛えるには、和夫さんが一番しっかりしないといかんって。

和夫 余計なお世話だよ。

富枝 ……強がりじゃなく、ほんとにそう思ってるの。

和夫 ……

富枝 この頃何か変わったみたい。青年同盟の集りにも来なくなつたし。

和夫 面白くないもの、帰国の話ばかり

で。帰国なんてねえ、したいものがしやいいだよ。

富枝 そんなもんじゃないわ。帰国って民族的な主体を回復するかどうかの大事業なのよ。祖国に未来をかけるかどうかなんだから、和夫さんだって、この日本に何の望みもないんでしょ。

和夫 ない。といって、朝鮮にももってやしないよ。

富枝 それが強がりというの。いや、ニヒルよ、ニヒルそのものだよ。日本じや朝鮮人のできるまともな仕事って何一つないというこども承知のくせに……。うちのようなパチンコ屋やって、そりゃ小金は入るわ。けど、ちつとも跨れる仕事やないの。恥しいの朝鮮人の仕事はどんな仕事でも恥しいのよ。日本人の嫌がる仕事しかないもの。いや、やれないもの。……弁護士の娘やったら、いや、下ッ端役人の娘でもいい、そんな夢をなんと見たことか。

和夫 ……

富枝 学校で日本人の友達が生先生になりたいたか、ステュワデスになりたいとか、銀行員になりたいとか話合つとる時、和夫さん、どんな気持ちでさくの。

山野 ムーン、丁度このオヤジみたいやなあ。今日どこへ行った。

康子 裏におるやろ。仕事さがしに行く、仕事さがしに行くって昼は出てくんやけど。何やつとるしらんが。

テレビの音、外人タレントのたどたどしい日本語である。

李 なんや、それ、アメ公やないか。(ス イッチを切る)あー胸くそ悪い。

山野 アメ公か何やわからんぞ。

李 ああ、アメ公や、ああいう奴はみんなアメ公や。第一、俺ら朝鮮人同胞を一边でもラヂオやテレビに出したことあるか。日本人の他にでてくる奴はみんなアメ公や。

鈴木 金田や張本がいるやないか。

李 ありや別だよ。ニッポンノミナサン、コキゲンヨウ、アメ公がそういとなあ、日本人はニコニコしよるんじや。うれしそ

山野 えろう興奮するなあ、そうか、コキゲンヨウか。

李 だが、俺達がコエン・コエンいつてみる、馬鹿に聞えるんだ。同じ不正義な日本

和夫 ……

富枝 私はとてもその場におれない。……日本にいる以上、私たちの子供にも、そういう思いをさせにやならんよ。そうやないの。

和夫 ……

富枝 和夫さん、なぜ、この頃強がりというの。前はこんなことなかったもの。

和夫 ……

富枝 私ねえ、朴さんに話したの、できたら和夫さんと帰りたいと思ってるって。

和夫 ……

富枝 帰国して向うの大学へ入り、教師になりたい。和夫さんも大学へ入りたいんでしょ。

和夫 ……

富枝 もし、そう腹きめてくれたらねえ、父に頼んで帰国のはばしてもいい、そう思ってるの。

和夫 ……

富枝 うぬばれちやいかんよ。

和夫 ……?

和夫 ……隣の君子に、私が帰国しちまうと、俺がだめになるいったそうやが、冗談

語がアメ公がいうとスガガしく声えて、俺たち朝鮮人がいうと馬鹿に聞えるのはどういうことだ。

山野 なるほど、たしかにそうや。「お前、朝鮮人に似とるなあ」といわれたら、たいていの奴は怒るわな。それが「アメリカ人に似とる」といったら、「それほどでもないよ」ってニヤニヤする奴が多いから。

李 それよ、それ奴隷根性よ。お前たち、朝鮮語知らんが、この前朴さんに聞いた。日本語と文法同じなんだぞ、婆さん、文法

ってわからんやろが。

老婆 何いう。文の法やないか。お前ら婆さん婆さんって馬鹿にするけどなあ、こんでも高等小学校出とるんやで。

李 高等小学校、なかなか学あるなあ。

老婆 当り前よ。

李 その文の法でだ。何とあったかね、それ、あの何とかいうのあるじやないか。なあ、婆さん。

老婆 知らんよ、なんとかいうもんは、高等小学校じゃ習わなんだ。

李 たとえばやな(・印朝鮮語で)「ドブを一杯くれ」いうのは日本語で「ドブを一杯くれ」いうことやが、くれとくれは一番下

も休み休みにしてくれ。俺が富ちゃん抱いたのはなあ、ただ、女抱きたかったからだけなんや。なんやったら今でも抱いたろうか。

富枝 (頬をびしゃり叩き)弱虫ノ 和夫さんの意気地なし!

富枝 走り去る。店で笑いが起きる。列車が通過する。和夫しばらくして去る。

鈴木 おい、おかみ、このテレビ鳴るけえ。

康子 鳴るよ。

鈴木 (スイッチをひねる)おい、おれな、カラー・テレビちう奴見たが、お前、天然色やぞ。

李 当り前やないか。天然色やでカラー・テレビというんやないか。

鈴木 お前、偉そうなこというが、見たことあるんか。俺写つとるのを見たんやぞ。不思議なもんやなあ、天然色やぞ。もうこうなると活動写真はだめやな。

李 ちつとも写らんやないか、このテレビ。

康子 ちよつとゆつくりしとるの。そりゃ肩屋でわけてまった奴ちやで。

につく、こら世界で日本語と朝鮮語だけや。うん、動詞、動詞。英語はなあ、くれ、ドブ、一杯となるんや。こら中国語も一しよや、くれ、ドブ、一杯。

老婆 お前こそ、なかなか学あるやないか。ニコヨンにしとくのもつたないが。

李 それだけ、朝鮮と日本近いたよ、それを朝鮮人バカにして、アメ公に生れ変りたい奴ばっかりや。日本人はアジア人だぞ。

山野 そう興奮するな、ま、その中に、日本も目覚める。

李 目覚めん。戦前とちつとも変ってない。

山野 目覚めん。

李 目覚めん。

山野 えろう、自信もつていうなあ……。

李 自信もつていう。

康子 変ってないかも知れんね。私も唐変木と結婚したばかりに苦勞に苦勞重ねたもん。占つてもらったり、新興宗教に入ったり、結局ドブ屋になり下つちやつただけね。

奥の間にいた河村妻へ出て行く。

李 どんな朝鮮人でも、朝鮮人はみんな苦
勞しとるよ。苦勞してない朝鮮人いない。
俺なんか、くさった残飯を拾って、くさっ
た残飯よ、それを洗って乾してね。それか
ら炊って食べたんよ。

老婆 洗って、そりやええ考えや。
李 ええ考えなら婆さんやってみたい。いざ
となつたら高等小学校でもやれんぞ。
康子 ま、李さんいいがね、ただね。どんな
国とも対等にならないかん。

李 ほんとは、対等よ、平等よ。
山野 おかみ、もう一杯くれよ。李さんにあ
ふられて酔がさめちゃった。こちららは高
等小学校やしね。
老婆 だつてれつきとした高等小学校出てる
んだよ。
山野 わかった、わかった。

村松 入ってくる。
村松 ええと、河村さんの。(康子を見て)
やっぱり奥さん。
山野 奥さん？(康子をびくりして見る)
老婆 どなたさまで。

村松 私ですよ。わからんかなあ、村松で
す、元崎建設の。
康子 ああ、村松さん。こんな、まあ、どう
しましょう。恥しい。
村松 いやいやいや、いいですよ、しばらく
ですけどお交りなくて。

康子 と、とんでもない、この有様で。
村松 いやいやいや、健康なら結構ですよ。そり
やいいが、河村君いますか。
康子 はい、と思えますが、ちよつと。(奥
へ入るが、いない)あれ。どこへ行ったん
やろ。

康子、裏へ出て路地をさがし
康子 お前さん、ちよつと。村松さん、ほれ
元崎建設の。
河村 村松さん、そうか。
康子 あんた、よんだの。
河村 いや、よんだわけじゃないけど。(家
に入り、店でまっている村松に)やあ、村
松さん。

村松 こつちへ用があつたからね、さがした
よ。
河村 こんな所じゃ。

村松 いや、いいいい。
河村 じゃ奥でも。
康子 どこか、ねえ、あんた。汚いから。
村松 いや、いいですよ。奥さん、じゃ(奥
へ入る)かまわんで下さいよ。お店の方が
忙しいんでしょ。

康子 いいい、別にお客のことはいいんです
が。
山野 おいおいおい、(笑い)ちがいにえ。
康子 どうしましょう、ほんとに、恥しいよ
うな所で。

村松 何年ぶりだ。十数年たつねえ。
康子 会社の方じゃ、御立派に。
村松 いやいや、悪い奴ほどよく眠るとい
う奴かしらんが、いや、戦争中は河村君にい
ろいろ迷惑かけたがねえ、おかげで。自地
常務とも、今や常務でねえ、いずれ社長と
いう話があるなあ。あの頃とらがつてこの
頃は可愛がつてくれてねえ。こういう仕事
は河村君、まじめだけじゃだめだからね。
(へんな笑い)奥さん、かまわんで下さ
い。河村君にちよつと話があるだけだか
ら。

康子 そうですか、じゃ。(店へ去る)
村松 そりやそうと自地常務に手紙くれたぞ

うだねえ。

河村 はあ。
村松 それでねえ、仕事はないことないから
話してみたらということになったんだよ。
河村 ほ、ほんとですか。

和夫妻へやってきてふと二人の話に聞き
入る

村松 そりや、常務は君を可愛つてたからね
え、気にしてるんだらう。

河村 それで、どんな。
村松 実はねえ。うちは今地下鉄にも手だし
てるんだがね。

河村 地下鉄？ 勉強しなおさなや。
村松 いや、それでね、大阪も地下鉄がぐつ
と増えたから、保線の仕事もふえてね。保
線を引受ける会社をどうしてもつくらな
いかんことになったんだよ。それでね、市
の交通局から頼まれて、自地常務が。それ
で、その幹部にあんたを迎えたらどうだと
いうんだ。

河村 といいますと、また、技術屋としてで
なく。
村松 ま、保線だからね、保線といっても

ね、昼やれないんだよ。地下だから昼も夜
もないが、電車が通らなくなる十二時すぎ
から朝の五時までの仕事なんだよ。
河村 ……
村松 そりや、砂ほこりが立つし、地下だか
ら耳がががが、大へんなんだよ。だから
ねえ金にはなるが、なかなかね。

河村 ……
村松 それで、樂つてくれる人はどうしても
韓国系の人とか、未解放部落の人が多くな
るんだなあ。

河村 ……
村松 それを取しまつて欲しいと思つてね。
河村 ……
村松 どうだね。
河村 ……
村松 いや、来てもらえばありがたいと思つ
ただけだよ。
河村 ……
村松 収入もいいんだ、いや僕らよりいいか
も知れん。そういっちゃ悪いがねえ、こん
な仕事奥さんにさせなくてもすむんだよ。
それにねえ、僕ら戦時中勤務の仕事やつて
嫌な思いもあるが、戦争中のような軍が強

制的に狩りだした時とは、てんでちがうん
だから、何しろ民主主義だからね、正当な
日当払つて。
河村 いや、そうじゃなく、私、仕事したい
んです。私の技術を生かせる。

村松 技術？(大きく笑う) そりや無理だ
よ。あんた学校出てるかも知れんが、今
時。
河村 だから、下働きでもいい、いや、補化
してもいいと思つてるんです。

村松 補化。
河村 仕事さえさせていただければ、どんな
仕事でもいいんです。自地さんにもう一度
お願いしてみして下さい。お願いします。
村松 わからんねえ、朝鮮人が朝鮮人を使う
仕事はどうして嫌なんだろうねえ、しかし
ねえ。あんたも考えにやいかんよ。補化し
たからつて、すぐ社会的に通用するとは限
らんしね。
和夫 裏から部屋へ入る。

和夫 おい、お前何者や。何を考えよとい
うんや。身の程考えようんか？
河村 和、和夫！

村松 ？……何、何だ急に。失礼な。

和夫 失礼、何ゆかす？（首筋をつかみ）失

礼なのは貴様じゃぞ？ ぶっ殺したるか？

河村 和夫、やめ、やめんか？ ころし

和夫 出よ！ 表へ出よ！ 地下鉄の保線は

朝鮮人やと。もう一べんほざいてみる？

村松 何、何するんだ。

和夫 もう一べんほざいてみくされ！ 馬鹿

者！ お前らなあ、朝鮮人をくいにしして

もうけやがるが、そういう仕事しかない朝

鮮人の気持がわかるか？ おい！

康子 和夫、何するの。ちよっと、ちよっと

止めてよ！

和夫 うるさい！ 表へ出よってたら、出

よ！

李 やれ、やれ！

康子 何いうの？ 頼む、止めて！

山野 （わけて入り）やめ、やめよ！

村松 何ちう失礼な！

村松ほうほうの態で逃げる。

和夫 逃げるな！ 朝鮮人くいのにしやが

ったら承知せんぞ！ 馬鹿野郎！

康子 ……和夫、何するの、お前。お客さん

ら、お前も変ったよなんて、当り前じゃな

いの。ドブ屋にまで下り下って上品にして

られるか、ねえ。

鈴木 そりや、相手が相手やもんなあ。

康子 なまじ大学出てるのがよくないのよ。

技術、技術って。

鈴木 大学出か、大学出やったら朝鮮でも朝

鮮でも帰ったがいいぞ。

李 私もう思うわ。

鈴木 そりやと、クーデターをやった朴

正熙って日本の士官学校出とる秀才やっ

なあ。

に向って。

山野 一たい、どうしたんや。これ。

和夫 お前らには関係ないわい。（走り去

る）

康子 何があったの。

河村 ……いや。

李 朝鮮人馬鹿にしたんだらう。

河村 ……。

李 あれ、どういう男なんだ。

山野 おかみのこと奥さんいったよ。奥さ

ん。

河村 ……。（去る）

康子 ……昔いた会社の人。びっくりした。

就職でも頼んだんやろか。

鈴木 ちよっと、この辺には似つかわん男や

よな。

老婆 ドブ屋にはな。

康子 元崎建設ってね、戦争中働いてたの。

山野 誰が？

康子 ひろん、うちの人よ。

山野 へえ、あのオヤジが。元崎建設って大

手も大手。へえ、どうしてやめたの。今頃

勤めとるなら。

李 やめたんじやない。やめさせられたん

だよ、きつと。

山野戻ってくる。

鈴木 婆さんは。

山野 うん、まだやつとる。雨だれみたいに

チョコピン、チョコピンと、まだ音しとったで

鈴木 なあ筋肉がゆるんごらんやなあ。

李 けど、オヤジさんて、俺たちとつきあ

わんなあ。

康子 絶対に。うちの人も気の弱い岡本中尉

の口じやない。（笑う）総連の朴さん、総

連へ入って度々くるけど、逃げてばっか

康子 そうよ、そしてね、飛行場建設のため

の南方設営隊に強制的に志願させられ、終

戦でチョン。

李 南方設営隊。よかったよ。南方設営隊

で朝鮮人どだけ死んだか。

鈴木 高等小学校。まだ飲むんかい。

老婆 まだ、お前さんらには負けへんぞ。ま

ず、出すもん出してな。（外へ出る）

山野 なるほど、飲みや出るのは当り前だ。

俺も連れしょんと行くか（つづいて出る）

老婆 （外で）お前さんはそこでするんじや

ぞ。婆さでも女じゃでな。

山野は電柱の所で用をたし、老婆は路地

へ入って行く。

李 南方設営隊、とこの島へ行った。

康子 もう行く船もないんで、九州で穴掘り

してたらしいの。

李 よかった、よかった。

康子 けど、戦争終ったら気がぬけたような

ものなの。何仕事しても長続きしんの。仕

方がないからドブ屋でもやらにやね。それ

が心の中じゃ軽蔑してるの。私やって、

好きで誰か。それをねえ、あの唐黍木った

ピン。

老婆 やめやめやめ。ドブがまずなる。

李 日本人か。

康子 李さん、私、和夫を日本で一人前にし

たいの。

李 そりや、おかみさんの復讐か。

康子 そんな大げさなもんじやないけど、意

地みたいなんね。だからね、朴さんなん

か、和夫をいろんな集りにさそつとるらし

いが、朴さんにもいつといて、やめてくれ

って。……私ねえ、あの子のためだけよ、

樹くいしばって生きてるの。

康子 どうしたの。

金 税務所動いてるって。

山野 ガサか、おい、ほんとかい。

金 総連からいつて来たよ。

康子 (奥へ行き) 和夫、どこへいったん

やろ。(店へもどり、客に) あんたら、ち

よっとたのむ。

鈴木 何を、税務所とケンカか。

康子 そんなことじゃないよ。

金 瓶かくすんだよ。瓶。

山野 瓶、なるほど、よし来た。どこへかく

すんや。

金 押入れの床下だよ。

三人 瓶を所持しようとする。

山野 こりや、持つとこねえなあ。

李 縄、縄。あそこだ。すべらんように下

から廻せよ。

山野 あわてるな、ぶちあげたら、元も子も

ないぞ。

康子 押入れの布団をだし、床板をはす

す。 君子 小母さん、和夫君は。

康子 おらん、……そりやそうと君ちゃん。

和夫、この頃とくにいらついとるというよ

うなことない。

君子 ……?

康子 いつかケンカしたんやと思うが、血流

して帰ってきたことがあるの、今日も急に

お客さんからんで。

君子 ……。

康子 相変らずパチンコ屋の何ちう娘やね。

君子 富ちゃん。

康子 会つとるんやろねえ。

君子 けど、和夫君同盟の集りにも来なくな

ったんで、富ちゃんだけやなくみんな心配

しとるんやが。

康子 私が出てもらいたくないから。

四人帰ってくる。

老婆 あの婆あ、がっちりしとるなあ、一杯

出すで頼むといつといて、片づけちまった

から、また今度にしてくれって。

鈴木 まんだ飲みたりんか。

老婆 飲みたいことないけど、一杯だすいっ

たで、ついてったんや。

山野 ついて来たって手伝わせんやないか。

老婆 蓋もったよ。わしや。(みんな笑う)

蓋でももったことはもったんやぞ。

李 (自分の井をさし出し) そんなに飲し

かったら、まんだ残つとる。

老婆 いや、もうええ、腹一杯やで。

山野 (康子に) あそこは変ったかくし場所

もつとるなあ。

康子 悪いけど、飲んだら早く帰ってね。賭

みこまれた時迷惑かけるといかんし。

鈴木 いやいや、俺たち守ってやるから。

山野 ポリ公と喧嘩するのも面白いぞ。

李 何いう、この頃はそんなもんじゃな

い。何十人ちう警察が来て、サーチライト

が昼間みたいに照らすんだ。そこへ私服と

税務署がのりこんで、戦争みたいなんんだ

ぞ。

鈴木 戦争、そりや俺一人くらいじゃ何とも

ならんなあ。

山野 じゃ、引揚げるか。高等小学校、さ

あ、帰るぞ。

老婆 あつ、帰るか。(康子に) あんだ、ホ

リ公なんかまけちやいかんよ。しがみつ

いたるんじや。

四人去る。康子。店をかたづけ、もう一

鈴木 なるほど、いい所があるなあ。

老婆 何を感心しとる。早よせんかい。

李 そっちもつてよ。

鈴木 重いぞ。ゆっくり。

三人で瓶を押入れに入れ、康子元通りに

する。 康子 和夫も唐桑木も何してるんやろう、こ

んな時に。

金 すまんね、それすんだら、こんどわし

んとこ、すまんね、わしんとこよ。

康子 行ってやってよ。悪いけど。

山野 ほ、とんだ手伝いさせらそるぞ、今夜

は。

金 一杯だすよ。一杯。河村さん、あわてる

ことないよ、まだ来ない。ゆっくりしてな

さい。いつも一時頃だから。

鈴木 なれたもんやなあ。(まねして) ゆっ

くりしてなさいか。

金玉順について出てゆく。列車の轟音、

友人の高君子が現れる。

君子 小母さん、和夫君は。

康子 おらん、……そりやそうと君ちゃん。

和夫、この頃とくにいらついとるというよ

うなことない。

君子 ……?

康子 いつかケンカしたんやと思うが、血流

して帰ってきたことがあるの、今日も急に

お客さんからんで。

君子 ……。

康子 相変らずパチンコ屋の何ちう娘やね。

君子 富ちゃん。

康子 会つとるんやろねえ。

君子 けど、和夫君同盟の集りにも来なくな

ったんで、富ちゃんだけやなくみんな心配

しとるんやが。

康子 私が出てもらいたくないから。

四人帰ってくる。

老婆 あの婆あ、がっちりしとるなあ、一杯

出すで頼むといつといて、片づけちまった

から、また今度にしてくれって。

鈴木 まんだ飲みたりんか。

老婆 飲みたいことないけど、一杯だすいっ

たで、ついてったんや。

山野 ついて来たって手伝わせんやないか。

鈴木 李さん、あんななあ、誰かに自転車か

りて、西の陸橋の南の信号見張ってくれん

か。機動隊が陸橋渡つたら、ここじゃな

と思うんだ。

金 わしんとこある。自転車あるよ。

李、急いで去る。康子は店に座りこんだ

ままじつと話を聞いている。

ままじつと話を聞いている。

鈴木 騒いでもだめだからね、絶対桃尻の

っちゃだめだよ。

女 大丈夫かね。

鈴木 わからんよ、徹底的にやられるかも知

れんし。ま、家に入つてくれよ。何とも

仕方がないから。

金 そんな馬鹿なことがあるか、あんだ総

連の幹部だろ。

鈴木 だから総連ではいつてるじゃないか。

ドブ屋ちう職業は、もう止めなくちゃいか

んで。

金 じゃ、どうして食うね。

部落の人々の「そうだ、そうだ」という

朴 だから、帰国の条件が整った者は帰国すべきなんだよ。戦争によって焼野原にされた祖国じゃ、同胞が今、一生懸命に再建のために働いてるんだよ。こんな所でドブ造るより、祖国の再建に参加しなくちゃならん義務が朝鮮人としてあるんじゃないか。(みんなガヤガヤいう)今日は、一応まかしてくれ、騒いでも無駄だから。隠しきれなかったら仕方ないんだ。

金 じゃ、黙って見てるだけか。

朴 騒いだら、かえって被害が多くなるだけなんだよ。だからねえ、総連じや話合つて被害を最小限に抑えようということにしたんだ。まだ来ないと思うから、落着いて家の中で待機しててくれよ。

「落着いて、馬鹿なことあるか」という声、なかなか去りがたいが、三々伍々去り始める。朴、康子の家へ入る。

朴 河村さん。ああ、いるんですか。

康子 ……

朴 始めてですね、ガサは。

康子 ……

朴 ある程度の被害は覚悟しなくちゃいけ

ないが、私たちがついていきますから、それほど心配することはないですよ。和夫君は。

康子 ……

朴 和夫君にもよって話したかったのですが。

康子 和夫を余り誘わないで下さい。

朴 え?

康子 和夫は私の子供です。朝鮮なんかへやりません。

朴 私は特別帰国なんかすすめてませんよ。しかし、奥さん、和夫君がもし、こりや仮定ですよ、仮定ですが帰るといいでしたら、奥さん、どうします。

康子 私?冗談じゃないですよ。第一、うちの人だって知る勇気はありませんよ。朝鮮人使つてピンハネした男が共産国へ行けるかって。

朴 思いすごしですよ。弱ったなあ、だから、一度ゆっくり河村さんと話合わなくちゃいけないと思つてたんです。そんな過ちは誰だってあるんですから。

康子 とんでもない。鬼門ですよ、あなたは。敗戦開きわに南方設営隊を志願したのも、あなたから逃げだしたかったからです。

朴 思いすごしですよ。弱ったなあ、だから、一度ゆっくり河村さんと話合わなくちゃいけないと思つてたんです。そんな過ちは誰だってあるんですから。

康子 とんでもない。鬼門ですよ、あなたは。敗戦開きわに南方設営隊を志願したのも、あなたから逃げだしたかったからです。

朴 思いすごしですよ。弱ったなあ、だから、一度ゆっくり河村さんと話合わなくちゃいけないと思つてたんです。そんな過ちは誰だってあるんですから。

康子 とんでもない。鬼門ですよ、あなたは。敗戦開きわに南方設営隊を志願したのも、あなたから逃げだしたかったからです。

から。

朴 ……そうですか、誠実なんです、あの人は。

康子 気が弱いですよ。お断りしときますけどねえ、あの人をどんだけ口説いても、私は行きませんから。私と和夫は……。

朴 あつ、和夫君。いや、実は君に会いたいと思つて。

和夫 ……

康子 ……

和夫 ……お母さん。俺、……ひよっとすると日本をあきらめるかもわからん。

康子 ……

朴 和夫君。

和夫 ……

康子 何いうの。お前の国はここだよ。お前ねえ、お前はねえ日本に生れ、日本に育つたんだよ。日本人やよ、れつきとした。

和夫 ……それがこの日本じゃ受け入れてくれんのだよ。

康子 だから、だから、一生懸命勉強して見返してやらないかんのやないか、そうやないの。

和夫 そんな甘いもんじゃやないよ。オヤジが

康子 ……そんな馬鹿なことが。

和夫 もう、やめよ。

康子 ……

和夫 日本ちう国は差別の好きな国なんや。朝鮮人や未解放部落を差別するだけやない。もうこの頃は高校から大へんな差別や。順番、順番差別して下を見下ろしたいんや。戦後は民主主義になったそうやけど、不思議な民族やと思つわ。

康子 ……

和夫 ま、お母さん、大丈夫や、どつちにしてもお母さんから離れやせんから。

康子 ……

和夫 大学へ行かず働く。この体で働くよ。そんで、お母さんが恥しい思いをせんならんドブ屋は止めるんやね。ドブ屋までやって僕を大学までやって無駄なんやで。

一人の男がとんでくる。

来たノ 来たノ 来たゾノ

男 来たノ 来たノ 来たゾノ

自動車が止り、サーチライトが真昼の

いい例やないか。大学が、大学で得た知識がどこで生かされたの。オヤジの何十年という生涯のどこで生かされたの。さつきもねえ、最低辺の労働に朝鮮人を使うために、朝鮮人のオヤジを必要として話をもつて来たんだよ。技術屋としてのオヤジが必要なんじゃない。朝鮮人としてのオヤジが必要やったんや。さつきの男はねえ、そのために来たんや。わかつた。

康子 だが、お父さんたちが、お前もわたしも日本人だよ。

和夫 それがいいんや。それが甘いいんや。

朴 ま、やめとけ今夜は。たださえ、お母さんはいらいらしてらんだ。大事なことが、また、ゆっくり話そう。(康子に)心配でしょうが今夜は私たちができるだけのことはしますから。

金玉順入ってくる。

金 朴さん、本当にいいかね。わたし落着いて家におれないかね。みんなが家で相談してるから、ちよつと来て下さいよ。

金 私バケツ叩くからね。この部落中みんなバケツ叩いて。

朴 バケツ叩いても、抵抗しても、逮捕されたり被害が大きくなるばかりだから。(去る)

康子身動きもしない。

和夫 もし、日本に残るとしても俺も大学へ行かんよ。オヤジのように下手に期待をもたせる大学なんか。俺はこの体で生きるんや。……それにねえ、第一行く金がないよ。

康子 奨学金がもらえる。もらえない筈がない。

和夫 あり余つとるんやつたらね、とこころが、今の所欲しい奴ばっかや。そうなりや、当然差別されるやろ。

康子 差別、差別というがねえ、お前も私も、戸籍の上でも立派な日本人なんやよ。

和夫 日本人や、確かにね、日本人でも父なし子なんや俺は。どうして父なし子になつたか、奨学金を審査する偉い人にやわからせんよ。

康子 ……

和夫 ……

康子 ……

康子 ……

康子 ……

ように投射される。朴、その他の人も続々と表に出てくる。

和夫 お母さん、とうとう来たよ。

和夫外に出るが、康子身じろぎもしい。私服と税務署員あらわれる。裏からも数人入ってくる。

私服 さわいじゃいかんぞ、騒ぐと即座に公務執行妨害で逮捕するぞ。

朴 みんな騒ぐなよ。(私服に) 捜査令状をみせて下さい。

私服 朴さんか。

朴 今日は騒がないからね。器物を勝手に破損したり、持ち出したりしないで欲しいんだ。すべて僕が立ち会うからね。

その時、すでに裏から数人が康子の家へ上りこみ、調べまわっている。和夫とびこんで行く。

和夫 靴をぬいだらどうや、靴を。

税務署員無視して押入れを開け、いろいろ

でいたんだよ。

金玉順、別の私服に押し倒され、康子の家の戸口にぶつかると。

朴 何するんだ。(泣きわめいている金を抱きかかえる)

私服 なめるなよ、どこへかくしたんだ。都合のいい時は日本人面し、都合が悪くなる何を聞いても、朝鮮語でべらべら。人を馬鹿にするな。おい。どこへ隠したんかいえて。

路地の奥で「あった、あった、あったぞ」という声、罵声がとび散る。朴も金玉順もとびこんで行く。しばらくすると、サーチライトが消え、罵声や喚き声の中を自動車の音が消える。

康子 (つぶやくように) 都合のいい時は日本人。

裏口に河村、そっとのぞきこむ。

和夫 オヤジさんか。

ろなものを引きずりだす。

和夫 なぜ、そんな無茶なことするんや。係員 邪魔するな。

組みつく和夫、乱斗となる。朴が興奮して入ってきてとめる。

朴 (係員たちに) 止めんか、止めんか。立ち会おうといたろう。一方的に何だ、一方的に。

(入って来た私服に) 約束がらうよ。騒がせるのはあんたたちじゃないか。

私服 (とり合わず、税務署員に) よく調べ下さい。

朴 まて。まてくれよ。

和夫 畜生。馬鹿にするな。

和夫組みつく、私服に投げとばされる。朴、とめに入る。表でも同じような争いが起っている。

私服 朴、騒ぐと逮捕するぞ。

朴 冗談じゃないよ、何もしてないのに。下へ降りたらどうだ、下へ。あんた、自分

河村 ……

和夫 やられたよ。……くそ。妻 朝鮮帰ろうよ、朝鮮。朴さん朝鮮帰れるいったよ。

列車の轟音

4

舞台は前幕と同じであるが、家具は全くなく、リュックやトランクが転っている。路地の奥の金玉順の家では帰国祝賀会をやっているらしく、にぎやかな歓声。

康子 お祖母ちゃん、また出て行ったわ。工事場へ木拾いに。

河村 行先がわかってるからいいさ。

康子 今日ほもうやめたらといたたら、誰も拾う者がいないからもったいないって。

河村 昨夜は眠れなかったっていった。嬉しんだよ。

康子 嬉しいんだらうねえ。……私たちが結婚

の家へ靴のまま上るか。朝鮮人の家だったら土足で上っていいのか。おい、どうなんだ。役人は何やってもいいのか。話し合ったらどうなんだ。話し合ったら。

その間に係員は床はずし、ドブ版を叩きわり、一部を証拠物件として持ち出す。康子は身動きもしない。

係員 (私服に) すみました。(康子に) あんた、この主人だな。ここに署名して、(書類を見て) なんや、あんた日本人か。

康子 ……

係員 日本人であらう。そうか、捺印でいいから。この書類をもってねえ十七日にね、南税務署へ出頭して欲しい。

路地で。

女 (・印刷朝鮮語) 朴さん、来てくれよ。

女 どうしたんだ。

女 金玉順が。

朴 (私服に) どうして一方的に、こちらはねえ、税務署の調査は受け入れられるつもり

して、明後日で丸二十二年よ。……よく、ふんざりがついたわねえ、あんた。

河村 お前こそ。ほんとにすまんと思ってる。

康子 ううん。和夫にいわせるとねえ、私たち二人は、祖国を発見したんやて。(笑う) 祖国なんて言葉はじめて。……それはいいが、和夫、向うで大学へやってもらえるかしら。

河村 力さえありや。

康子 試験課目が心配なの。……けど、あんたこそ、これからは役に立つかも知れんわよ。どう、そう思うでしょう。

河村 (笑いながら) だいたい。……康子。俺なあ、実はお前がこんな明るいとは考えてなかったよ。

康子 (笑う) 苦労がこれで終ると思うと、誰でもほっとするもんやない。向うじゃ、経済的に苦しいという話やけど、私、精神的に辛くなかったら、がんばれると思うの。……今までの辛き考えたら……。

列車の轟音。

康子 (明るく) けど、おせいねえ、お父さ

んやお母さん。……やはり、来んやろか。
河村 そんなことないと思うよ。ちゃんと呼
定は知らせてあるんだし。
康子 母だけはきつと来てくれると思うんや
けど。娘が遠い遠い朝鮮へ行ってしまうん
やもの。

河村 ……。

康子 昔、家放りされた時、母が風呂敷か
ぶって、夜、こっそり駅まで送ってくれた
こと知つてる。

河村 うん。聞いた。

康子 あれからやもの、母も年とつたと思
わ。

河村 お会いしたら、俺どういつて挨拶した
ら。

康子 何いつとるの。堂々と夫ですいやいい
やないの。

和夫と朝鮮服を着飾った富枝、君子が現
れる。

富枝 小母さん、あのね、お土産、私がお母
さんと相談して作ったの、あとで見せるけ
ど。今見ちゃいやよ。

和夫 僕にもいわんのだよ。

君子 とつてもいいもの。
康子 お土産？ 何かしらないけど、すみま
せん。

富枝、君子去る。入れかわりに金玉順入
つてくる。

金 ちよつと、李さんがおかみおかみいっ
てるで。

康子 もう十分。ほんとにお世話になつちや
て、最後の最後までね。

金 いやいや、しかし、羨しい、羨しいな
あ。

康子 向うで大丈夫？
金 大丈夫よ。何も心配ない、わしもつい
て行きたいよ。

康子 じゃ、行つたら。小母さんがいりや私
大船のつたような気持やもの。

金 (黙って、首をふる)

康子 どうして。
金 わしなあ、息子韓国にいるだろう。朝
鮮民主主義共和国へは帰れない、帰つたら
もう韓国の息子に会えないもの。

康子 ……そう、そんなこといつてたわねえ
金 朝鮮はいつまでたつても運悪いよ、北

も南もない、朝鮮一つよ。わしなあ、奥さ
ん、いつも夢みるんよ、息子が日本へ密航
して来てつかまる。……息子苦労しとるい
う話よ。

康子 密航。
金 いくらでもある。十万円よ、十万。小
さい船の小さい部屋に何十人と閉じこめら
れて、二十時間も三十時間も。

河村 矛盾した話だよなあ。一方は帰国し一
方は密航してくるなんて。

金 朝鮮一つよ、一つにならにやいかんの
よ。そうすればこんな心配ない。

老婆、山野入つてくる。

老婆 間にあつたか。
康子 小母さん。わざわざすまんねえ。

老婆 なに、一杯につられてな。(笑う)

山野 もう、今日は仕事にならんよ。昼頃
から、おかみの祝賀会、おかみの祝賀会と
いつて。

金 今日のはわしんとこよ。わしんとこ。
老婆 ああ、そうそうドブ一杯借したるぞ。

金 もうドブないよ。堂々たる飲屋よ。ピ
ールある、酒ある。もつある、おでんあ

る。

李 (入つてきて) や、高等小学校、おそ
いぞ。誰かいない、誰かいないと思つた
ら、高等小学校がいなかったんだよ。

老婆 うまいこといつて、わしを誘惑する
な。

李 婆さん誘惑しても誰も怒らない、安全
だよ、安全。さあ、おかみ、もう、最後に
よ。時間ない。さあ、さあ。

康子 (河村に) あとで行くわ。

みんな路地の奥へ入つて行く。

和夫 俺、みてるから。
康子 ……

和夫 けど、お母さん、悪いけど諦めた方が
いいよ。

康子 お祖母ちゃんはまだ帰つてない。
和夫 さつき、隣へ行つたよ。

康子 和夫。
和夫 ……なに。

康子 向うへ行つたらね、お母さんを大事に
してよ。

和夫 やつぱり淋しい。日本から別れるの。
康子 そりゃ、そうよ。けどね、考えてみる

と友達つて誰もいないもん。日本人の友達
は和夫の方が多いかも知れない。私は一人
もないもん。

和夫 ……
康子 ほんとね、誰もいない。女学校時代の
友達が多勢いるんやけど、結婚してから一
人もつきあつていない。

和夫 ……
康子 いいからあつちへ行つてよ。あんたは
友達がいるんだから。

和夫 うん、じゃ(去りかけ)お母さん、期
待しない方がいいよ。(去る)

康子 ……(家に入る)

列車の轟音。隣では歓声。
私服あらわれる。

私服 今日のは、はでにやつてるねえ。
康子 ……

私服 小母さんもいよいよだね。けど、よ
く、踏切つたねえ。ま、女の人は順応性が
強いから、旦那について行くのは当り前か
も知れんが。

康子 ……
私服 けど、ドブ屋やつとるより気楽かも知

河村 康子(うながす)
康子 ええ。

踊りを中心に路地は人で一杯になる。

拍手、歓声、李の歌と太鼓、君子、富枝
の踊りがはじまる。

私服 じゃ、元気で(去る)
老婆 あれ、誰じゃ。
部落の女 警察。私服よ。
老婆 チェッ、最後の最後まで、塩まいたろ
か。

老婆 李さん。こんな芸もつてるとは知らんかったなあ。若いころはいいわい。
山野 婆さんでも、きれいな時があったか。

歌と踊りが終わった頃、朴入ってくる。

朴 やあ、おそくなってすみません。他廻ってたもんで。河村さん、とうとう来ましたね。

(握手する)

河村 ありがとうございます。

康子 お世話になりました。

金 朴さん来れんかと思つて心配してたよ。

和夫 あの、この人が朴又貞つて、総連の人だよ。高校時代の友達です、荷物もみんな休みなもんやから手伝つてくれました。

金 そうよ、この人に来て、びっくりしたよ。朝日友好よ、朝日友好。

朴 若い人はどんどん進んで行くから、ボヤボヤしとれないよ。(学生たちに)朴又貞です。みなさんの友情は祖国へ届つてからも、和夫君の胸になつかしく、いつまでも残ると思ひます。これからも手紙のやりとりをして。

和夫 朴さん、僕、名前を変えたんです。もう、今日から和夫じゃない。オヤジの名字は鄭というから、鄭生国としました。生は生きる。祖国に生きたい。鄭生国です。朝鮮語で鄭生国だ。

朴 鄭生国、おめでと。 (握手)

和夫 ありがとうございます。がんばります。

友人たちの握手攻めにあう。「おめでと」「がんばれよ」という言葉で拍手。

和夫 ありがとうございます。俺なあ、みんな知つとる通り、半日本人や。半分しか日本人やないんや。けど、半分じゃ日本人になれん。なぜ、生れて来たか呪いに呪つたこともある。俺、一時はぐれた。みんなも心配して忠告してくれた。俺やつてなあ、ぐれても、いらついても、自分が損するだけやという事はわかつとつた。わかつとつても、どうすることもできなんだんや。俺が帰国に踏切れなんだら、俺、自信もつていうが、今頃不良になつとつたと思う。不良になつただけやない。みんなからも見離されとるにちがいない。(友人の一

人一人に)お前からも、お前からも、あんたからも。いや、きれいなとやないんや。見離なす者はいい。見離なすだけや、しかし、見離された者はどうしたらいいんや。

一同 ……

和夫 開きなほる以外ないんやぞ。見離された白い腫に向つて、開きなほるて生きてく以外ないんや。そう思つたら……

一同 ……

部落の女 そうや、そういう点で日本人の母親は幸せや。白い腫で見やいいんだ。朝鮮人の母親はいつ子供が不良になるか、いつ不良になるか、毎日毎日脅えてくらしとる。わしの息子もやくぎになつた。誰がやくぎになりたい、誰がやくぎにしたい。朴さん、和夫のこの話、息子に聞かしたりたい。

い。

朴 わかつた、また、相談しよう。それだけ日本にいる朝鮮人はしつかりしないと駄目になるということや。一人の力で何とかなるというもんじゃやない。これをしつかりと叩きこまにや。(康子に)けど、この和夫君がそばにいてくれりや、全く心配いりませんよ。

康子 ありがとうございます。朴さんのおか

げです。

河村 いや、民族の誇りを忘れるなつて、昔いわれたことを今思ひだします。私こそ一人で何とかしようと思つて。

朴 いや、昔のことはやめましよう。私もいづれ帰国します。しかし、こんどは本当の先輩ですから。

河村 とんでもない。和夫に励まされてがんばるつもりです。

朴 富枝ちゃんとは和夫君と向うで競争だな。

富枝 大学出るまで結婚しないと誓めてるんです。

朴 こいつ。(笑う)

富枝 (康子に)小母さん、私の贈物があるんです。奥へ来て下さい。

康子 まあ、贈物だつて。

君子 誰も来らなだめよ。

富枝と君子 康子をつれて奥に入り、箱から黒の朝鮮婦人服を出す。

富枝 小母さん、これ着て行つて下さい。

康子 ……

富枝 母と相談してつくつたんです。

康子 ありがとうございます。朝鮮服つてはじめて。

君子 着換えて、みんな驚かしてやろ。ね。

康子 富枝ちゃん、君ちゃん、ありがとうございます。

金 康子、着換える。金玉順ドブ二升もつて入ってくる。

金 さあ、いよいよよきよならたね、一杯やろうと思つて、かくしといたんよ。これが最後のトブよ。上ずみの上等のトブよ。

老婆 もうトブないといつたじゃないか。

金 これが最後よ、これが最後。これで借金しよ。(老婆につく)これ最後のトブよ。もうトブつくらない、売らない。朴さんに叱られるから。(妻春仙に)婆さんも一杯。婆さん、今日も木拾いに行つたんだねえ。驚いたよ。僕の家へかついてくるじゃないか。もつたないから、これからも拾いに行けと。婆さん、もつたないなあ。

妻 もつたないよ、もつたない。

金 さあ、さあ、(学生に)あんたたち、トブの上ずみ飲んだことないだろ。うまいよ、ちよつと飲めないよ、なあ、李さん。

学生 いただきます。

金 奥さんは、肝心の奥さんは。

河村 もう来るよ。

富枝 もうすぐ、まつてて。(奥から出てきて)さあ、みんな腫つむつて。小母さんもつむるのよ。

金 わしもかね。

富枝 私がいっていうまでよ、いっていうまで。(奥へ)さあ、小母さん。

朝鮮服を着た康子。

富枝 さあ、開けていいわ。

一同 驚く、一瞬の後にわつと拍手。

和夫 (康子の手を握り)お袋さん、おめでと。富ちゃん、ありがとうございます。

富枝 小父さん。小母さん、よく似合うでしよう。

康子 ……(河村と視線があう。涙ぐんでい

る)

和夫 気がすすきりしたろう。

康子 (うなづき)すすきりした、何もかも。

金 奥さん、こりや結婚のやり直したよ。やあ、河村さん見い。照れた願して。さあ

さあ、一杯。

康子 すみません、いろいろお世話になりました。

金 トブの世話かね。(みんな笑う)

朴 さあ、もう時間がないから、李先生、乾杯といこう。

幸 じゃ、河村さん、おかみ、そして和夫君おめでとう。乾杯!

一同 おめでとうございます。(乾杯する)

河村 ありがとうございます。長い間お世話になりました。

金 さあ、みんな飲んだ。飲んだ。(学生に)キョッと行くの、キョッと、男じゃな

いか。トブの上すみよ、上等よ。

老婆 わし、さつきから泣けてなあ。おかみ、息子が夢もって生きる所が、わしら女にとつては死に場所やで。

康子 ありがとうございます。けど、小母さん、私、まだ四十やよ。

老婆 四十、そうか、そうか、今日三十くらいに見える。(笑う)いや、わしはな、親

にとつちや息子が生きがいやといいたかったんや。その中に朝鮮と日本が自由に往き来できるようになる。なつたら、わしお客さんになつて行くぞ。(大きく笑う)

康子 私、里帰り。

老婆 そうや、それまで生きとるで。

朴 さあ、そろそろ時間だな。

金 もう少しあるよ。もう少し。

電報配達が入ってくる。

配達 吉川康子さんってお宅ですか。電報です。(殺して去る)

康子、急いであけ、そのまま河村に渡す。

河村 エケヌ ココロカラコトクワイノル

ハハ……

朴 誰からですか。

河村 あれの母からです。来てくれるのをまつてたんですが。

和夫 お袋もこれでふんぎりがついたんだよ。さあ、行こうや。李先生、太鼓叩いて。

幸 よし。

河村 (朴に)すぐ、行きますから。

太鼓の音がひびき、みんな出かける。

河村 ひよつとすると、お母さん、もうお年だから。

康子 そんなことは、もうどちらでもいいの。やっぱり来れなかったのよ。お父さんが行かせなかったの。相変らず許してくれなかつたのよ。考えりや、気の毒な人だわ、お父さんって。……あの時からちっとも愛つてない。ちっとも。娘が愛した男が朝鮮人というだけで気狂いのようになつて。

照明が暗くなり、回想となる。

父の声 馬鹿者、日本人が朝鮮ヨボに汚されて、その上子供生むなんて。(物を投げ

る音、康子の悲鳴)

康子の声 何するの、何するのよ。(絶叫する)助けて、お母ちゃん。

母の声 やめとくれ、やめとくれって、お父さん。そんなもんで腹なぐって、もし、康子まで死んだら。

父の声 こんなもなあ、死んでもええ、辰巳屋の娘とあろうもんが、ああ、死んだ方がましじゃ。ようもようも、朝鮮ヨボと。子供は絶対生ませんぞ、生ませるものか、叩

き殺してやる。わしが叩き殺してやる。

康子の声 やめて、やめてよ。(喚く音、物が飛ぶ音)

父の声 殺してやる。ようも辰巳屋に死ぬつたな、御先祖に恥しいと思わんか!

母の声 お父さん、氣い静めて、頼みます。お父さん、みんな私が悪いんじゃで。私が。

康子の声 何がお母ちゃんが悪いの。お母ちゃんには何の関係もないことよ。出てく

わ。今すぐ出て行く。すぐ出て行くわ。この子はね、え私の子よ。私の子なのよ。

和夫 お袋さん。

照明、現実にもどる。

和夫 もういいやないの。親子三人だけの新しい出発なんやから。な。

康子 そう……新しい出発、新しい出発よ。

新しい出発なの。……日本に生れた日本人が、自分の家からしめだされ、村から閉めだされ、自分の国から閉めだされて、新しい見たことのない国に出発するの。ただ、私はねえ、親にいつてやりたかったの、いえ、村の人に、日本中の人にいたかつ

たの。私は、今幸せだつて。……ほんと。

もう、ドブ屋をやり、都合によって日本人になつたり、朝鮮人になつたりする必要もない。誰にも気遣せず、ビクビクせず、今、人間としてはじめて対等に、誰にでもさよならといえるような気がするの。さよならつて。

和夫 そう、さよならだよ。この日本に。

康子 ……

和夫 さあ、みんなまってる。

康子 ……和夫、何ちう名前だつたね。

和夫 鄭生園。

河村 朝鮮語じゃ 鄭生園だ。

幕

太鼓の音が聞える

列車の轟音

「ニュース」を読んで

待たれていた総会後のニュースがタイムイン
グよく送ってもらえたので、この余白でお礼
を云っておきたい。

とくに「東リ演ニュース」59号(11月1日
発行)は二万六千字を超えるほどの内容で、
総会での発言のチープを、当然文章化の上で
の簡約はあるにしても、ほぼ完全に近いかた
ちでおこしてある。

総会がそれに備したかどうかは別として誰
かが印象的にまとめることでは何かが落ちて
しまう、そういういかにも黒字議長らしい配
慮から、そうなると自分でやるしかない、そ
の大作事をしてくれたのであった。

おかげで、もう一度、発言者の声や顔の表
情を思いおこしながら総会をやり直せるとい
う有難さを味えたが、説返してみても、本来具
体的であるべきいくつかのことが、どうもう
まい話に込んでいるという感じはした。

発言者は例外なく集団の指導部であり、エ
リートであるわけで、まとめ方がうまい。だ
から当然ある管の、集団内の弱さや恥部が、
傷口をあけているという風には出てこない。
弱者の発言がよわいのである。
議長団の丸子・柳津両氏のリードは先ず中
し分なかつた。

それにしても、問題点をグローバルにしめ
くくれるようにはまずすいかなくなってき
た。セミの分科会などでも焦点が出にくい
である。と云って、在るようにして在らしめ
よ、という風にもなれない。西リ演でも、西
リ演不要論なども出たようだが、一方、東西
リ演を待む心も、周辺ではむしろさかんであ
る。

危機感や自覚し得る者のみを持つるのであ
る。自分の仕事の質を、自分で、或は集団な
りで正確に判断できない限りダメなのだ。

西リ演ニュースは、ブロック別の各集団の
理りをわけた報告が役に立った。事務局の熱
心な掘り起しの成果と思ふけれど、それにし
ても、構成員の、ほぼ半数は逸しているの
である。本誌の「劇団通信」などもアンケート

はがきの半分以上はムダになっているので、
そのことでやかく云う気もない。それを必
要とするものだけが積極的になればいい、と
いうことで諦めが先に立ってしまった。

毎年のように云われている事務局への集中
の悪さも、それが免されていても活動にさし
て支障がないという、多様、拡散、地域分散
定着化の状況があるからである。他の劇団の
質の高い創造にふれても、さして刺激になら
ないということが当然の風潮になってきた。

勿論、裏返し現象もある。レパートリー
の伝播の速さもおどろくばかりだ。舞台の実
際をたしかめないで、その現象だけをとらえ
て批評することは慎むべきだが、同じレパ
ートリーで、よそはよそ、うちはうち、とい
うのは困るだろう。その作者が、そこでこ
そ本当の自分をみることでできたという何か
を差出す位の自信は持ってやって見せてほし
い。

それにしても、東リ演総会議案書のタイト
ル「攻める運動への転換」は言葉だけにおわ
らせたくない、なかなかいい発想だ。なしく
ずしでない、きびしい姿勢の創造だけが、そ
れにふさわしい実践である。(萩坂桃彦)

■あとがき■

◇毎年この時期の号は、八月の総会・セミの回顧を兼ねて、秋の公
演だけなわ、そのトピロのところ出るので、どっちつかずのものど
かしさが避けられません。いつも臆病がちに編集しておりますが、
本号ではいささか強気になりました。これなら大丈夫、大手を振っ
て歩きます。(岸本さん、大怪我の中、有難うございました)
◇「かわいた湿地」の掲載には作者からのためらいがありました。
しかし現在、はぐるまが岐阜演10周年記念例会にむけて燃えている
のですから、あなたが旧作とは云わせません。再読、三読。十分こ
んどの読者にこたえうると判断しました。ちなみに、往年の関芸上
演「湿地帯」(テアトロ・一九六三年一月)とは大分違います。
◇「戯曲特集号」が途絶えています。作品がないからとも云ってい
られなくなりました。目の届く、或は届くようにして戴く限り、読
み揃っています。来年には実現したいと思っています。(もも)

演劇会議 三十七号 一九七七年十一月十五日発行

定価 三五〇円(送料二二〇円)

編集委員

黒沢参吉・こばやしひろし
丸子礼二・仲 武司・土屋 清
岸本敏朗・萩坂桃彦

発行所

演劇会議 発行所

川崎市川崎区渡田四一―一三

萩坂方

電話〇四四(33)〇七七五

誌代銀行振込は川崎信用金庫小田支店一三三二七

古書籍全般

川崎駅東口・駅前大通り
ぶらぶら歩いて3分
工都の老舗・商品豊富

近代書房

〒210 川崎市川崎区砂子2-8-17
TEL 044 (222) 3 4 8 2